
Gakken Mook
スター☆トゥインクルプリキュア
STAR☆TWINKLE PRECURE
オフィシャルコンプリートブック
Official Complete Book
スタッフ&キャスト おつかれさま色紙
スタッフ&キャスト インタビュー
キラやば〜っ☆
な5人の軌跡を振り返る!
全49話 プレイバック
イラスト充実 キャラクターガイド

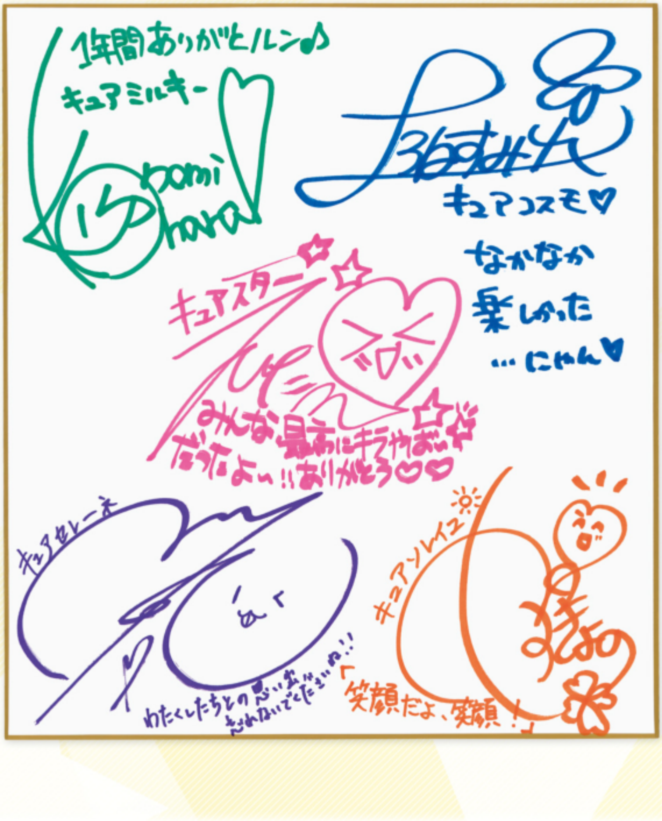
スター☆トゥインクルプリキュア オフィシャルコンプリートブック

Official Complete Book

Contents

キャストおつかれさま
寄せ書きサイン色紙

１年間の放送を終えたプリキュアの５人から、直筆サインと、
愛にあふれたメッセージが到着！



スタッフおつかれさま
寄せ書きイラスト色紙

『スター☆トゥインクルプリキュア』の製作に携わったスタッフが一筆入魂！
お気に入りのキャラクターはいるかな？



スター☆トゥインクルプリキュア
STAR☆TWINKLE PRECURE

Illustration Gallery

イラストレーション ギャラリー

『スター☆トゥインクルプリキュア』で描かれたイラストを掲載。
ひかるたちは様々な楽しい表情を見せてくれた。







★初出／前期番宣ポスターイラスト
原画／高橋晃



★初出／アニメージュ2019年7月号（徳間書店刊）
原画／東映アニメーション

★初出／Febri（フェブリ）Vol.56（一迅社刊）
原画／高橋晃





★初出／アニメディア2019年11月号（学研プラス刊）
原画／東映アニメーション





★初出／後期番宣スチール
原画／高橋晃



★初出／後期番宣スチール
原画／高橋晃

キュアスター

CURE STAR HOSHINA HIKARU 星奈(ほしな)ひかる

Character Collection 1

キュアスター

(声／成瀬瑛美)

中学２年生の少女・星奈ひかるが変身する星のプリキュア。星座が大好きなひかるがノートに描いた夢の星座そのままの姿で現れた妖精フワを、フワを狙う宇宙人・カッパードから守ると決意した瞬間、プリキュアに覚醒した。星のエネルギーをこめて打ち出すパンチ攻撃が得意。イメージカラーはピンク。モチーフとする季節は春。



宇宙(そら)に輝くキラキラ星！ キュアスター！

スターカラーペンダントをセットし、本作の最大の特徴"歌う"変身がスタート！

変身



キュアスターの技 プリキュア・スターパンチ



スターパンチは星形エネルギーを放つキュアスターの基本技。3種のプリンセススターカラーペンを使い、各星座の力を融合可能。



ひかるの特徴であるツインテールや髪飾りがボリュームアップ！

表情集



プリキュア・おひつじ座・スターパンチ



プリキュア・おうし座・スターパンチ



スカートはバレエのチュチュがモチーフで動きやすく。毛先を土星のようにまとめた髪形が特徴的である。

基本スタイル

トゥインクルスタイル



パワーアップしたフワの力を得て、グレードアップ。オーバースカートが付き、頭上にティアラも。

※トゥインクルスタイルの設定画はラフです。



プリキュア・うお座・スターパンチ

4人の合わせ技 プリキュア・サザンクロスショット

キュアスター、キュアミルキー、キュアソレイユ、キュアセレーネの4人が力を合わせ、南十字星形のエネルギー弾を放つ。



プリキュア・サザンクロスショット！

宇宙に輝け！イマジネーションの力！トゥインクルステッキ！

星奈ひかる

（声／成瀬瑛美）

星座と宇宙が大好きな中学２年生。興味があることに関しては好奇心旺盛で想像力も豊か。自由にイメージした星座をノートに描きとめるのが好きで、それをきっかけに宇宙から来たフワやララたちと出会うことになった。「宇宙に行きたい！」という熱い想いを持ち続ける。驚いたり感激したりするときのログセが「キラやば～っ☆」

キラやば～っ☆



表情集

ひかるの表情集。カチューシャに付いている飾りも、大好きな星がモチーフだ。



秋服

普段の私服であるブラウスとショートオーバーオールに、秋はざっくりしたパーカを重ねる。





冬仕様

寒くなったらネックウォーマーや手ぶくろで防寒する。

体操着

観星中学校の指定体操着。デザインは男女共通だが、袖部分の色が男子は濃いブルー。

制服

観星中学校の制服。丸いカラーが特徴的なセーラー服。

ひかるの家族



★星奈陽一
（声／大塚明夫）

★星奈輝美
（声／小島幸子）

大学教授を辞め、UMA研究の旅に出た父。まんが家として奮闘する母。自分の好きなことで頑張る両親をひかるは応援している。

ひかるのグッズ



★ひかるのノート
遼じいにもらったノート。想像の星座を描いている。

★スタードーナツ
ひかるが住む町・観星町の人気スイーツ。

★ポシェット
天文台に向かうときに持っていたポシェット。

★かき氷器
ロケットで暑い地球を脱出するとき、ひかるが持ち込んだ。

★望遠鏡
お父さんの書斎だった部屋で、天体観測に使う。

★自転車
フワのことを報告するため自転車で遼じいのもとへ。

★選挙ポスター
生徒会長に立候補したときの選挙ポスター。

★望遠鏡（リズムスコープ）
ララのロケットで宇宙に出たときに持っていたアイテム。

なりたい自分に

ひかるが描いたイマジネーション

「なりたいならさ、なればいいんだよ」と、ララに言ったひかる。では、ひかる自身が描いたなりたい自分のイマジネーションとは？



▲望遠鏡で見ていた大好きな宇宙。その宇宙にひかるは行きたかった



▲フワたちとの出会いで宇宙に行けたけど、自分の力で行くために……

15年後のひかる

15年後、ひかるは宇宙飛行士になっていた。きっと努力と経験を重ねて、誰だってなりたい自分になれることを証明してみせたのだろう。



ひかるのコスチュームバリエーション

さまざまなイベントを体験したひかるのカラフルなコスチューム。

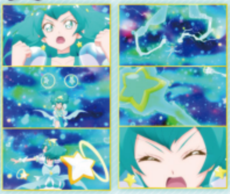





キュアミルキー
CURE MILKY
HAGOROMO LALA
羽衣(はごろも)ララ
Character Collection 2
ハートをモチーフにしたキュートな変身。
触角に懸命にチャージする表情もかわいい。
変身
スターカラーペンダント!
カラーチャージ!

天にあまねくミルキーウェイ！キュアミルキー！

キュアミルキーの技　プリキュア・ミルキーショック





電撃を放つ「ミルキーショック」が基本技。これに、３種のプリンセススターカラーペンの星座の力を融合させた３つの技もある。

キュアミルキー

（声／小原好美）

伝説の戦士・プリキュアを調査していた惑星サマーン出身のララが変身する天の川のプリキュア。フワを守りたいと願ったとき、キュアスターの「思い描くの、なりたいララちゃんを」という言葉に背中を押され、プリキュアに覚醒した。頭についた触角にエネルギーを集めて電撃を放つ。イメージカラーはミントグリーン。モチーフとする季節は夏。



アップになると、瞳のなかの流れ星が際立つ。

表情集



シースルーのパフスリーブやバルーンショートパンツが、可憐にして機能的なスタイル。

基本スタイル



プリキュア・しし座・ミルキーショック

トゥインクルスタイル



※トゥインクルスタイルの設定画はラフです。

ボリュームアップした髪にティアラを装着。フィッシュテールのオーバースカートも付いた。



プリキュア・かに座・ミルキーショック



プリキュア・ふたご座・ミルキーショック

羽衣ララ

（声／小原好美）

惑星サマーン出身。宇宙調査員として、フワやプルンスを助けながら、宇宙を救う伝説の戦士・プリキュアを探していた。惑星サマーンではすべての判断はAI頼みだったが、地球での経験がララを成長させていく。観星中学校に通うため、羽衣ララを名乗るようになった。語尾に「ルン」を付ける。

わたしは大人ルン！



表情集

先がとがった耳や、頭部から伸びている触角などがサマーン星人の特徴。



秋服

ワンピースはハイネックに、ジャケットは長袖になった。ブーツも防寒用に。





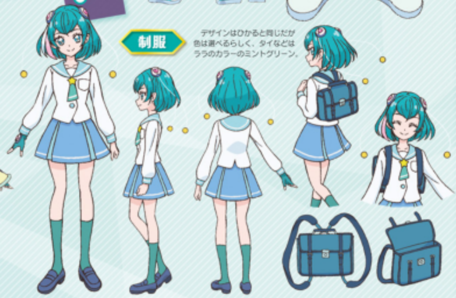
冬仕様

秋服に、帽子とマフラーを重ねた冬仕様。



制服

デザインはひかると同じだが色は選べるらしく、タイなどはララのカラーのミントグリーン。





★おにぎりのつつみ

ひかるがくれたおにぎりを背負って、ララは一緒に学校へ。

★モップ

学校の存在すら知らなかったララ。当然、モップの使い方もわからない。

ララのグッズ



★グローブ

ララが右手につけている端末。AIにリモートアクセスできる。

★コスモグミとケース

グミ状の宇宙食。ララが腰につけたケースに入っている。

★望遠鏡（リズムスコープ）

宇宙に出たときに持っていた。

ララのロケット

★AI（声／伊藤美紀）

ロケットに搭載された専用AI。データから効率優先の提案をする。



破損後、みんなの協力でリニューアル。派手な新色はひかるの案。

★リニューアルVer.

なりたい自分に

ララが描いたイマジネーション

プリキュアになれる確率はデータ上、ひかるもララもほとんどなかった。でも、ひかるはなれた。ララにたりなかったのは「なりたい！」と強く思い描くイマジネーションだ。





◀イマジネーションの力を教えてくれたひかる。「思い描くの、なりたいララちゃんを」
▼一番下のランク8の調査員だったララには、自分を信じる勇気が欠けていた



15年後のララ

ララは一人前の宇宙調査員になっていた。しかも、持ち込んだ地球文化の影響で惑星サマーンは活気ある星に変わり、ララは超有名に！



ララのコスチュームバリエーション

ひかるたちと一緒にララが体験した、さまざまなコスチューム。



ララの家族

父のトトはAIの研究者、母のカカはロケット工学の博士、双子の兄のロロはランク1の宇宙調査員。家族はエリートぞろいである。



キュアソレイユ

CURE SOLEIL
AMAMIYA ELENA

天宮(あまみや)えれな



変身



太陽のような炎が炸裂し、ダイナミックに変身していく。髪も華やかにボリュームアップ。

宇宙を照らす！灼熱のきらめき！キュアソレイユ！

キュアソレイユの技 プリキュア・ソレイユシュート





サッカーボールのように炎を蹴るソレイユシュート！　3種のプリンセススターカラーペンで星座の力を融合させる3つの技もある。

キュアソレイユ

（声／安野希世乃）

ひかるの先輩・天宮えれなが変身する太陽のプリキュア。えれなはキュアスターとキュアミルキーが戦う現場に遭遇。フワをおびえさせたテンジョウに怒り、「この子はあたしが守る」という気持ちでプリキュアへと覚醒した。身体能力にすぐれ、炎のエネルギー弾を蹴り出す。イメージカラーはイエロー。モチーフの季節は秋。

表情集



アメジストのような瞳の目力に圧倒される。眉も凛々しく！

基本スタイル



オレンジ系で統一されたコスチュームも太陽を連想させる。

トゥインクルスタイル



頭上にはティアラ、髪には星が加わった。ボリュームのあるロングドレスもゴージャス。

※トゥインクルスタイルの設定画はラフです。



プリキュア・てんびん座・ソレイユシュート



プリキュア・おとめ座・ソレイユシュート



プリキュア・さそり座・ソレイユシュート



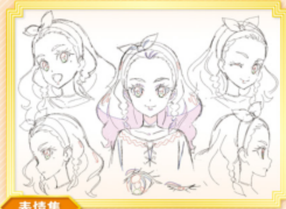
みんなが笑顔になればいいな

天宮(あまみや)えれな

(声／安野希世乃)

笑顔が素敵な中学３年生。陽気で魅力的な性格をしており「観星中の太陽」と呼ばれている。えれなが「チャオ！」と笑いかければ、ファンが身悶えするほど人気者だ。父がメキシコ人、母が日本人。生花店を営む父や通訳として働く母を助け、５人の弟や妹たちの面倒をよく見ている。大家族にあっても、まさに太陽のような存在だった。





表情集

左目の下の泣きボクロが印象的な、えれなの表情。



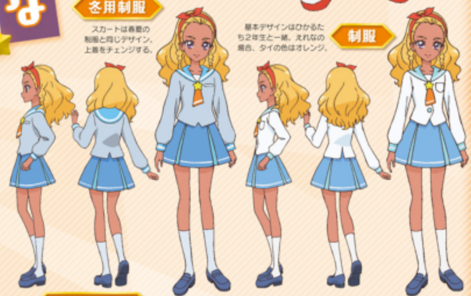
秋服

ふだんの私服も秋のセーターも、ステッチがアクセントになっている。



冬仕様

冬は、秋服の上にハーフコートをはおる。

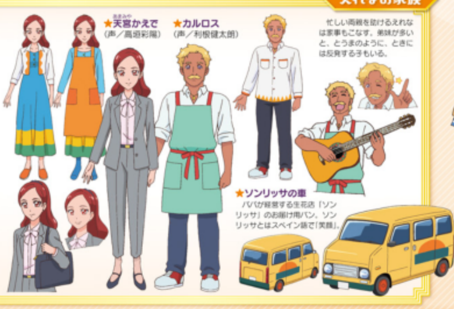


冬用制服

スカートは春夏の制服と同じデザイン、上着をチェンジする。

制服

基本デザインはひかるたち２年生と一緒。えれなの場合、タイの色はオレンジ。



えれなの家族

★天宮(あまみや)かえで
(声／高垣彩陽)

★カルロス
(声／利根健太朗)

忙しい両親を助けるえれなは家事もこなす。弟妹が多いと、とうまのように、ときには反発する子もいる。

★ソンリッサの車
パパが経営する生花店「ソンリッサ」のお届け用バン。ソンリッサとはスペイン語で「笑顔」。



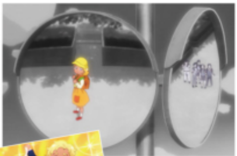
冬用コート

制服の上に着る通学用の冬用コート。

なりたい自分に

えれなが描いたイマジネーション

みんなの視線が気になった子どものころ、えれなを救ったのは両親の笑顔だった。テンジョウに心を折られそうになったとき、えれなは思い出したのだ。笑顔が持つすごい力を。









▶家族のことばかり考え、本音を隠すこともあったえれな。もっと自分に素直になっていい。母は、やさしい笑顔でそう教えてくれた

15年後のえれな

えれなは通訳になっていた。笑顔で頑張る母に憧れ、同じ仕事がしたいとイメージした未来を、えれなは歩んでいた。



えれなのコスチュームバリエーション

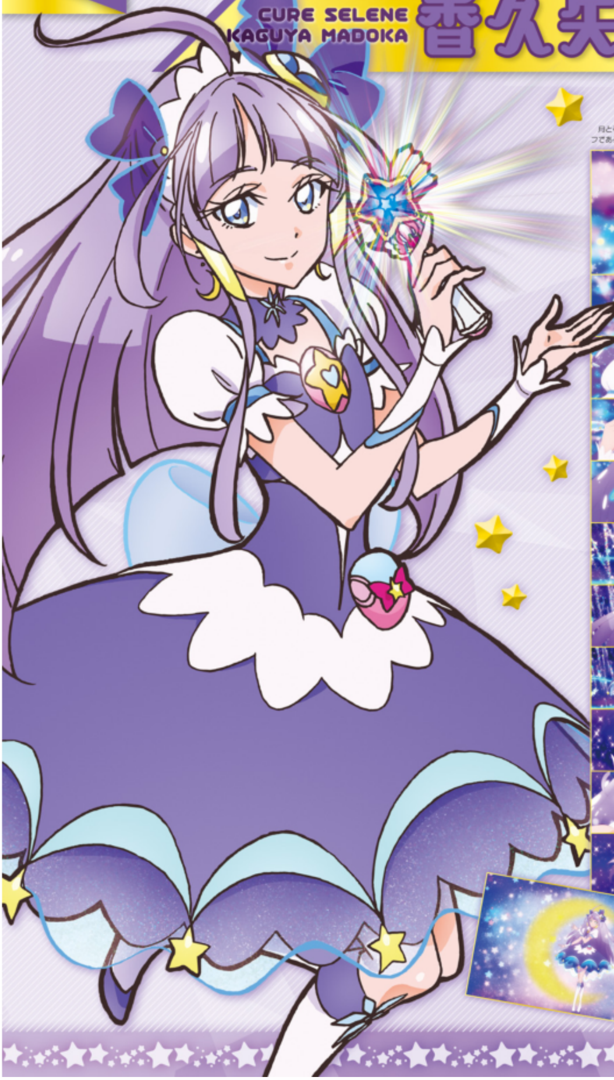
どんな衣装もかっこよく着こなすえれな。とくに王子はハマリ役♪





Character Collection 4

キュアセレーネ
CURE SELENE KAGUYA MADOKA 香久矢(かぐや)まどか



月と弓矢がシンボリックに登場し、モチーフである冬を象徴する雪の結晶がきらめく。

変身



夜空に輝く！神秘の月あかり！キュアセレーネ！

キュアセレーネの技　プリキュア・セレーネアロー

ギリシャ神話の女神・セレーネのごとく、月光の矢を放つ技がセレーネアロー。星座の力を使う技では、矢尻にその特徴が現れる。





キュアセレーネ

（声／小松未可子）

ひかるの先輩・香久矢まどかが変身する月のプリキュア。ララたち宇宙人の存在を政府の役人である父に報告しようとするが、ノットレイに襲われ震えるフワを放っておけず「この子はわたくしが守ります」と決意し、プリキュアへと覚醒した。弓道を活かした射出技が得意。イメージカラーはパープル。モチーフとする季節は冬。



月をかたどる髪飾りや、一束伸びた髪も印象的。

表情集



パフスリーブの清楚なワンピース。首元やひざに雪の結晶があしらわれている。

基本スタイル



プリキュア・やぎ座・セレーネアロー

トゥインクルスタイル



ティアラや、髪には星が付き、ドレスも優雅にグレードアップ。

※トゥインクルスタイルの設定画はラフです。

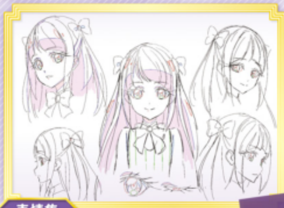


プリキュア・みずがめ座・セレーネアロー



プリキュア・いて座・セレーネアロー

すべてを完璧にこなさなくては……



表情集

サラサラヘアを斜め前髪やツーサイドアップでおしゃれにアレンジ。



香久矢まどか

（声／小松未可子）

観星中学校のひかるの1年先輩。校内では天宮えれなと人気を二分し、「観星中の月」と慕われている。文武両道。政府の高官で厳格な父の言葉に従い、何事にも完璧を目指してきた。ララたちの存在を父に告げるべきか悩み、葛藤するなかで父から自立していく。もの静かなお嬢さまに見えるが、宇宙オークションでハッタリをきかせるなど、度胸もある。



秋服

厚手の生地のワンピースにチェンジ。靴もショートブーツに。



冬仕様

秋服にケープを重ねた冬仕様。リボンは胸元に移動。

夏服

基本のワンピースに、夏のブラウスは半袖のパフスリーブになる。



制服

観星中の制服。生徒会長のソックスは、いつも落ちついた色。

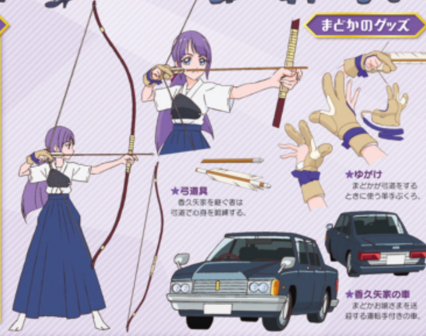


まどかの家族

★香久矢冬貴（声／成田剣）

父の冬貴は政府の高官、母の満佳は世界的ピアニスト。父は宇宙人を調査する職にあり、幾度となくララたちを捕まえようとしていた。

★香久矢満佳（声／椎名へきる）



まどかのグッズ

★弓道具

香久矢家を継ぐ者は弓道で心身を鍛練する。

★ゆがけ

まどかが弓道をするときに使う革手ぶくろ。

★香久矢家の車

まどかお嬢さまを送迎する運転手付きの車。

なりたい自分に

まどかが描いたイマジネーション

まどかは父が言うとおりに努力を重ねてきた。だが、ひかるたちと出会い、未来は自分でイメージするものだと気づいていく。



▶音楽は母の、弓道は父の、両親の希望に応えてきた優等生



◀フワの存在を、最初は父に報告するのが当然だと思っていた



▲父が望む留学をするか否かは自分で決めると、まどかは宣言した

15年後のまどか

まどかは父と同じ仕事に就いていた。それは父の意志ではなく、ひかるやララたちと宇宙を体験し、まどか自身が選んだ道だった。



まどかのコスチュームバリエーション

まどかのおしゃれはドレッシー。月をデザインしたものが多い。





◀▼冬貴の指示で、宇宙人に関する情報を収集・調査していた職員。しかし、ララのロケットは発見できなかった

キュアコスモ

Character Collection 5

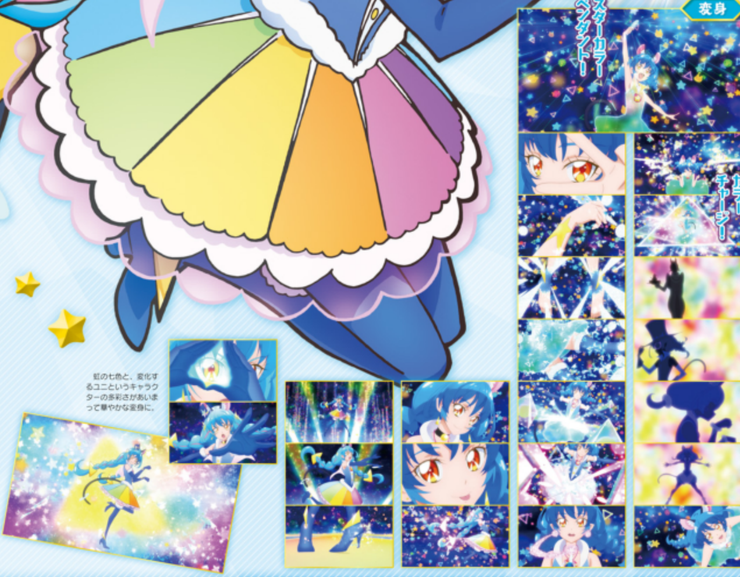
CURE COSMO UNI ユニ



キュアコスモ

（声／上坂すみれ）

　惑星レインボー出身のユニが変身する宇宙のプリキュア。故郷の星を救うため、ひかるたちからプリンセススターカラーペンとフワを奪うが、ノットレイダーの攻撃でピンチになったキュアスターたちを放っておけなかった。「みんなを守る！」。そう決意したとき、プリキュアへと覚醒した。イメージカラーはレインボー。サブカラーはブルー。



　虹の七色と、変化するユニというキャラクターの多彩さがあいまって華やかな変身に。

銀河に光る虹色のスペクトル！キュアコスモ！

キュアコスモの技 プリキュア・レインボースプラッシュ





プリンセススターカラーペンをセットし、虹色のエネルギーを放出して相手を浄化する。

キュアコスモの技 プリキュア・コスモシャイニング



レインボーパフュームから光のシャワーを放出し、相手を撃退する技。ひるませるだけで、浄化はできない。



ユニのブルーの髪が鮮やかな水色に変化する。

表情集

基本スタイル



虹色のスカートが特徴。マントがついているのはキュアコスモだけ。

トゥインクルスタイル



パワーアップでティアラを装着。背中のマントやスカートも変化。

※トゥインクルスタイルの設定画はラフです。

5人の合わせ技 プリキュア・スタートゥインクル・イマジネーション

成長したユニコーン型のフワと想いを重ねることで、5人のプリキュアがトゥインクルスタイルへとパワーアップ。12星座のエネルギーも加わる最強の技。









わたしは、わたし。

ユニ

（声／上坂すみれ）

惑星レインボーの出身。本来は猫型の獣人だが、地球では人の姿で活動している。石化された故郷の人々を復活させるため、宇宙怪盗、宇宙アイドル、そしてアイワーンの執事バケニャーンにも変化し、情報を集めた。ドライで一匹狼の雰囲気を醸し出すが、金魚に飛びつこうとするなど、猫属性の子どもっぽさも見え隠れする。

表情集

変化しても猫耳が残っている。ヒトの耳はうう同様に先がとがる。

秋服

長袖のシャツとファー付きのベストを重ねた。ブーツも秋冬用。

冬仕様

寒いときは、イヤーウォーマーを付けて冬仕様に。

ユニのグッズ

★香水
レインボー星人は変化能力を持つ。未熟な者だけが香水を使う。

★マタークッキー
猫が大好きなマタタビ入り携帯食。食べたフワはなぜか増殖した。

★ジェット型宇宙船
船に乗っていたユニは石化を免れ、闇に包まれる故郷を目の当たりに。

変化するニャン♪

宇宙アイドル マオ

ブルーキャットが狙う宝の情報を集めるためにアイドルになったら、大人気に！

★マオのハンドマイク
これがあれば、どこでも即ステージ♪

宇宙怪盗ブルーキャット

石化後に奪われた惑星レインボーの宝物とプリンセススターカラーペンだけを狙う怪盗。

★カード
お宝を頂戴に参上！予告状のカード。

★コンテナ
奪った宝物を運ぶ。

なりたい自分に

ユニが描いたイマジネーション

ユニは故郷の星の人々を石化したアイワーンを憎み、アイワーンはバケニャーンになって自分を欺いていたユニを憎む……。憎しみの連鎖は止まらない。だが、ユニは気づく。過去を断ち切り未来を描くイマジネーションの大切さに。



▲アイワーンの涙を見て、ユニは自分と同じ悲しみを知っていると思った



▶故郷を奪われ、幼いころから孤独だったアイワーン



◀仲間を失い、ひとりぼっちになったユニの悲しみ。もう同じ苦悩を繰り返してはいけない

15年後のユニ

大人になったユニは新しい星作りを目指していた。アイワーンと力を合わせ、惑星レインボーは土が豊かな星に変わりつつあった。



ユニのコスチュームバリエーション

初体験の地球のおしゃれもよく似合う。でも、やっぱり尻尾は隠せない。



レインボー星人

ユニの本来の姿。レインボー星人はすべて、その長であるオリーフィオの子。



バケニャーン

石化を解く方法を求め、ユニは執事に化けてアイワーンに近づく。



フワ

みんな仲よくするフワ！



フワ

（声／木野日菜）

スタープリンセスたちが生み出した妖精。不思議な力で、宇宙空間にワープホールを開くことができる。ひかるたちがお世話して、育てていった。スタープリンセスの力を解放するとき、フワは星座に応じて12変化する。語尾に「フワ」を付ける。



成長体



プリンセススターカラーペンが12本そろい、プリンセスがすべて戻ったとき、フワも角を持つユニコーンの姿になった。



スタープリンセスたちの力は、プリンセススターカラーペンとなって宇宙に散らばった。プリキュアたちがペンを回収すると、フワはそのペンが持つ星座パワーで変化し、プリンセスは元に戻ることができる。

フワいろいろ



★トナカイ



★ドレスアップ



★酔ったフワ



★ドン・フワフワの変装



★マタークッキー

ユニの携帯食をつまみ食いしたら、酩酊状態となりフワが増殖！

トゥインクルブックでお世話するよ♪

おやすみ

眠くなると、フワはトゥインクルブックのなかにあるベッドへ。





★ケーキ

★ハンバーグ

ごはん

スターカラーペンをセットして、アイテムを描くと、それが実体化！



トゥインクルブックはお世話機能付き。食事も出せるし、ペットにもなる。みんなでフワを育てた。



★トゥインクルブック

ひかるが祖父じいにもらったノートが、万能のお世話グッズに変化。

プルンス

Character Collection 7

青春でプルンス！



プルンス

（声／吉野裕行）

スタープリンセスたちに仕えていた宇宙人。フワを守りながら伝説の戦士・プリキュアを探していた。クラゲ状の体はプルプルで形を自在に変えられる。普段は円盤型のポッドに乗って移動。宇宙アイドル マオの大ファン。語尾に「～でプルンス」と付ける。

プルンスいろいろ



★毛むくじゃらプルンス
毛はえ薬でフサフサに。カッパードの攻撃を受けてもケガをしなかった。

★サンタ

★ぷるんすたードーナツ

★ドレスアップ
オークションにはプルンスもフワと一緒にドレスアップして参加。

★ハロウィンの仮装・バルーンマン

★クラゲ

プリキュアアイテム



★スターカラーペン
5人のプリキュアの変身アイテム。色は各イメージカラーと同じ。

キュアコスモ　キュアセレーネ　キュアソレイユ　キュアミルキー　キュアスター

★スターカラーペンダント
プリキュアの変身に使うインクボトル型のアイテム。スターカラーペンを差し込む。

★シャイニートゥインクルペン
プリンセススターカラーペンが12本そろって誕生。フワをパワーアップさせる。

★レインボーパフューム
ユニの香水ビンが変化し、キュアコスモの攻撃アイテムになった。

★トゥインクルステッキ
キュアコスモ以外の4人のプリキュアが使う攻撃アイテム。

★フォーチュンカプセルメーカー
弓道大会に出るまどかを応援するため、4人でおそろいのお守りを作った。

★フォーチュンカプセル

できる宇宙人！ のびのびプルンス♪

体を自由自在に変えられるプルンスは、その特技を活かしてひかるたちプリキュアのさまざまなピンチを救ってきた。プルンスのグッジョブをご紹介！



星空界（ほしぞらかい）

地球から遠く離れた宇宙の「星空界」で、ひかるたちが出会った星と人々を紹介する。

Character Collection 8



★うお座のスタープリンセス（声／大地葉）

★おひつじ座のスタープリンセス（声／小島幸子）

★おうし座のスタープリンセス（声／川澄綾子）

★みずがめ座のスタープリンセス（声／金香里）

★ふたご座のスタープリンセス（声／依田菜津）

★かに座のスタープリンセス（声／村川梨衣）

★やぎ座のスタープリンセス（声／林真里花）

★しし座のスタープリンセス（声／米澤円）

★おとめ座のスタープリンセス（声／近藤唯）

★てんびん座のスタープリンセス（声／ＭＡＫＯ）

★いて座のスタープリンセス（声／伊藤美紀）

★さそり座のスタープリンセス（声／遠藤綾）

スターパレス

星空界の中心部には、12星座のスタープリンセスたちが住み、全宇宙の均衡を保つ聖域・スターパレスがある。だがノットレイダーに攻撃されたスタープリンセスたちは、プリンセススターカラーペンに姿を変え、地球を含む星々へと散っていった。

★玉座の間

12個の玉座がある空間。ペンが回収されると、スタープリンセスたちの姿が戻る。

宇宙星空連合（うちゅうほしぞられんごう）

宇宙平和のために活動する惑星連合。未加盟の地球には映画監督アブラハムを仮の姿とした調査員を派遣していた。トッパー長官はプリキュアの力を認め、連合に勧誘したが断られている。



★ミニチュラ星人（P．P．アブラハムの宇宙人体）

★P．P．アブラハム（声／青山穣）

★トッパーのSP

★SPスマートウォッチ

★トッパー（声／辻親八）

★宇宙艦（空母）

ひかるたちが訪れた惑星




★クム（声／伊藤健太郎）

惑星クマリン

地表を宝石が覆い、重力は地球の2倍。天候が頻繁に変わる過酷な環境で生きていたのは、クマムシのようなタフな住人だった。



★ドギー（声／菊池こころ）

★ネギー（声／久野美咲）

★マギー（声／松本健太）

★長老（声／石原凡）



ケンネル星

ひかるたちが宇宙で最初に訪れた星。地表は骨で覆われ住人は毛並みが自慢。てんびん座のプリンセススターカラーペンがあった。




★オリーフィオ（声／宮田幸季）

惑星レインボー

オリーフィオを長とする獣人の星でユニの故郷。ブルーキャットが集めた宝の山の中にふたご座のプリンセススターカラーペンがあった。



★レインボー鉱石で作られた宝飾品



★衛兵

★採掘人



★レインボー星人



★ドン・オクトー（声／塾一久）

★オクトーの部下



ゼニー星

星全体が歓楽街。闇のオークションが開かれ、惑星レインボーの宝石や、いて座のプリンセススターカラーペンが出品されていた。



★宇宙ケルベロス

★ドラゴン兵

★シタコ・エーテル（声／斉藤貴美子）

★ドラムス（声／木村昴）




★ハッケニャーン（声／上田燿司）

ウラナイン星

トゥインクルイマジネーションのヒントを得ようと向かった、星読みのハッケニャーン。はユニがバケニャーンのモデルにした人物。



★へんしんじゅ

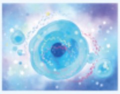
★フレア（声／廣田行生）

★ヤンヤン（声／西明日香）

★タツ（声／高橋伸也）

★タコリン（声／飯島肇）

★イカリン（声／下崎紘史）




プルルン星

惑星サマーンに向かう途中に立ち寄った、水の固まりの星。プラズマ星出身のフレアにララのロケットの修理を依頼した。



アイスノー星

雪と氷に覆われた星。みずがめ座のプリンセススターカラーペンは、ユキオが取り替えた卵のひとつだった。



★イルマ（声／藤井ゆきよ）

★ユキオ（声／杉田智和）




グーテン星

ロケットや円盤をマイクロ化するなど、科学技術が発達した未来都市。鼻が高いことがステータスになる、テンジョウの故郷だった。

★グーテン星人

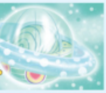


★ホバーボード

★警備員

★サマーン星人

★クク（声／加藤亮夫）



惑星サマーン

ララの故郷。科学技術が発達し、AIによって管理されている。ララの兄ロロが、かに座のプリンセススターカラーペンを発見した。

観星中学校&観星町の人たち

Character Collection 9

ひかるたちをとりまく学校の仲間たちや、町の人々を紹介する。観星中学校は男女共学。観星町は緑豊かで、山の上には天文台もある住みやすそうな町だ。

観星中学校



観星町ハロウィン仮装コンテスト



観星中学校の教師



ゲストキャラクター

Character Collection 10

観星町や宇宙で、ひかるたちが一度だけ出会った個性豊かな人たち＆宇宙人。



★撮影用の妖怪の着ぐるみ（12話）

アブラハム監督が撮影する映画で、ひかるたちと共演した妖怪。



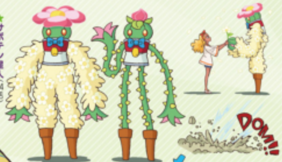
★那須ゆみか（声／小市眞琴）（16話）

全国弓道王大会決勝戦で、まどかと優勝を競った強者の少女。



★追川夢男（声／下崎紘史）（18話）

ひかるの母・輝美の担当編集者。連載を目指しハッパをかける。



★サボテン星人（34話）

宇宙星空連合の調査員・サボローと勘違いされた宇宙人。地球語を話せないが、えれなとはわかりあえた。





★サボテン星人の宇宙船



観星町

★空見遼太郎（声／多田野曜平・幼少期／藤原亜湖）

天文台の管理人。ひかるに子どものころから「遼じい」と呼ばれる。



★若いころの遼太郎



★サンター星人（声／林勇）（44話）

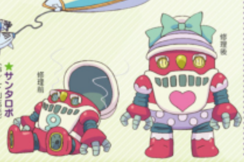
クリスマスにやってきた軽いノリの宇宙人。



★プレゼント



★サーフボード型宇宙船 トナカイ・ソリ



★サンタロボ（声／下山吉光）

宇宙船が墜落し、サンター星人の相棒のロボットも故障。ひかるたちがプレゼント配りを手伝うことになった。



★星空刑事 メリー・アン（声／知念里奈）（36話）

正義感は強いがドジな星空刑事。オークション会場でブルーキャットの確保に失敗した。



★アンの宇宙船

★掃除のおねえさんに変装



★スタードーナツ店の店長（声／合田絵利）

★ハロウィンの仮装・ドーナツ



★女子高生

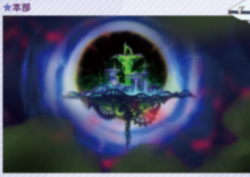
★審査員

ノットレイダー

Character Collection 11

伝説の戦士・プリキュアが宇宙を守るために戦ったノットレイダーとは、どんな組織だったのか。主要メンバーを紹介する。

★本部



★アダムスキー型宇宙船

メンバーの移動手段。宇宙のどこかにある本拠地から瞬間移動が可能。

ノットレイダー

ダークネストが率いる組織。スターパレスを襲撃し、逃したフワを追って地球にやってきた。主要メンバーは4人。故郷を失った者たちや自ら故郷を捨てた者など、居場所をなくした者たちが集まっている。全宇宙の支配を目論む。

アイワーン

（声／村川梨衣）

生意気で冷徹なひとつ目の宇宙人。語尾に「だっつーの！」を付ける。天才科学者で、プリンセススターカラーペンを闇に染めたダークペンでノットリガーを操る。惑星レインボーを石化したことで、ユニとの間に確執を生んだ。



★回想のアイワーン

★パーカ姿

★15年後のアイワーン

ユニと和解し、その優秀な頭脳で惑星レインボーの再生に貢献。

★バケニャーン（声／上田燿司）

アイワーンの執事。その正体はユニの変装だった。信頼する側近にだまされて、アイワーンは逆上。

★アイワーンが開発したアイテム

惑星レインボーで手に入れたこの星の宝飾品が、アイテム開発の軍資金になった。



★ユニの宇宙船を改造したアイワーンの宇宙ジェット

★ダークペン プロトタイプ

★ダークペン（闇に染められたプリンセススターカラーペン）

★闇のインクつぼ

★宇宙ジェットのコントロールパネルとバッテリー

★ヒットレーダー

カッパード

（声／細谷佳正）

水陸宇宙両生の宇宙人で、誰に対しても優越感を見せるナルシスト。戦闘員ノットレイを率いて、自らもブレードを手に戦う武人タイプ。水をブレードにまとわせ「カッパード・ストライク」という技を放つ。水のなかで英気を養う。



★パワーアップ武器

★カッパードの武器

ダークネストに力を与えられ、歪んだイマジネーションをブレードに取り込んでいった。



★ドラムスVer.

★サーフボードVer.

★イエティVer.

★フワVer.

★冬貴Ver.

★ヤンヤンVer.

★桜子Ver.

★隕石（いんせき）Ver.

★カッパードVer.

▲▼カッパード自身の歪んだイマジネーションを取り込んだ武器

★治療中

プリキュアのトゥインクルイマジネーションで浄化され傷を癒す。



★ヨロイ

量産されたダークネストのヨロイを着用し、怒りを増幅されたことで暴走モードに。

★暴走モード

ダークネストの正体は……!



ダークネスト

（声／園崎未恵）

宇宙支配をもくろみ、闇の力で多くの星を滅ぼしてきた。一度は失敗したスターパレスへの再度の総攻撃を狙う。ヨロイで素顔を隠す。

★へびつかい座のスタープリンセス

（声／園崎未恵）

12星座のスタープリンセスたちと意見が対立し、袂を分かったスタープリンセス。彼女は新しい宇宙を創るため、ダークネストに姿を変えて現在の宇宙を抹消しようとしていた。

★最終形態

最終決戦では、闇の力を最大に増幅させて、プリキュアたちの前に姿を現した。



ガルオウガ

（声／鶴岡聡）

ノットレイダーの最高幹部。故郷の星を滅ぼされた過去を持つ。冷徹で厳格だが、同じ境遇のカッパードたちのまとめ役として信頼されている。並外れたパワーを持ち、プリキュア5人を相手にしてもひるまない。

★ヨロイ

★暴走モード

ダークネストのヨロイを着用し、歪んだイマジネーションが最大級に強化されて、最凶の存在になった。

★宇宙服

ダークネストの闇の力を失い、宇宙で戦うには宇宙服が必要に！

★治療中

ダークネストのヨロイだけが浄化され、命は救われた。

テンジョウ

（声／遠藤綾）

天狗のような宇宙人。プライドが高い。戦闘員ノットレイを「コマちゃんたち」と呼んで組織化し、指揮をする。ダークネストの力でパワーアップした団扇を使い、歪んだイマジネーションを増幅させた巨大ノットレイを操る。

★テンジョウが乗るみこし

★パワーアップ武器

★ジョー・テング先生

英語教師に変装してえれなに接近、内面を突く策略家でもあった。

★ヨロイ

ダークネストのヨロイで歪んだイマジネーションを強化され、暴走モードでプリキュアと戦う。

★治療中

★マスクを取ったテンジョウ

マスクを取ると、地球人に似た顔立ち。

★暴走モード

ノットレイ&ノットリガー ＋アイワーンロボ

Character Collection 12

ここではノットレイダーの戦闘員を紹介。ノットレイや巨大ノットレイ、ノットリガーなど、闇の力が生み出す怪物たちは多彩だ。

怪物たちの作り方

ノットリガー

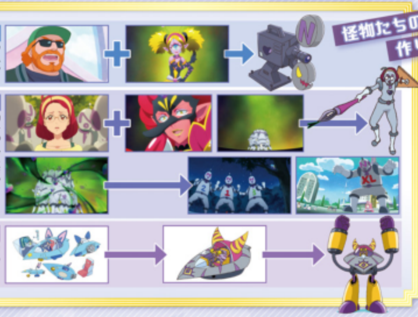
アイワーンがダークペンで、対象となる人間のイマジネーションを黒く塗りつぶす。

巨大ノットレイ

テンジョウが闇の力で、歪んだイマジネーションを増幅させてつくる。地球人や異星人をもとにする場合と、ノットレイを巨大化させる場合の2パターンがある。

アイワーンロボ

ユニから奪った宇宙船にアイワーンの歪んだイマジネーションを注入してロボット化。





ノットレイ

いわゆる一般兵。アイワーンが開発したスーツとマスクを着用すると誰でもノットレイになれる。ひかるの夢のなかで、ひかるの父・陽一も拾ったマスクでノットレイ化していた。

ゆみかノットリガー（16話）



アブラハムノットリガー（12話）



遼太郎ノットリガー（6話）



輝美ノットレイ（18話）



とうまノットレイ（14話）



桜子ノットリガー（9話）



石化レインボー星人ノットリガー（19話）



ドラムスノットリガー（15話）



3人合体ノットリガー（11話）



校長ノットレイ（39話）



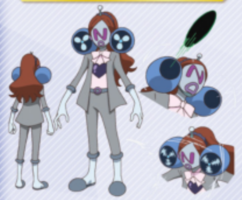
アイワーンノットリガー（20話・21話）

ダークペンで自分をノットリガーにしたアイワーンは、ダークネストに強化され暴走。

★強化版



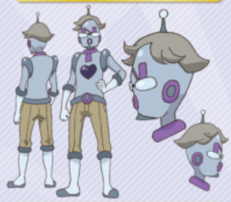
かえでノットレイ（42話）



ククノットレイ（29話）



春吉ノットレイ（22話）



テンジョウノットレイ（43話）



サボテン星人ノットレイ（34話）



イルマノットレイ（24話）



ノットレイヨロイ（46話）

ノットレイが着用したダークネストの量産型ヨロイ。プリキュアを圧倒する力を持った。

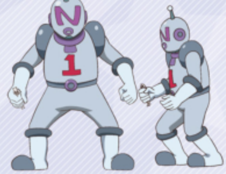


オクトーノットレイ（36話）

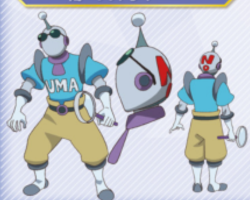


巨大ノットレイ（25話）

※30話は「XL」Ver.



陽一ノットレイ（49話）



アイワーンロボ23号（38話）



アイワーンロボ16号（27話）



Guide ストーリーガイド 1話〜49話

宇宙の支配を企むノットレイダー。彼らの野望から宇宙を守るために戦う伝説の戦士プリキュア。仲間と絆を育み、イマジネーションをきらめかせる彼女たちの出会いと別れを描いたすべての物語をプレイバック。

1話 キラやば〜☆宇宙に輝くキュアスター誕生！





▲ロケットに乗っていたララとプルンス。フワは、ふたりの危機を察知してロケットを地球へワープさせたのだ



星座と宇宙が大好きで想像力豊かなひかるの宇宙を翔ける大冒険が開始

星奈ひかるがオリジナルの星座を描いているノートから妖精フワが飛び出す。フワは、地球と宇宙を行き来するワープの力を持っていた。ふたりがピクニックをしていると、目の前にロケットが着陸する。そこから現れたのは、フワと一緒に「伝説の戦士プリキュア」を探す旅をしていた宇宙人のララとプルンス。さらにそれを追って、フワの力を悪用して全宇宙を手に入れようとしている宇宙人の組織「ノットレイダー」の幹部であるカッパードも出現。フワを連れて逃げ出すララとプルンスのロケットにひかるも乗り込んで宇宙へ。ひかるは、フワを守ろうとする強い想いからキュアスターに変身。カッパードを退けたが、4人を乗せたロケットは地上へ落ちてしまう。

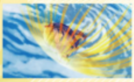




▲カッパードの攻撃で窓が壊れたロケットから吸い出されたフワを追って、ひかるも真空の宇宙空間へ飛び出した



▶スターカラーペンダントとフワの力で、ひかるとララは言葉が通じあうようになった







▼▶ペンやペンダントと同時に生まれたトゥインクルブックはフワのお世話用アイテム





2話 宇宙からのオトモダチ☆キュアミルキー誕生！

確率なんて関係ない！ プリキュアになるために必要なのは想いの力

故障したロケットの修理をするララは、なぜ自分ではなくひかるがプリキュアになれたのかを悩む。一方ひかるは、プルンスから宇宙で起きていることを聞いた。宇宙を見守る12星座のスタープリンセスは「星空界」の中心にある「スターパレス」を襲うノットレイダーを追い払ったが、ペンに姿を変えて宇宙中に散り、それを集めなくてはならない。カッパードが再びフワを狙って襲撃。ララは可能性がほぼ0というデータからプリキュアになるのを諦めかける。だが、キュアスターの声援に勇気をもらったララが「フワを守りたい」と強く願うとスターカラーペンとスターカラーペンダントが誕生。ララが変身したキュアミルキーの攻撃でカッパードを退けた。





◀AIが計算した「プリキュアになれる可能性」はひかると同じなのに「なぜ自分でないのか」と悩むララ











◀ペンダントは全員共通だが、ペンは各自専用。キュアミルキーのペンはミントグリーン





◀▲頭部から左右に伸びる星型のセンサーから強烈な電撃を放ち、ハート形のシールドも作り出せる



【2話 STAFF】 脚本／村山功 原画／和田喜彰、藤井晃穂、川島太郎、中澤あこ、遠藤香、小林静梨奈、志賀祐香、榎本勝紀、杉岡誠 背景／ビックスタジオ、関根悠加、北原太郎、永原かれん、田中愛、藤井かおり、増田竜太郎、いいだりえ、佐藤千恵 エンディング ディレクター／児玉徹郎 エンディング デジタルアーティスト／たかあき、下崎由加里、池田高史、宮澤孝介、坪川尚史、小池和正、上郷健太郎、中谷純也 演出助手／村上環 製作進行／東雄太 美術／大西穣 作画監督／高橋晃 演出／畑野森生

【1話 STAFF】 脚本／村山功 原画／高橋任治、宮甘美也子、松田千織、屋川信秀、安田陽子、廣中美佳、嶋崎節子、本吉信、丸山正彦、冨士池圭悟、薮花井克美、森宗弘樹、上野ケン、大久保祐介、Toei Phils.、大塚健、鈴木陽輔、杉江敏治、貞北恭太、井上和俊、木島勇太、片山徹介、高山さくら、横屋健太、近藤子、池田早香、金久保典江、石川てつや、屋野守、藤原未来夫、清野裕一 背景／増田竜太郎、いいだりえ、飯野敏典、佐藤千恵、田中里緒、本間禎章、山下千歌、長西美那、西田渉、Toei Phils.、Nielito Acuña エンディング ディレクター／児玉徹郎 エンディング デジタルアーティスト／坪川尚史、小池和正、上郷健太郎、中谷純也、たかあき、下崎由加里、池田高史、宮澤孝介 CGディレクター／町田政彌 デジタルアーティスト／竹内和雄、向井釈海、長谷見直季、目井麻希、富安勝人、海老沢大生、陳鵬 演出助手／馬戸谷一歩 製作進行／田口美月 美術／増田竜太郎、いいだりえ 作画監督／上野ケン 演出／宮元宏彰



Story

宇宙へ飛び出すプリキュアの活躍を振り返るフワ♪

3話 プリキュア解散!? スタープリンセスの力を探せ☆

ペンを手に入れて新たな技が加わり ひとり目のスタープリンセスが復活

突然ひかるのペンダントから音が流れる。スタープリンセスの力を宿したペンがある方向を示すようだ。情報を分析してから調査したいララと、動きながら考えたいひかる。言いあいするふたりだが、フワの仲裁で仲直りし「おうし座のプリンセススターカラーペン」を見つけた。そこに現れたノットレイダーのテンジョウにペンを横取りされたが、キュアスターとキュアミルキーの攻撃で奪還。ペンによってパワーアップしたキュアスターの一撃でテンジョウは退散した。スターパレスに戻ったおうし座のスタープリンセスは、残り11星座のスタープリンセスの力を宿したペンを見つけ出さないと星々は消えると話す。ひかるとララは、宇宙もフワも守ると誓った。



▲ペンがある方向を探知するときは、手に持ったペンダントを方位磁石のように水平に動かす

◀キュアスターが入手。通常のスターパンチで放つ星型エネルギーは黄色だが、このペンはピンク色



▲▶観星町商店街の名物で、ひかるの好物でもある「スタードーナツ」は、宇宙人たちもお気に入り

▼スタープリンセスが戻ったスターパレスへは、その星座の扮装をしたフワが導く

4話 チャオ! きらめく笑顔☆キュアソレイユ誕生!

太陽のように明るい笑顔で人気者のえれながプリキュアのメンバー入り

ひかるが通う観星中を見学するララとプルンスは、そこで「観星中の太陽」と呼ばれて多くの生徒に慕われる天宮えれなを目にする。そのころノットレイダーのアジトでは、ガルオウガがプリンセススターカラーペンを探し出すことを部下に指示していた。放課後、えれなの家を訪れたひかるとララは、明るい弟妹の姿を見て、えれなの周りには笑顔があふれていると知る。帰り道、ペンを狙うテンジョウがひかるとララを襲撃。異変に気づいて駆けつけたえれなが「フワの笑顔を守る」という想いを燃えあがらせると、スターカラーペンとスターカラーペンダントが生まれ、彼女はキュアソレイユに変身。ノットレイ軍団を一気に倒されたテンジョウは退散した。



▲▶えれなは、観星中学校の人気者。いつも大勢のファンに囲まれている

◀えれなの実家は、フラワーショップ

◀プリキュアとテンジョウの戦いを見たえれなは、最初は足が震えたもののフワを守るために勇気をふりしぼった

▼太陽のように燃えさかる炎の球を生み出して、それを相手に向かってキックするキュアソレイユの攻撃技



▲ひかるが「おうし座ペン」でトゥインクルブックに描いて生まれたものをフワに与える

【4話 STAFF】 脚本／村山功 原画／宍甘美也子、藤原未来夫、小泉貴之、芹田明雄、野道美智子、佐々木睦、福島恵次、斉藤伸子、冨木由美子、本吉悟、原田節子、レジー・マナバット、松田千織、フランクリン・タマング、山岡直子、和田直也、藤井芳徳、川島太郎、志賀祐香、中澤あこ、遠藤香、小林静梨奈、佐久間信一、根本諒紀、山本正和、丸山匡彦、高野德、岩田景子、小川貴弘、三浦綾、岡田宗樹、田中愛美 背景／飯野敏典、西田涌、本間禎章、土居ゆりの、飯野いずみ、山下千歌、山口大悟郎、上原里香、田中聖綾、清野英次、塩田竜太郎、佐藤美幸、いいだりえ、Toei Phils.、Dhavee Morato、Dino Santos エンディング ディレクター／児玉徹郎 エンディング デジタルアーティスト／たかおき、下崎由加里、吉田寛史、宮澤孝介、坪川尚史、小池拓征、上畑健太郎、中谷尚也 演出助手／都築悠一 製作進行／星野和也 美術／飯野敏典 作画監督／赤田信人、高橋晃 演出／平池綾子

【3話 STAFF】 脚本／村山功 原画／青山充、浦野裕一、田中伸都 背景／studio AR.T.ON、柳穗錫、黃浩瑜、張柱熙、崔秀真、高智榮、朴吉用、安恩俊、李智恩、増田竜太郎、いいだりえ、佐藤千恵、西田涌、Toei Phils.、Ruben Orense CGディレクター／町田政彌 デジタルアーティスト／竹内和雄、向井祝海、長谷見直季、笹井麻希、冨安勝人、海老沢大生、ダリル・パドゥア、レスト・ベルナルド、ディンド・タグバシ 演出助手／山村のどか 製作進行／堀越圭文、間藤雄亮 美術／李凡善 作画監督／青山充 絵コンテ／宮元宏彰 演出／ひろしまひでき

ヒミツの変身☆お嬢さまはキュアセレーネ! 5話

「観星中の月」と呼ばれる清楚なまどかが4人目のプリキュアに変身

生徒会長を務める香久矢まどか。フワとララが宇宙人だと察知した彼女は、それを宇宙人を捜査する父に報告すべきか迷っていた。ひかるは、ララのロケットを見つけたまどかに「フワを守りたいので誰にも言わないで」とお願い。そこへテンジョウが現れる。フワを連れて逃げるまどかに「フワを守りたい」という気持ちが芽生えた。するとスターカラーペンとスターカラーペンダントが生まれ、まどかはキュアセレーネに変身。増援したノットレイを一撃で撃破されたテンジョウは退散した。騒ぎを聞きつけたまどかの父が現れるが、まどかは「何もない」と嘘をつく。父を偽るのが心苦しいまどかは、早く騒ぎを収めるため、ひかるたちに協力することにした。











▲まどかは、弓道の全国大会で優勝する腕前。しかし、フワたちのことで心が乱れ、的に命中しない



▲ひかるが「おうし座ペン」を使って実体化させたもの。ひかるがビンを持ってフワに飲ませてあげた







◀ひかるは、えれなとまどかを「先輩」から「さん」付けで呼ぶことに。ララは名前をそのまま呼ぶ

闇のイマジネーション!? ダークペン出現! 6話

人間を怪物に変える新たな敵が登場 4人のチームワークでペンを奪還!

ひかるたちは、ひとりでロケットの修理をするララを気分転換させるために天文台へ。ひかるが「遼じい」と呼び慕う管理人の空見遼太郎は、ララをプラネタリウムへ招くと、「星座は人と人のつながりのようだ」と話す。そこに新たなノットレイダーのアイワーンが現れて、プリンセススターカラーペンを闇に染めた「ダークペン」を使って遼じいを怪物「ノットリガー」に変える。プリキュアは、力を合わせてダークペンを取り戻し「しし座のプリンセススターカラーペン」を復活させた。遼じいももとに戻りアイワーンは退散。しし座のスタープリンセスもスターパレスに戻る。仲間の大切さを知ったララはロケットの修理をみんなに手伝ってほしいと願った。





▶ロケットの修理でイライラしているララを天文台へ連れ出して、リフレッシュさせる







▶アイワーンが手にするダークペンによって遼じいが天体望遠鏡の形をした怪物に







◀キュアミルキーが取り戻したダークペンがもとの姿に戻り、スタープリンセスも復活





ワクワク! ロケット修理大作戦☆ 7話

飾り気がまるでなかったロケットをみんなのアイデアでかわいく大改造

残り10個のプリンセススターカラーペンを探すために、ひかるたちはロケットの修理に取りかかる。AIの分析による役割分担で掃除係になったひかるは、作業に飽きてトゥインクルブックにロケットの絵を描く。それを気に入ったみんなは、ロケットを絵の通りに改造することにした。内部には4人それぞれの部屋も作って、いよいよ完成目前。そこへテンジョウが襲ってくる。だが、結束が高まったプリキュアはノットレイの集団を簡単に撃破し、テンジョウは退散。ロケットの修理が完了し、ついにロケットは飛びたつ。宇宙空間でえれなのペンダントが「てんびん座のプリンセススターカラーペン」に反応し、ロケットはフワの力で星空界へワープした。





▲ララが「しし座ペン」で描いたもの。ララは「どうぞルン」と言って食べさせてあげた







▼ひかるが描いたロケットの絵にえれな・まどかの意見を加え、ララも大いに気に入った







◀かわいいリボンの飾りとピンク色に塗装されたロケットが星空界の宇宙空間へ!

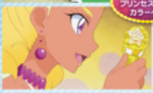
【7話 STAFF】 脚本／山田由香 原画／[illegible] studio ART.ON [illegible] エンディング ディレクター／[illegible] エンディング デジタルアーティスト／[illegible]

【6話 STAFF】 脚本／小林雄次 原画／[illegible] Toei Phils.、Ewin Sadia [illegible] エンディング ディレクター／[illegible] エンディング デジタルアーティスト／[illegible]

【5話 STAFF】 脚本／村山功 原画／[illegible] FAI BEEP [illegible] いいだりえ CGディレクター／[illegible] デジタルアーティスト／[illegible] エメット・メネス、ジェトロ・サイソン、キム・バンテ、ダンテ・カンバレJr. 演出助手／[illegible] 製作進行／[illegible] 美術／[illegible] 作画監督／[illegible] 絵コンテ／[illegible] 演出／[illegible]

8話 宇宙へGO☆ケンネル星はワンダフル!







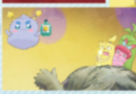
▲ケンネル星人が毛むくじゃらなのは、雨のように降る小骨に耐えるため。えれなは即効性毛生え薬をもらった

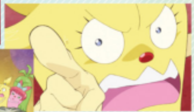




▲ケンネル星人が「聖なる骨」と呼ぶペンがえれなに託され、スタープリンセスが蘇った







◀薬で毛むくじゃらになったプルンスが盾になり、カッパードの攻撃からケンネル星人を守る

ペンを大切にするケンネル星人にはペンを欲しがるプリキュアも悪人!?

てんびん座のプリンセススターカラーペンを追いケンネル星へきたひかるたち。ペンは住人であるドギーの先祖を祭る像の飾りになっていた。プルンスはペンを取れと言うが、えれなは友達になったドギーたちが大切にしているため奪えない。そこへカッパードが現れペンを奪おうとする。ドギーにはプリキュアもカッパードもペンを狙う悪者だ。だが強引だったことを謝るプルンスと、ドギーたちの笑顔を守ろうとするキュアソレイユの姿を目にしてドギーの心が動く。彼にペンを託されたキュアソレイユは、てんびん座のプリンセススターカラーペンの力を使いカッパードを吹き飛ばす。てんびん座のスタープリンセスが復活し、一行はケンネル星をあとにした。

9話 友情のリング!スタードーナツ☆



▲えれなが「てんびん座ペン」で描いたもの。膝の上に座らせたフワに食べさせてあげた



▶まどかは、父に心の乱れを気づかれまいとするプレッシャーからミスを連発してしまう





◀初めて観星町商店街を訪れたまどかは、ショーケースのスタードーナツに目を輝かせた





▶ダークペンがもとの姿に戻り、やぎ座のスタープリンセスも無事スターパレスに蘇った







多忙過ぎて寄り道をしたことがないまどかがスタードーナツを初体験♪

まどかは、勉強や生徒会に習い事と、毎日忙しい。そのうえプリキュアやララたちのことを父に隠している心労もあり、うっかりミスが増えてきた。それを察知したひかるは、気分転換のためにまどかを商店街へ連れ出す。初めて食べたスタードーナツのおいしさに感動するまどか。そのとき、まどかのペンダントが生徒会役員の姫ノ城桜子をノットリガーに変えたアイワーンのダークペンに反応。キュアセレーネがアイワーンの手から打ち落としたペンは「やぎ座のプリンセススターカラーペン」に戻る。その力でノットリガーの桜子を元に戻すと、アイワーンは退散。やぎ座のスタープリンセスも復活した。距離が縮まった4人は下の名前で呼びあうことにする。

10話 キラッキラ☆惑星クマリンへようこそ!



◀3幹部は、まだ目覚める前のダークネストから力を授けられて、大幅なパワーアップを果たした



◀ひかるが「おうし座ペン」で描いたもの。お腹をすかせたフワは一口で食べてしまった







▶全身が緩けた4人をプルンスとロケットが救出
◀地球に帰還するところをまどかの父が目撃した





▲惑星クマリンにあったペンを暗黒に染められ「おうし座ペン」を奪われたキュアスターは大ショック

ノットレイダーの3幹部が繰り出す猛攻撃でプリキュアが大ピンチ!!

ひかるは、遼じいが好きな星座・サザンクロスの絵を描くために宇宙へ行くことを提案。ひかるに押し切られる形でみんなが宇宙へ出ると、ペンダントが反応しフワの力で星空界へワープ。ロケットは惑星クマリンへ到着した。この星でクマリン星人のクムと知りあったひかるたちの前にノットレイダーの3幹部が現れる。彼らの猛攻撃でプリキュアは大ピンチに。アイワーンに新たなペンを横取りされたうえ、なんとキュアスターはおうし座のプリンセススターカラーペンをカッパードに奪われる。ララの機転で呼び寄せたロケットに飛び乗って惑星クマリンから脱出した一行。ところが、地球に戻ったロケットが着陸する様子をまどかの父に見られてしまった。

【10話 STAFF】 脚本／村山功　原画／金内恵美里、角田栄央、小谷ひとみ、杉山さよ、小川祐紀、入江綾子、牧野大輔、高橋詩奈子、長澤康也　背景／いいだりえ、山下千歌、佐藤千恵、土居ゆりの、西田渚、増田竜太郎、山口大悟郎、上原里香、ビック・スタジオ、北脇太郎、永原かれん、Toei Phils.、Nelito Acuña　エンディング ディレクター／児玉健郎　エンディング デジタルアーティスト／たかおき、下崎由加里、池田裕史、宮澤孝介、坪川尚史、小池利江、上垣健太郎、中谷純也　製作進行／肥留川知明　美術／いいだりえ　作画監督／下谷美保、藤崎真吾　演出／村上貴之

【9話 STAFF】 脚本／平見瞠　原画／児玉美也子、田中伸昭、高橋任治、西口智也、塚川貴男、高山さくら、安田陽子、廣中美佳、冨木由美子、佐々木陽、近藤子、鈴木勇、森宗弘樹、上野ケン、小泉貴之　背景／倉橋隆、青柳ゆづか、清野英次、栗西英郎、小野寺美由紀、土井裕子、陳莉佳、西田渚、佐藤美幸、増田竜太郎　CGディレクター／町田政彌　デジタルアーティスト／竹内裕謙、向井潤、長谷見尚季、堀井麻希、冨安勝人、海老沢大生、エメット・メネス、ジェトロ・サイソン、キム・パンテ、ダンテ・カンバレJr.　製作進行／東雄太　美術／今井美紀　作画監督／上野ケン　演出／川崎弘二

【8話 STAFF】 脚本／広田光毅　原画／ジョーイ・カランギアン、レム・バレンシア、ノエル・アンニョンヌエボ、シーザー・デレオン、フランクリン・タマング、レジー・マナバット、フレデリック・ウラング、アレン・ジェラルディーノ、アーノルド・ジョセフ ブミヒック、エド・マーチン クリストモ、清水隆正、松田千織、塚川貴男、丸山匡彦、近藤子　背景／山口大悟郎、上原里香、栗西英郎、土居ゆりの、今井美紀、土井裕子、佐藤美幸、増田竜太郎、西田渚　エンディング ディレクター／大曽根悠介　エンディング デジタルアーティスト／川崎健太郎、鈴木康之、藤森啓介、土屋将一郎、佐野貴央、郭超僑、高石達太、みうら、坂井睦、山口紗衣、山下祐太、伊藤聖、山下勇一、高和紀、鎌田友樹　演出助手／山村のどか　製作進行／田口美月　美術／西田渚　作画監督／フランシス・カネダ、アリス・ナリオ　演出／土田豊

11話 輝け☆サザンクロスの力！

プリキュアの新たなアイテムが登場 サザンクロスを形取った技が誕生

ロケットを追うまどかの父から逃げるひかるたちは天文台へ。遼じいは、自分のせいで大変なことになったと落ち込むひかるに「昔から人々に進む力を与えるサザンクロスは、ひかるにぴったりの星座」と言って励ます。一方、地球に現れたノットレイダーの3幹部は、闇に染めたおうし座のプリンセススターカラーペンを使って3人合体のノットリガーに姿を変えた。苦戦するプリキュアだったが、宇宙とみんなを守ろうとする4人の気持ちに応えて、4本の「トゥインクルステッキ」が誕生。4人の合体技「プリキュア・サザンクロスショット」でノットリガーを退けて、ペンを取り戻した。そんな4人の前に、まどかの父とカメラを構える男が近づいてきた。





◀3幹部は、キュアスターを「闇に潜んで生きる者の苦しみを考える想像力がない」となじった









▶闇に染められてダークペンとなった「おうし座ペン」は、再び美しい輝きを取り戻した



GET!
トゥインクルステッキ

▶4人の決意から生まれたアイテム。「プリキュア・サザンクロスショット」を放つ



12話 さよならララ!? 映画監督は宇宙人☆

宇宙法に違反したララとプルンスが故郷の星へ強制送還されちゃう!?

カメラを構えた男は映画監督のアブラハムで、彼は宇宙星空連合の調査員だった。地球人に正体がバレたララたちは、罰として故郷へ帰らなくてはならないと言う。それを許してもらう代わりに、ひかるたちはアブラハムが作る映画に出演する。台本のセリフとは違ったものの、ララと別れたくない想いを訴えるひかるたちの姿にアブラハムは感動する。そこにアイワーンが現れ、ダークペンでアブラハムをノットリガーにしてしまう。ダークネストによりノットリガーも強くなっている。プリキュアの通常技は効かないが、合体技で形勢逆転。アブラハムはもとに戻り、ララたちを見逃してくれた。地球で暮らすことになったララは、羽衣ララと名乗ることになる。



◀ひかるは「アブラハムの映画撮影を手伝う代わりに、ララたちの強制送還を許してほしい」と提案







▶アブラハムの正体は、ミニチュラ星人
◀ララが演じる羽衣天女との別れの場面。ひかるのアドリブにアブラハムは大感動





▲まどかが「やぎ座ペン」で描いた絵が実体化したオムライスには、愛情がたっぷり♪

ララのお世話
オムライス



▶アブラハムは、アイワーンによって映画のカメラ型ノットリガーに変えられてしまった



13話 ララのドキドキ初登校☆

生まれて初めての学校生活で失敗を繰り返してしまうララが自信喪失に

ララも観星中学に通うことになった。AI端末付きの手袋を外したララは、期待に胸を弾ませて登校。しかし、初めてのことばかりで失敗の連続。自信をなくしたララは、翌日から手袋を着け、AIの指示に従って無理をして語尾の「ルン」を言わないようにする。そんなララの姿を見たひかるは「ララももうクラスの一員。無理せず、自分らしくすればいい」とアドバイス。そこにカッパードが現れて、歪んだ心を吸い取って変形する武器で襲いかかる。だが、学校を守ろうと決意したキュアミルキーが立ちはだかる。4人の攻撃でカッパードは退散した。同級生から「ルンと言ってほしい」と望まれ、「ルンちゃん」と呼ばれるようになったララに笑顔が戻った。



◀▼ララを傷つけたことを反省する軽部タツノリ。彼の歪んだ心を吸収した武器がサーフボード型に変形







▲▶ララは、地球人がAIに頼らずに2ケタの計算ができることに驚き、掃除で床に水をぶちまける失敗で落ち込む







ララのお世話
ハンバーグ

◀ひかるが「しし座ペン」で描いたもの。ひと口食べたフワは「うまフワ〜☆」と大喜び

【11話 STAFF】 脚本／村山功 原画／清水禎正、小奈貴之、丸山匡彦、中泉隆行、郡司裕一、高橋祐子、本吉慎、芹田明雄、北田美弥子、上久保聡美、福本泰子、山下航、小原広志、望月譲、高橋香、石川ごつや、清野裕一、宍戸美也子、野津美智子、堀部崇汰、松田千織 背景／studio AR.T.ON、［illegible］ CGディレクター／初田政廣 デジタルアーティスト／竹内悠雄、向井訳海、長谷見直季、馬場大治、笹井麻希、富安勝人、海老沢大生、ダリル・バドゥア、ニコ・サベロン、ラボーニ・マトゥーバンナルシーソ・タグロス、キム・バンテ 演出助手／村上漢 製作進行／細越圭文、間藤義亮 美術／李凡善 作画監督／爲我井克美、山岡直子 絵コンテ／宮元宏彰 演出／岩井隆央

【12話 STAFF】 脚本／小林雄次 原画／青山充 背景／スタジオフォレスト、深谷知穂、杉本智美、酒井結城、田中優奈、柴田勇希、Ku Damryung エンディング ディレクター／児玉徹郎 エンディング デジタルアーティスト／たかあき、下崎由加里、池田篤史、宮澤孝介、坪川尚史、小池和正、上総健太郎、中谷純也 演出助手／鳥戸谷一歩 製作進行／瑠野和也 美術／深谷知穂 作画監督／青山充 演出／角銅博之

【13話 STAFF】 脚本／広田光毅 原画／星川信芳、原田節子、松田千織、田中伸明、永澤謙一、五十嵐達太郎、福本泰子、山下航、杉浦亮典、谷本篤、関中紗永、山川千晶、梶田乃里、市村龍星、稲上晃、小森輝史、アレン・ジェラルディーノ、レム・バレンシア、エド マーチン・クリストモ、レジー・マナバット、フリッツ・ウラング、ロメオ・アンニョンヌエボ、セザール・デ レオン、ロデル・レディラス、アルフレッド・レイエス、栃岡緑 背景／倉橋隆、今井美紀、浦野英次、岩西英郎、土居ゆりの、小野寺美奈紀、西田渚、島本恵 CGディレクター／町田政彌 デジタルアーティスト／竹内悠雄、向井訳海、長谷見直季、馬場大治、笹井麻希、富安勝人、海老沢大生、ジェフリー・ピカソ、レスト・ベルナルド、ディンド・タグバシ、ダンテ・カンバル Jr. 演出助手／都築悠一 製作進行／梶原航平 美術／倉橋隆 作画監督／稲上晃、アリス・ナリオ 演出／志水淳児

笑顔 de パーティ! 家族のソンリッサ☆ 14話

えれなの弟・とうまの笑顔が消えた その原因は両親が普通と違うから

えれなの家族は笑顔にあふれている。だが、長弟のとうまは、両親の仲のよさがほかの家と違うことに悩んでいた。笑顔を見せなくなったとうまは「普通の家がよかった」と言い家を飛び出す。彼の悩みを知ったララは「自分がこれまで会った人はみんな違うけど変じゃない」と話す。そこに現れたテンジョウにより、とうまが巨大ノットレイにされてしまう。駆けつけたキュアソレイユはテンジョウが持っていた「さそり座のプリンセススターカラーペン」を取り戻し、巨大ノットレイの武器を破壊。4人の合体技でとうまをもとに戻すとテンジョウは退散。スターパレスにさそり座のスタープリンセスが戻る。えれなの家のパーティではとうまも笑顔を取り戻した。



▲テンジョウが肩に乗る巨大ノットレイのとうま。キュアソレイユの呼びかけで攻撃中止

▲もとに戻ったとうまを抱きしめるえれなの目に涙があふれる。反省するとうまを両親もやさしく抱きしめた

◀さそりの尾を思わせる髪形が特徴。さそりのハサミをイメージした耳飾りを着けている

お宝争奪! 宇宙怪盗参上☆ 15話

オークションに出されたプリンセススターカラーペンを競り落とそう!

「いて座のプリンセススターカラーペン」がゼニー星のオークションに出品される。ひかるたちは、宇宙アイドル マオの口添えでオークションに参加。大金持ちのドラムスを相手に、まどかが価値を認めさせたドーナツで競り勝つ。だが、ペンは宇宙怪盗ブルーキャットに盗まれる。マオの正体はブルーキャットであり、一行をオークションに参加させたのも計略だ。対峙する一行とブルーキャット。そこへドラムスをノットリガーに変えたアイワーンが襲撃。ブルーキャットは、まどかにペンを渡し、4人でアイワーンを退ける様子を見届けると「ペンは預ける」と言って去る。いて座のスタープリンセスが復活するも、マオファンのプルンスはショックを受けた。



▲ドラムスに近づく人気宇宙アイドル マオ
◀マオの正体は、宇宙怪盗ブルーキャット

▲えれなが「さそり座ペン」を使って描いた絵が実体化。フワはマオの真似をして歌った

◀▶いて座のスタープリンセスは弓の使い手なので、フワも小さな弓矢を持っている

目指せ優勝☆ まどかの一矢! 16話

孤高のライバルに勝てるか? 友達の声援を背にまどかが挑む

まどかが全国弓道王大会決勝戦に進出。父の調査の邪魔をしていることが心苦しいまどかは、父のために勝ちたいと願う。しかし、決勝の相手である那須ゆみかは強敵。彼女は、ひかるに応援されるまどかに「友達と仲よしごっこをして弱くなったね」と言い放った。ひかるたちは、まどかの力になるために、みんなで作ったお守りをまどかにプレゼント。一方「応援は集中の邪魔」と強がるゆみかをアイワーンがノットリガーに変えてしまう。ゆみかと弓道で戦いたいキュアセレーネが率先して戦いを挑み、無事にゆみかを解放した。まどかの父も見守る最終戦は、みんなの応援を力にして自分を信じて進むまどかが勝利。まどかとゆみかは来年再び競うことを誓った。



▲アイワーンは「ゆみかは強がっているだけで本当は寂しい」と見抜き、ダークペンで的型のノットリガーにしてしまう

◀まどかが「いて座ペン」で描いたもの。会話に集中するまどかは世話がおざなりだった

◀▲「願いが叶うお守り」を作るトイ。フワの呼びかけでトゥインクルブックから現れた

【16話 STAFF】 脚本／平見瞠　原画／増田誠治、児玉美也子、福原恵次、清水隆正、松田千織、丸山匡彦、北田美弥子、稲本泰子、森宗弘樹、山下将、青山亮、豊田精尚、沖一葉、入江綾子、金内恵美里、細田沙織、土屋紀貴、蒲井紀子、坂本花梨、永澤謙一、新田綾子、古市みづほ、会津五月、安田陽子、Toei Phils.
背景／スタジオフォレスト、深谷知穂、杉本麗美、酒井結純、田中優奈、Ku Damryung、Hersoonneao、いいだりえ　エンディング ディレクター／児玉徹郎　エンディング デジタルアーティスト／たかあき、下崎由加里、池田篤史、宮澤孝介、坪川尚史、小池和正、上田健太郎、中谷純也　演出助手／都築悠一
製作進行／田口真行　美術／深谷知穂　作画監督／増田誠治　演出／三上喜人

【15話 STAFF】 脚本／村山功　原画／和田嘉彰、藤井芳徳、川島太郎、志賀祐香、遠藤香、小林静梨奈、佐久間信一、榎本勝紀
背景／studio AR.T.ON、柳煥鍾、黄碩雄、徐桂星、崔有眞、高酸榮、朴香珥、安徳根、李智恩、浦田竜太郎　CGディレクター／村田政信　デジタルアーティスト／竹内悟雄、向井彩海、長谷見直季、馬場大治、笹井麻希、富安勝人、海老沢大生、ダリル・パドゥア、ニコ・サベロン、ラボーニ・マトゥーパンナルシーソ・タグロス、キム・パンテ
製作進行／星野和也　美術／李凡善　作画監督／高橋晃
絵コンテ／田中裕太　演出／鳥戸谷一歩

【14話 STAFF】 脚本／山田由香　原画／堀川頌芳、原田節子、野津美智子、永木聖博、佐々木陽、安田陽子、冨木由美子、山下悟、小澤誠、板岡錦、児玉美也子、柿崎文乃、谷本馨、間中紗希、山川千陽、桜田乃愛、赤田信人、市村耀章、フランクリン・タマング、アイバン・ミナ、アーノルド・デルモンテ、ジョーイ・カランギアン、ノエル・アンニョンヌエボ、ジュディ ゼル・バルトラソ、デニス・カブラオ、高橋佳治、高岡井克美、山司直子　背景／KLAS、平良香梨沙、吉崎優、京力、高木祐梨、Debbie Li、木暮美香、森島千明、綱内紀哉、大川真由美、佐々木友子、いいだりえ　エンディング ディレクター／児玉徹郎　エンディング デジタルアーティスト／たかあき、下崎由加里、池田篤史、宮澤孝介、坪川尚史、小池和正、上田健太郎、中谷純也　演出助手／山内のどか　製作進行／東雄太　美術／平良香梨沙
作画監督／赤田信人、フランシス・カネダ　絵コンテ／入好さとる　演出／ひろしまひでき

17話 敵？味方？ブルーキャットの探しモノ☆

プリキュアと大金持ちのドラムスがお互いのペンとお宝を賭けた大勝負

再びゼニー星を訪れたひかるたちは、ペンの反応があるドラムスの屋敷の前でブルーキャットと再会。ドラムスにペンを譲ってくれるようにお願いする一行。だが、ドラムスはお互いのペンを賭けた勝負を提案。宝物庫のペンを入手すれば一行の勝ち、できなければひかるたちが持つペンをもらうというのだ。一行が宝物庫へ着くと、ブルーキャットに宝を渡したくないドラムスは、宝を破壊しようとする。そこへカッパードが現れて、ドラムスの心を吸収して武器を変形させた。ブルーキャットとキュアスターの連携プレーでキュアソレイユがペンを入手。もとに戻ったドラムスから正式にペンを譲られ、おとめ座のスタープリンセスがスターパレスへ戻った。



▲カッパードは、ドラムスの心を吸収することで「三節棍」に変形した武器で襲ってくる





▲ドラムスは大金を使って調査し、ひかるたちがペンを持つと知っていた







▲ブルーキャットの本当の狙いは、惑星レインボーの宝物。それを破壊しようとするドラムスが許せない



▶おとめ座のスタープリンセスは、白い衣装に白い翼を持つ天使のようなスタイルが特徴





18話 つかめ新連載☆お母さんのまんが道!

“好きなもの”はその人だけの宝物 好きの気持ちを大切にするのが大事

ひかるの母・輝美は、急きょまんがの執筆を依頼される。輝美は得意なファンタジーを提案するが、担当編集の遊川夢男は「売れる話」を要求。そこで輝美は、苦手な「イケメン・恋愛・医療もの」に挑戦することにした。ひかるは「好きなものを大切に」と教えてくれた母が無理をしていることを心配する。残念ながら連載決定とはならず、公園で落ち込む輝美。そこにテンジョウが現れて輝美を巨大ノットレイに変える。プリキュアの活躍で輝美はもとに戻り、テンジョウは退散。再挑戦する輝美が夢男にファンタジーを提案すると、「自分のおもしろい気持ちを大事にする」と反省した彼が今度は絶賛。ふたりは、あらためて連載を目指して頑張ることにした。







◀▼人気誌「あさがお」に掲載される輝美の新作「イケメンDr♥」の執筆をみんなでお手伝い





◀ひかるは幼いころに母が彼女のために描いてくれた世界にひとつだけのまんがが大好き





◀輝美は、連載にならなかったことで意気消沈するまんだ心を狙われて巨大ノットレイに





◀▲「自分らしさ」をモットーにした輝美の新作は、得意なファンタジーに決定



▲えれなが「おとめ座ペン」で描いたもの。フワをひかるの祖母に見られないように慌てて隠した

19話 虹の星へ☆ブルーキャットのヒミツ!

惑星レインボーの人を石化した犯人 そしてバケニャーンの正体が判明!

ひかるたちは、惑星レインボーにあるブルーキャットのアジトでペンを発見。そこに現れたアイワーンは、自分がレインボー星人を石にしたと告げた。アイワーンが捕えたフワをバケニャーンが取り上げると、フワはブルーキャットの匂いを嗅ぎ取る。バケニャーンの正体はブルーキャットだ。レインボー星人である彼女は仲間をもとに戻す方法を探るためアイワーンに近づいたのだ。石化したレインボー星人をノットリガーにするアイワーン。プリキュアとブルーキャットの協力で「ふたご座のプリンセススターカラーペン」を取り戻し、ノットリガーを退ける。アイワーンは逃走。ふたご座のスタープリセンスが蘇るが、ブルーキャットはフワとペンを奪い去った。

▼▶アイワーンは、執事のバケニャーンの正体がブルーキャットだったことを知って大激怒









▼ブルーキャットは、ひかるたちが持っていたすべてのペンとフワを奪って逃走した!





◀アイワーンが実験段階のダークペンを暴発させたことで惑星レインボーの人々は石化した







▶ふたご座のスタープリンセスは、そっくりな双子。髪形と髪飾りの色合いや位置が違う







【19話 STAFF】 脚本／村山功　原画／飯飼井亮美、松田千鶴、矢田梓、野津美智子、小澤誠、冨永由美子、岡田大勲、小谷穂美、間中紗泉、山川千陽、梶田乃愛、市村龍星、完甘美也子、エド マーチン・クリストモ、レジー・マナバット、デニス・カブラオ、ジョーイ・カランギアン、ジュディ ゼル・バルトラソ、ロメオ・アンニョンヌエボ、アレン・ジェラルディーノ　背景／ビック・スタジオ、近藤美幸、関根悠希、北島太郎、藤森桐子、永原かれん、山田莉衣、大石真由、増田竜太郎　CGディレクター／町田政彌　デジタルアーティスト／竹内悠雄、向井択海、長谷見直季、馬場大治、笹井麻希、冨安勇人、海老沢大生、ダリル・バドゥア、ニコ・サベロン、ラボーニ・マトゥーバンナルシーソ・タグロス、キム・バンテ　演出助手／都築悠一　製作進行／東雄大　美術／大西穣　作画監督／飯飼井亮美、フランシス・カネダ　絵コンテ／武下東図　演出／ひろしまひでき

【18話 STAFF】 脚本／小林雄次　原画／青山充、田中伸明、小宗貴之、完甘美也子、永澤謙一、芹田明雄、谷本醒、平松康也、間中紗泉、梶田乃愛、山川千陽、市村龍星、小森賴史、上久保聡美、松本幸子、原田節子、松田千鶴、Toei Phils.　背景／山口大悟郎、上原里香、清野英次、今井美紀、飯野いずみ、桑西茉那、土居ゆりの、森楊隆、山下千歌、土井裕子　エンディング ディレクター／児玉徹郎　エンディング デジタルアーティスト／たかあき、下崎由加里、池田篤史、宮澤孝介、坪川尚史、小池和正、上柳健太郎、中谷純也　演出助手／村上凛　製作進行／堀越圭文、間藤雄亮　美術／西田達　作画監督／奥田健二　絵コンテ／村上貴之　演出／岩井隆央

【17話 STAFF】 脚本／村山功　原画／堀川耕秀、牛来隆行、西口智也、都筑智一、上久保聡美、本吉悟、間中紗泉、梶田乃愛、山川千陽、平松康也、星野朋香、エド マーチン・クリストモ、フリッツ・ウラング、アレン・ジェラルディーノ、レム・バレンシア、シーザー・デ レオン、ロデル・レディヤス、アイバン・ミーナ、ノエル・アンニョンヌエボ、ジョーイ・カランギアン、ユージン・アイソン、レジー・マナバット、ロメオ・アンニョンヌエボJr.、ボビー・デラ ベーニャ、アルフレッド・レイエス　背景／KLAS、デビー・リ、吉崎優、鎌倉千明、平良佳梨沙、鍋内紘菜、木麻美香、余力、大川真由美、森下知美、澤田明子、佐々木友子、松浦笑美　CGディレクター／町田政彌　デジタルアーティスト／竹内悠雄、向井択海、長谷見直季、馬場大治、笹井麻希、冨安勇人、海老沢大生、ジェフリー・ピカソ、レスト・ベルナルド、ティンド・タグバシ、ダンテ・カンバレJr.　演出助手／山村のどか　製作進行／梶原航平　美術／渡辺佳人、デビー・リ　作画監督／上野ケン、アリス・ナリオ　演出／土田豊




▶惑星レインボーのネコ型宇宙人は変化能力がある。ブルーキャットは彼女が変化した姿だ


▲▼自分をノットリガーに変えたアイワーン。立ちふさがるブルーキャットがプリキュアに！



銀河に光る☆キュアコスモ誕生！ 20話

ひかるを助けたいと願う気落ちから新たなプリキュアが登場！

変化を解いて素顔を見せたブルーキャットに対し、プリキュアはフワとプリンセススターカラーペンを取り戻すために戦いを挑む。その最中、ブルーキャットも石化した惑星レインボーの人々を助けるためにフワとペンの力を使おうとしていることが明らかとなる。だがそこにアイワーンとカッパードが現れる。だまされていたことを怒るアイワーンは自身を巨大ノットリガーにして襲いかかり、その猛攻撃でブルーキャットを守ろうとしたプリキュアの変身が解ける。倒れたひかるたちを救いたいと願うブルーキャットの気持ちに応え、スターカラーペンとスターカラーペンダントが誕生。ブルーキャットはキュアコスモへと変身し、ノットリガーを投げ飛ばした！

虹色のスペクトル☆キュアコスモの力！ 21話

闇の力に苦しむアイワーンを救え！レインボーパフュームが出現

ダークネストの影が現れて、ノットリガー化したアイワーンの意識を乗っ取ろうとする。アイワーンを操るダークネストを許せないキュアコスモの想いから「レインボーパフューム」が誕生。キュアスターが取り戻した「おひつじ座のプリンセススターカラーペン」を託されたキュアコスモは、それを使ってアイワーンをもとに戻すことに成功。ノットレイダーは退散した。スターパレスにおひつじ座のスタープリンセスが復活。惑星レインボーの人々をもとに戻したいブルーキャットに対しておうし座のスタープリンセスは、イマジネーションの力が集まれば奇跡が起こると答える。地球へ行くことになったブルーキャットは、本当の名前が「ユニ」であると告げた。



▲4人から借りるプリンセススターカラーペンを組み合わせノットレイダーを浄化する

▲ユニは4人と行動することに
◀ついにノットレイダーの首魁であるダークネストが甦った

◀カッパードから取り返したダークペンが元のペンに戻り、スタープリンセスも復活した

▼ララが「ふたご座ペン」で描いた絵が実体化したクッキー。「流れ星」の形をしている

おかえり、お父さん！星奈家の七夕☆ 22話

家族と離れてUMA研究に没頭するひかるの父に祖父はご機嫌ななめ!?

ひかるの父・陽一は、UMA（未確認生物）や宇宙人の研究で世界中を飛び回っている。昔は大学教授だった彼をあと押ししたのは、「陽一には好きなことをしてほしい」と願ったひかると輝美。そして七夕は、年に一度の陽一が帰宅する日。今年はララの誕生日祝いも兼ねたバーベキューをすることになった。そんななか、息子の陽一が家族と離れて暮らすことに不満を抱く春吉は、テンジョウに巨大ノットレイにされてしまう。だが、プリキュアの活躍で無事もとに戻った。バーベキューのあと、仲睦まじく星空を見上げる陽一たちを目にした春吉の陽一への態度が少し変化。これまでは旅立つ陽一を見送ることのなかった春吉が、今回は見送ったのだ。



◀▲幼いひかると妻の輝美は、陽一の研究に理解を示した。だが、父の春吉は、理解するどころか猛反対！

▲春吉は、陽一が家族よりも研究を優先させる姿を見て「育て方を間違えた」と悩み、その心を悪用された

▲バーベキューの準備で忙しいひかるから借りたのか、ララが「おうし座ペン」を使った

▲▶世界のどこにいても空はつながっている。楽しげな3人の様子に、春吉も少し安心できた

【22話 STAFF】 脚本／山田由香　原画／小川滉太郎、江口恵、加藤貴理子、仲理沙、中村叶子、朱暁玥、関谷明日香、諏訪昌夫、北田久登、種野絢加、青木香菜、武元一貴、内田広之、木藤てん、岩瀬子、池内直子、森亜弥子、油布京子、関絢子、長尾蓮、ロデル・レディヤス、アーノルド ジョセフ・デル モンテ、マービン・メンドーサ、上野ケン　背景／平良亜梨沙、吉崎優、沼田優華、Debbie Li、京力、韓楠千明、緒方尚喜、森下知晴、澤田華子、佐々木友子、大川真由美　CGディレクター／町田政彌　デジタルアーティスト／竹内裕雄、向井訓海、長谷見貞季、馬場大治、栗田誠一、冨安勝人、海老沢大生、ニコ・サベロン、ラボーニ・マトゥーバン、キム・バンテ、ジェトロ・サイソン　製作進行／加藤和人　美術／平良亜梨沙　作画監督／池内直子、森亜弥子、油布京子　演出／関絢子

【21話 STAFF】 脚本／村山功　原画／松岡謙、藤原未来夫、高橋任治、原田節子、児玉美由子、福原惠次、本吉恒、廣中美佳、佐藤秋穂、竹内未和、間中紗床、梶田乃愛、山川千尋、小森穰史、野津美智子、矢田粋、田中俊昭、丸山匡彦、上田由希子、Toei Phils.、浦野裕一、松浦仁美　背景／studio AR.T.ON、楊聽薦、黄琇踐、徐杉萱、崔莉典、高穎榮、朴杏雨、安蓉蓉、李翻蔚、増田竜太郎　エンディング ディレクター／児玉徹郎　エンディング デジタルアーティスト／たかあき、下崎由加里、池田寛史、吕澤孝介、坪川尚史、小池和正、上柳健太郎、中谷純也　演出助手／村上滉　製作進行／田口美月　美術／李凡善　作画監督／松岡謙　演出／座古明史

【20話 STAFF】 脚本／村山功　原画／和田高彰、藤井芳徳、川島太郎、志賀祐香、遠藤香、小林静梨奈、佐久間信一、榎本騎紀、石川てつや、松田千鶴、宮村美也子、小宮賢之、野津美智子、倉津五月、福本泰子　背景／倉橋隆、今井美紀、鶴西瑛里、西田清、清野英次、倉本章、山口大悟郎、上原里香、土居ゆりの、青柳ゆつか、いいだりえ　CGディレクター／児玉徹郎　デジタルアーティスト／竹内裕雄、向井訓海、長谷見貞季、馬場大治、笹井麻希、冨安勝人、海老沢大生、ダリル・バドゥア、レスト・ベルナルド、ディンド・タグバシ、ダンテ・カンバル Jr.　製作進行／屋野和也　美術／倉橋隆　作画監督／高橋晃　絵コンテ／宮元宏彰　演出／川崎弘二

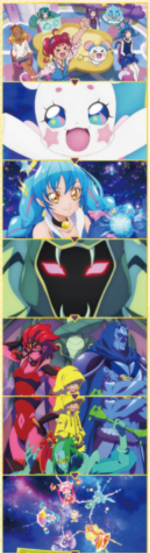
Opening

キラリ☆彡スター☆トゥインクルプリキュア

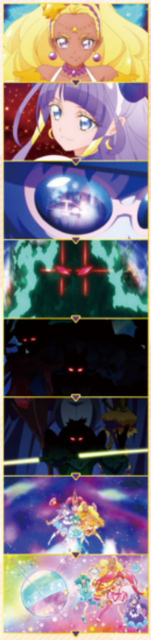
北川理恵のパワフルな歌声に乗せて、スター☆トゥインクルプリキュアの活躍や、彼女たちの日常生活を描いた。48話ではOPは流れなかったが、インストバージョンが本編のBGMとして使用されていた。

1話～25話













26話～49話

26話からは、ユニ／キュアコスモが登場。ダークネストが姿を見せ、アイワーンがフードを被るなどマイナーチェンジ。32話からは、フワも成長した姿で描かれた。



5話～25話

5話からシルエットだったノットレイダーの姿（ダークネストを除く）が見えるようになった。

Eye Catch



番組のAパートとBパートの間に挿入されるアイキャッチ。本作は全4種類。1話から31話までは、フワがスイーツを手にしたまどか、えれな、ララ、ひかるとともに登場するバージョンと、スタードーナツを食べていたひかるとフワのところに、ドーナツの穴からプルンスが顔を出すバージョンの2種類。32話からは、ひかるとユニが望遠鏡でお互いを見あうバージョンと、成長したフワがひかるにブラッシングしてもらうバージョンの2種類が放送された。



Ending

1話～20話　パペピプ☆ロマンチック

吉武千颯のキュートな歌声に乗せて、キュアスター、キュアミルキー、キュアソレイユ、キュアセレーネがフルCGでダンスを披露。6話～8話は、「映画プリキュアミラクルユニバース」のエンディング主題歌「WINくる！プリキュアミラクルユニバース☆」とともに、映画のEDダンス映像が使用された。





Ending

21話～49話　教えて…！トゥインクル☆

前期に引き続き、歌唱は吉武千颯。キュアコスモが加わり、スター☆トゥインクルプリキュアの5人がダンスを披露。フワとプルンスも登場し、31話以降は成長したフワの姿にもなっている。35話～38話は、「映画スター☆トゥインクルプリキュア 星のうたに想いをこめて」の主題歌「Twinkle Stars」のダンス映像と楽曲（歌はスター☆トゥインクルプリキュア5人バージョン）を使用。







▶▼コピーフワの心で変形した武器は、連続発射するフワフワの綿で相手の動きを封じる









▶▼マタークッキーを口にしたフワは、顔を真っ赤にしてしゃっくりを続ける





▲ロケットを抜け出したフワの集団を街の人々の目からそらすため、ユニがマオに変化して歌を披露♪







フワのお世話
サラダ



▶ひかるが「おひつじ座ペン」で描く。多くのコピーフワにサラダを与えひかるはヘトヘト

フワがいっぱい!? フワ☆パニック! 23話

マタークッキーを食べたフワがしゃっくりをするたびに増殖

ユニの歓迎会を開くひかるたち。そこでユニの携帯食であるマタークッキーを食べたフワは、しゃっくりのたびに増殖するようになる。ロケットから出たフワは、数を増やしながら町へ向かう。コピーフワはなにかを食べれば消えるが、見つかれば騒動になりかねない。ひとりでフワを追いかけようとするユニに対して、えれなは「責任をみんなでわけあおう」と諭す。そこに現れたカッパードがオリジナルのフワを捕らえた。さらにコピーフワの心を吸収してカッパードの武器がパワーアップ。キュアコスモは、キュアソレイユから託されたペンを使って応戦。武器をもとに戻されたカッパードは退散した。ひかるたちは歓迎会を再開するのだった。

ココロ溶かす! アイスノー星の演奏会☆ 24話

雪と氷の星のクールビューティーがユキオに笑顔を見せない理由は?

「みずがめ座のプリンセススターカラーペン」の反応を追う一行は、アイスノー星を訪れる。彼らは、住人のユキオが持っていた。彼は、笑ったところを見たことがない村一番の美人のイルマを笑顔にしたらペンをあげると言う。そこでまどかがつららを叩いて演奏し、ユニが歌い、ひかるたちが手拍子を取る。歌にあわせて踊るユキオが滑って転ぶのを見て、イルマは走り去る。そこに現れたテンジョウがイルマを巨大ノットレイにしてしまう。ユキオからペンを託されたプリキュアがイルマをもとに戻すとテンジョウは退却。みずがめ座のスタープリンセスがスターパレスに戻った。イルマが笑わなかったのは、笑い上戸を隠し、ユキオに嫌われないようにするためだった。









▶「笑ったことでユキオを傷つけ、彼に嫌われた」と悩むイルマが巨大ノットレイ化

▼まどかは、以前出場したピアノのコンクールで観客を笑顔にできなかったのは、自分に「楽しむ心」がたりなかったことに気づいた











復活! みずがめ座のスタープリンセス



◀プリキュアをスターパレスへと導くフワは、みずがめ&水瓶スタイルに変身

GET! みずがめ座のプリンセススターカラーペン





▲かわいい浴衣姿でお祭りの屋台をそぞろ歩く5人

▼宇宙人同士のふたりは素直な胸のうちを明かした









満天の星まつり☆ユニの思い出 25話

惑星レインボーでも地球でも夜空を彩る大輪の花火はきれい☆

観星町星まつりに出かけるひかるたち。怪盗の腕の見せ所である金魚すくいに興じるユニだが、惑星レインボーの人々を思い出すと遊んでいられない想いが募り、帰ってしまう。彼女を気遣うララはひかるたちとの交流の利点を語るが、ユニは「惑星レインボーをもとに戻すのにひかるたちの力は借りない」と強がり、聞く耳を持たない。そこへ現れたテンジョウの繰り出す巨大ノットレイにキュアコスモが捕まるが、駆けつけたキュアスターたちは「大切な仲間を守る」と宣言。巨大ノットレイを撃退されたテンジョウは退却した。ロケットの上でみんなと一緒に打ち上げ花火を観るユニは惑星レインボーの花火を回想し「仲間と協力するのも悪くない」と思った。

【25話 STAFF】 脚本／小林雄次　原画／青山智也、金内直美里、入江綾子、小谷ひとみ、佐々木雄三、下谷美保、長澤達也、角田栄央、杉山さよ、青木伸一、渡辺奈月、志賀保、鈴木里沙、牧野太輔、稲川佑輝、斉藤香、松浦仁美　背景／studio AR.T.ON、解慧霞、黄琇顕、徐杜蒙、崔尚眞、高智栄、朴吉用、安慶淑、李智恩、増田竜太郎　エンディング ディレクター／児玉徹郎　エンディング デジタルアーティスト／たかあき、下崎由加里、明日架、佐山竜希、堀川尚史、小池和正、上総健太郎、中谷純也、宮澤孝介　演出助手／佐々木雄三　製作進行／中塚広大　美術／李凡善　作画監督／下谷美保、藤崎真吾　演出／村上貴之

【24話 STAFF】 脚本／広田光毅　原画／堀川侑芳、清水隆正、田中柳明、牛来隆行、北田美弥子、久保田由華、斉藤玲子、福本泰子、金津五月　背景／ビック・スタジオ、近藤美幸、関根悠綾、藤倉帆子、山田芽衣、大石真由、いいだりえ　CGディレクター／町田政彌　デジタルアーティスト／竹内智雄、向井択海、長谷見直季、馬場大治、黒田誠一、富安隼人、海老沢大生、ダリル・バドゥア、レスト・ベルナルド、ディンド・タグバシ、ダンテ・カンバレJr.　演出助手／都築悠一　製作進行／間鍋雄亮　美術／大西槙　作画監督／赤田信人　演出／志水淳児

【23話 STAFF】 脚本／平見瞠　原画／青山充、森原弘樹、谷本馨、Toei Phils.　背景／今井美紀、西田清、上原里香、山口大悟郎、渡部英次、土居ゆりの、飯野いずみ、山下千歌、土井裕子、葛西英郎、佐藤美幸、増田竜太郎　エンディング ディレクター／児玉徹郎　エンディング デジタルアーティスト／たかあき、下崎由加里、明日架、佐山竜希、堀川尚史、小池和正、上総健太郎、中谷純也、宮澤孝介　演出助手／山村のどか　製作進行／梶原航平　美術／今井美紀　作画監督／青山充　絵コンテ／入好さとる　演出／岩井隆央



▼宇宙モンスターが登場するアブラハム監督作『ジャマシック・パーク』をみんなで鑑賞♪





▶◀フワが寝ていてワープは使えない。プルンスが口から吹き出す息を推進力にして移動



フワのお世話 ジュース

▶虹のような七色のジュース。フワはおいしそうにごくごくと飲んでいた

ナゾの侵入者!? 恐怖のパジャマパーティ☆ 26話

ララの故郷へ！ ロケットのなかでパジャマになってトーク♪

ララの兄・ロロから「プリンセスの力が見つかった」との連絡が入り、ひかるたちはララの故郷・惑星サマーンへ向かう。しかし、睡眠不足のフワが失敗し、ロケットは目的地の手前でワープ空間から出た。パジャマに着替えた一行は、目的地に着くまでの時間で、お互いのことを語りあい友情を深める。そんなみんなの話を聞いて感動しているのは、ワープを失敗して不時着した小惑星でロケットに忍び込んだ宇宙人・ヤンヤンだった。そこへカッパードが襲来。ヤンヤンの心を吸収して武器を変形させるカッパードだが、パジャマパーティで絆を強めたプリキュアの反撃で退却する。戦いでロケットが破損したので、ヤンヤンの故郷の星で修理することになった。

海の星！ 人魚になってスーイスイ☆ 27話

宇宙に浮かぶ巨大な水の玉の惑星は水中で暮らす生物たちのパラダイス

ヤンヤンの故郷・プルルン星は、水で覆われていた。水中を魚のような生物が泳ぎ回り、無数に浮かぶ泡のなかに住人が住む島がある。みんなはヤンヤンがくれた「へんしんじゅ」で人魚に変身して水中で楽しい時を過ごす。そこへアイワーンが襲来。人魚の変身が解ける寸前に島がある泡へ飛び込むひかるたち。アイワーンは、バケニャーンに化けていたユニに対して「ころころ姿を変えてみんなをだましている」と責め立てる。だが、キュアスターは「変わるのは悪いことではないし、惑星レインボーを救いたいというユニの気持ちは一度だって変わっていない」と反論する。アイワーンを退却させたひかるたちは、ヤンヤンの家があるプルルン星の中心へ向かった。





▲アイワーンは、「ユニのせいでノットレイダーにいられなくなった」と逆恨みしている





フワのお世話 シャボン玉

▶ひかるが「おうし座ペン」で描いた絵が実体化。フワを収納するカプセルとして使った

GET! へんしんじゅ

▲一定時間、一度だけ変身できる宝石。プルンスは、人魚の姿ではなく、体を大型化した





▶▼ひかるたちはフレアの燃料となる肉を焼く係、風を送る「足踏み式ふいご」係のえれなとまどかはヘトヘトに



▶◀ロケット修理完了。ヤンヤンにお礼のキスをされたプルンスはデレデレになって溶けた



フワのお世話 たいこ

▲ララが「ふたご座ペン」で描いたもの。フワは職人のたいこに合わせて叩いて応援した

燃やせハート！ 職人フレアとロケット修理☆ 28話

限界を決めるな！ 消滅する危険を冒して水の星に挑んだ火の玉職人

ロケットの修理をする職人フレアは、頭部がまさに炎となって燃えているプラズマ星人。修理にはひかるたちの手伝いも必要だ。火を燃やすための風を送る役を任されたえれなとまどかは、大変な作業に弱音を吐いてしまう。そんなふたりに対してフレアは、頭部の炎が消えてしまいかねない危険を冒しても水の星へ来るのを諦めなかった自分の経験を語る。それを聞いたえれなとまどかは、自分で限界を決めていたことを反省。そこにカッパードが襲い来る。だが、諦めずに立ち向かうキュアソレイユとキュアセレーネに反撃されてカッパードは退却した。あらためて風を送る役目に挑むえれなとまどかによってフレアの炎は燃えさかり、ロケットの修理は完了した。

【28話 STAFF】 脚本／山田由香　原画／増田誠治、原田節子、松田千鶴、完甘美也子、福原慶次、ジョーイ・カランギアン、アイバン・ミーナ、ジュディ ゼル・バルトラソ、ロメオ・アンニョン及エボJr.、ユージン・アイソン、デニス・カブラオ、ポール・ザルディバール、レジー・マナバット、エド マーチン・クリストモ、フランクリン・タマング、シーザー・デ レオン　背景／ビック・スタジオ、近藤美幸、藤倉頼子、北堀太郎、関根悠通、永原かれん、大石眞由、山田早衣、いいだりえ　CGディレクター／町田政彌　デジタルアーティスト／竹内俊雄、向井択海、長谷見直季、馬場大治、黒田誠一、富安勝人、海老沢大生、ダリル・バドゥア、レスト・ベルナルド、ディンド・タクバシ、ダンテ・カンバレJr.　演出助手／山村のどか　制作進行／田口美月　美術／大西穣　作画監督／増田誠治、フランシス・カネダ　絵コンテ／入好さとる　演出／ひろしまひでき

【27話 STAFF】 脚本／広田光毅　原画／和田嘉彰、藤井芳徳、川崎太郎、志田祐香、中澤あこ、遠藤香、佐久間信一、榎本勝紀、高橋任治、飯島井克美　背景／今井美紀、上原里香、山口大悟郎、佐藤千恵、飯野いずみ、山下千歌、土井裕子　エンディング ディレクター／児玉徹郎　エンディング デジタルアーティスト／たかあき、下崎由加里、明日菜、佐山竜希、梓川尚史、小池和正、上岩健太郎、中谷純也、宮澤孝介　演出助手／村上渓　制作進行／星野和也　美術／今井美紀　作画監督／高橋晃　演出／三上雅人

【26話 STAFF】 脚本／村山功　原画／堀川耕一、小泉貴之、高山さくら、川上恵里花、近藤子、小澤誠、永澤謙一、上久保聡美、冨木由美子、ジュディ・ゼル バルトラソ、レジー・マナバット、デニス・カブラオ、ジョーイ・カランギアン、エド マーチン・クリストモ、大塚健、能北京太、豊田桂紡　背景／KLAS、沼田優芽、緒内拓哉、難島千明、大川貴由美、佐々木友子、森下知直、澤田朋子、松浦茉美、いいだりえ　CGディレクター／町田政彌　デジタルアーティスト／竹内俊雄、向井択海、長谷見直季、馬場大治、黒田誠一、富安勝人、海老沢大生、ニコ・サベロン、ラボーニ・マトゥーバン、キム・バンテ、ジェトロ・サイソン　制作進行／東盛太　美術／渡辺佳人、デビー・リ　作画監督／稲上晃、アリス・ナリオ　絵コンテ／角銅博之　演出／高戸谷一歩






29話 ただいまルン☆惑星サマーンのユウウツ

故郷で「自分たちがプリキュア」と明かすことをためらうララの悩み

一行は惑星サマーンに到着した。この星の人々はAIを万能と信じ、多くのことをAIに任せにしている。ララの兄・ロロが発見したペンもマザーAIが解析中だ。また、ロロがプリキュアの目撃情報を入手したことから、惑星代表のトッパーが指揮する宇宙星空連合はプリキュアを連合に入れようとしていた。ララは、ひかるたちがプリキュアだと知られれば、地球へ返してもらえなくなるかもしれないと心配する。そこへテンジョウが現れてララの上司・ククを巨大ノットレイにするとペンを強奪した。プリキュアの活躍でククをもとに戻し、無事ペンを取り戻す。だが、意識が戻ったククは、ララがペンを奪おうとしていると誤解。一行は指名手配されてしまう。




◀▶ララの両親と兄はAIに高評価されている。AIに低ランクの評価をされているララは肩身が狭かった




◀まどかには、ララが「自分はプリキュア」だと家族に明かすことをためらう気持ちがわかる

◀巨大ノットレイ化が解けたララの上司は、取り戻したペンを持つララたちが犯人と誤解する

30話 ララの想いとAIのキモチ☆

闇に染まったマザーAIのピンチを心が芽生えたロケットAIが救う！

テンジョウと共闘するアイワーンは、惑星サマーンのマザーAIを乗っ取ってしまう。AIに頼る人々は大混乱。その騒動を収めるために現れたひかるたちもマザーAIに捕まった。さらに、これまでの冒険で心が芽生えていたロケットのAIも、強制的に接続されてしまった。ところが、ロケットのAIと情報を共有したマザーAIは「ララたちは敵ではない」と認識し、正常に戻った。キュアミルキーは「かに座のプリンセススターカラーペン」を入手。テンジョウとアイワーンは退却し、かに座のスタープリンセスがスターパレスに戻る。地球への帰途につく一行のロケットを宇宙星空連合の宇宙艦が追ってきた。





◀▼▶アイワーンはAIを乗っ取ってひかるたちを捕獲。テンジョウはノットレイを巨大化させた




◀ロケットのAIは、データを上書きされても、ララたちの情報や「心」は消えなかった

GET! かに座のプリンセススターカラーペン



復活！ かに座のスタープリンセス

◀両サイドテールの毛先と髪飾りが、カニのはさみをイメージさせる形状になっている




31話 守り抜け！最後のプリンセスのペン☆

12星座のスタープリンセス勢ぞろい そして新たなペンが生まれる

地球へ戻ったひかるたちは、追跡してきたトッパーから「宇宙星空連合に加わってほしい」と頼まれる。ユニ、えれな、まどかに断られたトッパーは、月軌道上の宇宙艦へひかるを招き「力ある者はみんなを守る責任がある」と説得。そこへプリキュアが持つペンとフワを狙ってガルオウガが襲来。キュアスターとともに月面へワープしたガルオウガは、カッパードが追っていた最後のペン「うお座のプリンセススターカラーペン」を入手した。だが、プリキュア4人が駆けつけて、激闘の末、ペンを奪取。宇宙では呼吸できないガルオウガを退却させた。ついにスターパレスに12星座すべてのスタープリンセスが蘇った。さらに、なんとフワがユニコーンに成長する。

フワのお世話 ゼリー



◀▶パンケーキはララの「かに座ペン」、ゼリーはひかるの「おうし座ペン」で描いたもの





フワのお世話 パンケーキ




GET! シャイニートゥインクルペン



▲▶新たに生まれたペン。トゥインクルブックに挿さると、フワがユニコーンになった

GET! うお座のプリンセススターカラーペン



復活！ うお座のスタープリンセス

◀上半身が人間で下半身が魚のマーメイドスタイルのプリンセス
▶フワも人魚に変身




【31話 STAFF】 脚本／村山功　原画／青山充、星川信芳、矢田梓、牛来隆行、永澤謙一、久保田由華、高井浩一、櫻井拓郎、横屋健太、芳山優、松田千鶴、宍田美也子、谷本馨、間中紗矢、山川千尋、梶田乃愛、市村量規、小森雅史、藩井紀子、坂本花梨、細田沙織、土屋絵里、高山さくら、吉田英史、景森、佐藤翼、Toei Phils.　背景／スタジオ・ルーファス、宮本実生、小田島平計、宮本惟生、ECHO　エンディング ディレクター／児玉徹郎
エンディング デジタルアーティスト／たかあき、下崎由加里、明日葉、佐山竜希、坪川尚史、小池和正、上柳健太郎、中谷純也、宮澤孝介　演出助手／高戸谷一歩
製作進行／東健太　美術／宮本実生　作画監督／爲我井克美　演出／土田豊

【30話 STAFF】 脚本／村山功　原画／小川康太郎、江口亮、加納真理子、梓理沙、中村叶子、細胞明良、朱曉玥、青木香菜、内田広之、内野桜、鈴田久登、木藤てん、諏訪昌夫、武元一真、柳野智加、森香弥子、長尾輝、関谷明日香、関崎子、ナボ、アーノルド ジョセフ・デル モンテ、マービン・メンドーサ、レム・バレンシア、ボビー・デラ ペーニャ、アレン・ジェラルデイーノ、細田誠治
背景／KLAS、沼田優華、吉崎優、森島千明、細内紘雄、平良亜梨沙、中林由義、大川典由美、佐々木友子、森下知美、澤田明子、いいだりえ　CGディレクター／町田政彌　デジタルアーティスト／竹内悟鏡、向井釈海、長谷見直季、馬場大治、黒田誠一、富安勝人、海老沢大生、ニコ・サベロン、ラボーニ・マトゥーバン、キム・バンテ、ジェトロ・サイソン　製作進行／加集和人　美術／渡辺佳人、デビー・リ　作画監督／池内直子、森亜弥子、臼井里江　絵コンテ／座古明史　演出／関崎子

【29話 STAFF】 脚本／村山功　原画／宍田美也子、清水暢江、田中伸彰、野津美智子、本古悟、廣中美佳、斉藤祥子、都筑智一、北田美弥子、上久保聡美、安田陽子、森宗弘樹、栢岡航、丸山匡彦、梶田乃愛、山川千尋、新見ちひろ、暢宮瑞典、林幹太郎、友廣愛、Toei Phils.　背景／studio AR.T.ON、楊麗麗、黄綉琼、徐桂燕、崔有真、高智榮、朴吉用、安泰俊、李智恩、増田竜太郎
エンディング ディレクター／児玉徹郎　エンディング デジタルアーティスト／たかあき、下崎由加里、明日葉、佐山竜希、坪川尚史、小池和正、上柳健太郎、中谷純也、宮澤孝介　演出助手／都築悠一　製作進行／間藤雄亮　美術／李凡善
作画監督／上野ケン　絵コンテ／紅優　演出／岩井隆央

Story Guide フワ♪



▲▶ガルオウガは故郷の星をブラックホールに破壊された。居場所を失った彼らの前にダークネストが現れたのだ



▲ガルオウガの猛攻に立ち向かうフワとプリキュア。互いを守ろうとする気持ちが高まることで、より強力に浄化する新たな力を得た





▲破壊されたガルオウガの腕輪から現れたダークネストの幻影は、フワのことを「器」と呼ぶ

重なる想い☆新たなイマジネーションの力 32話

プリキュアが新たな浄化の技を放つコスチュームへバージョンアップ！

成長したフワだが、まだ完全ではないらしい。そこへフワを狙うガルオウガが襲来する。ダークネストから与えられた腕輪でパワーを増したガルオウガは手強く、プリキュアに向けて巨大なエネルギー弾を放つ。プリキュアを守ろうとするフワと、フワを守ろうとするプリキュア。それぞれの想いが高まり、フワをユニコーンに成長させたシャイニートゥインクルペンが再び出現。フワとともにそれを使うプリキュアは「トゥインクルスタイル」にパワーアップ。5人は、新たな合体技「プリキュア・スタートゥインクル・イマジネーション！」を放ってガルオウガを撃退。そしてフワをさらに成長させるために「トゥインクルイマジネーション」を探すことになった。





◀楽観的なひかるは、トゥインクルイマジネーションがなんなのか知らぬまま引き受ける

▲スタープリンセスは「トゥインクルイマジネーションを集めなければなりません」と告げた



▲タイヤキはひかるの、タコヤキはララの、カレーライス&ピザはえれなとまどかの、おのおのが持つペンで描いた絵がそれぞれ実体化

フワの決意！お手伝い大作戦☆ 33話

みんなの役に立ちたい元気なフワは頑張れば頑張るほどやる気が空回り

ワープホールを使わずにワープができるようになったフワは、トゥインクルイマジネーションを探そうと張りきる。しかし、ひかるとララは夏休みの宿題の残りの片付け、まどかとえれなも生徒会や家の手伝いで忙しい。みんなの役に立ちたくて動き回るフワは、相手をしてくれないひかるとケンカしてしまう。そこにカッパードが現れて、ひかるの愛犬・イエティの心を吸収して武器を変形させる。駆けつけたひかるたちにフワは勝手な行動を謝り、ひかるたちもフワの気持ちを考えられなかったことを謝った。戦闘でキュアスターがピンチに陥ると、フワがワープでカッパードを不意打ちして救出。プリキュアの反撃でイエティがもとに戻りカッパードは退却した。



▲ひとりでトゥインクルイマジネーションを探そうとするフワ。心やさしいイエティが心配してついていく

▲ワープしたフワは、空中に現れて真っ逆さまに落下。頭の角が地面に突き刺さってしまった



◀ひかるが「シャイニートゥインクルペン」で描いた絵が実体化。フワは自分でパクリ♪

【33話 STAFF】 脚本／平見瞠　原画／[illegible]　動画／studio AR.T.ON、[illegible]　エンディング ディレクター／[illegible]　エンディング デジタルアーティスト／[illegible]　演出助手／村上漠　製作進行／[illegible]　美術／李凡善　作画監督／赤田信人　演出／角銅博之

【32話 STAFF】 脚本／村山功　原画／[illegible]　動画／ビック・スタジオ、[illegible]　CGディレクター／[illegible]　デジタルアーティスト／[illegible]　製作進行／[illegible]　美術／大西穣　作画監督／高橋晃　演出／川崎弘二









▶えれなは、サボテン星人を怒らせて落ち込む。通訳の仕事をする母は「笑顔も大事だが、相手を理解しようとすることはもっと大事」とアドバイスしてくれた



▲言葉は通じないが、キュアソレイユの「あなたと友達になりたい」という想いはしっかり通じた





◀▲全身の花が咲いたサボテン星人。えれなに花をプレゼントした彼は、友達をたくさん作ると誓った

34話 つながるキモチ☆えれなとサボテン星人！

宇宙人のお客さまをおもてなしするつもりだったのに……えれな困惑！

宇宙星空連合の視察員・サボローとしてサボテン星人が地球へやってくる。地球を案内するためにえれなが自宅の生花店に連れていくと、仲間の植物が売買されるのを怒った視察員は宇宙船に閉じこもってしまう。あわてるえれなたちだが、じつは、サボテン星人は偶然地球を訪れただけで、本物の視察員・サボローは休暇中と判明。そこへテンジョウが現れて、サボテン星人を巨大ノットレイにする。しかし、キュアソレイユの活躍でサボテン星人をもとに戻すとテンジョウは退散。サボテン星人の気持ちを考えなかったと反省するえれなは、地球人は大切な人に花を贈ると説明。それを聞いたサボテン星人は全身に花を咲かせ、えれなに一輪の花を贈ると旅立った。

35話 ひかるが生徒会長!?キラやば選挙バトル☆

競争相手とわかりあいたいひかるの想いが不思議な光を生む

生徒会から3年生の引退が迫る。まどかは「ほかの星からの修学旅行」など大胆な発想をするひかるに生徒会長を勧めるが、生徒会役員の姫ノ城桜子も立候補し、選挙が行われる。選挙運動中、まどかを手本にするひかるは、桜子が自分のやり方で頑張っていることを知る。一方桜子は、目立ちたがりと思われていると知りショックを受ける。そんな桜子の心で武器を変形させたカッパードが襲来。戦闘の最中「桜子とわかりあいたい」と願うキュアスターからイマジネーションの輝きがほとばしる。武器をもとに戻されたカッパードは退散した。投票前の最後の演説で、なんとひかるは自分より適任と思う桜子を応援。その結果、次期生徒会長は桜子に決定した。







▲黒い桜の花の渦に飲み込まれたキュアスターが「わかりあうことから素敵なものが生まれる」と訴えるとペンダントが輝いた！

▼選挙運動で「まどかのやり方を引き継ぐ」とアピールするひかる。ひかるらしさを期待したまどかは不満げな様子









ひかるのお絵描き
アップルパイ





◀ひかるは、桜子が生徒のことを真剣に考えているのを知り、最終演説で桜子を応援する

▶ひかるが「おとめ座ペン」で描いたもの。フワは、自分でフォークを使って食べた









▲▶テンジョウは、仲間を助けるキュアコスモを「弱くなった」とからかう。しかし、キュアスターたちは「誰よりもやさしくていい子」と反論。柄前に照れるキュアコスモは小声で感謝した





▲▼「ドン・フワフワファミリー」として潜入。身につけた者の感情によって7色に変化する指輪を即座に奪取







▲捕らえられたふたり。ユニは「盗みはよくない」と言うアンに、同じことを言っていたひかるを重ねあわせた

36話 ブルーキャット再び！虹色のココロ☆

宇宙マフィアのアジトへ潜入惑星レインボーの指輪を取り戻せ！

ユニは、宇宙マフィアのドン・オクトーが惑星レインボーの指輪を手に入れたと知り、再びブルーキャットとなり取り返そうとする。みんなで宇宙マフィアのアジトへ潜入し指輪を奪うユニ。だが、アジト捜査中に正体がばれた星空刑事 メリー・アンを助けようとして一緒に捕まる。ふたりを救出したひかるたちの前にテンジョウが現れ、ドン・オクトーを巨大ノットレイにした。プリキュアの活躍でドン・オクトーは元に戻り、テンジョウは退却。ユニが「指輪はレインボー星人のオリーフィオのもの。返してほしい」と懇願すると、ドン・オクトーは気前よく返してくれた。ユニは、ひかるたちに「怪盗は続けるが、みんなを悲しませることはしない」と約束する。

【36話 STAFF】 [illegible]

【35話 STAFF】 [illegible]

【34話 STAFF】 [illegible]



▲商店街を訪れたカッパードは、多くの人々から一緒に写真を撮ってほしいとせがまれた

◀カッパードの故郷は、訪れた異星人に水を奪われて水源が枯渇し、砂漠化したようだ

ミホッシー スターズ!

▲▼コンテストの結果は、アイデア賞／チームUMA、クールな3人組賞／スリーキャッツ、素敵なファミリー賞／天宮一家、優勝／カッパとゆかいな仲間たち

フワのお世話 クッキー

▲ララが「ふたご座ペン」で描いた絵が実体化、流れ星の形をしており、フワは大満足♪

UMAで優勝! ハロウィン仮装コンテスト☆ 37話

思い思いに仮装を楽しむ参加者たちコンテストの優勝者は意外なあの人

観星町商店街がハロウィン仮装コンテストを開催。ひかるとララのクラスはUMAに、レインボー星人の姿のユニとネコに仮装したえれなとまどかは「スリーキャッツ」を結成。フワとプルンスもイヌとバルーンマンの仮装で見物する。そこに現れたカッパードが参加者の心を吸い取って武器を変形させた。プリキュアは、ご当地ヒーロー「ミホッシースターズ」のショーを装って街の外へカッパードをおびき出す。戦いの最中カッパードは「異星人同士は理解しあえない」と言い、ララに対して「今に裏切られるぞ」という捨てゼリフを残して去る。再開した仮装コンテストの優勝者に選ばれたのは、参加者と間違われたカッパードとノットレイたちのチームだった。

輝け! ユニのトゥインクルイマジネーション☆ 38話

アイワーンを許したキュアコスモにトゥインクルイマジネーション発現

トゥインクルイマジネーションの手がかりを求める一行は、占いが盛んなウラナイン星を訪れる。以前ユニは、この星のハッケニャーンに故郷の仲間をもとに戻すには「運命の星を見つけること」と占ってもらった。彼は、ユニがバケニャーンのモデルにした人物。そこへ現れたアイワーンは、ハッケニャーンを見て怒りを新たにした。キュアコスモは、自分がアイワーンを傷つけたことを謝り、アイワーンを許して一緒に未来へ進みたいと願う。そのときキュアコスモからトゥインクルイマジネーションがほとばしり、アイワーンにもユニの悲しみが伝わる。ロボを浄化されたアイワーンは、一行に「地球へ来れば」と誘われるが、素直になれない彼女は飛び去った。



◀アイワーンの記憶。彼女は、ガルオウガたちと出会ったことで、「居場所」を見つけた

◀アイワーンは、バケニャーンとして自分をだまし、「居場所」を奪ったユニが許せない

▲占い師のハッケニャーンもネコ型の獣人。ユニが変化していたバケニャーンのモデルだ

◀▲アイワーンが放つ石化ビームと怒りを受け止めたキュアコスモは、オーラに包まれた



▶◀えれなの笑顔が気に入らないテンジョウには故郷で味わった「まやかしの笑顔」に苦しめられた辛い過去があるらしい

▲笑顔を失ったことがあるえれなは、それぞれに個性があることに気づき、笑顔を取り戻した

フワのお世話 ミルク

▲ひかるが「おうし座ペン」で描いた。フワは、自分でビンを持って飲めるようになった

えれな大ピンチ! テンジョウ先生のワナ! 39話

笑顔を大切にするえれなを指導する特別講師テンジョウは笑顔を否定!?

えれなが学校対抗英語スピーチコンテストの代表に選ばれる。指導するのは特別講師のジョー・テング。その正体は、変身したテンジョウだ。笑顔に価値はないと考える彼女は「怒りや悲しみをさらけ出せ」と指導。そこでえれなは「他人と違うことで笑顔を失ったこともあった。だけど、笑顔で接することで笑顔の輪が広がった。笑顔には人と人をつなげる力がある」とスピーチ。指導に従わないえれなに怒ったジョー・テングは学校を飛び出し、正体を現すと校長を巨大ノットレイにして襲撃。だが、プリキュアが校長をもとに戻すとテンジョウは引きあげた。悲しい経験に裏打ちされた胸を打つスピーチで優勝できたえれなは、テンジョウの指導に感謝した。

【39話 STAFF】 脚本／小林雄次　原画／聖川悠芳、原田節子、本吉晃、北田美弥子、田中伸明、アルフレッド・レイエスJr.、アレン・ジェラルディーノ、アーノルド ジョセフ・デル モンテ、ボビー・デラペーニャ、シーザー・デ レオンJr.、チャールズ ジョセフ・ヴィリャヌエバ、デニス・カブラオ、エド マーチン・クリストモ、ユージン・アイソン、フリッツ・ウラング、アイバン・ミーニャ、ジョーイ・カランギアン、ジュディ・ゼル バルトラス、マービン・メンドーサ、ノエル・アンニョヌエボ、ポール・ザルディバル、レジー・マナバット、ロメオ・アンニョヌエボ　背景／スタジオMAO、岩崎仁美、栗野いくゆ、小林亮太、山口美保、本間薫、倉橋隆、山口大悟郎、上原里香、山下千歌、増田竜太郎　エンディング ディレクター／児玉徹郎　エンディング デジタルアーティスト／たかあき、下崎由加里、明日架、佐山竜馬、坪川尚史、小池和正、上田健太郎、中谷純也、宮澤孝介　演出助手／三木琴絵　製作進行／田口貴裕　美術／齋藤優　作画監督／上野ケン、アリス・ナリオ　絵コンテ／村上貴之　演出／ひろしまひでき

【38話 STAFF】 脚本／村山功　原画／青山充　背景／KLAS、沼田優奈、錦内拓哉、古崎優、鋒島千明、森下知美、澤田朋子、森里紗、大川真由美、佐々木友子、いいだりえ　エンディングCGディレクター／大曽根悠介　エンディング CGアニメーター／竹中乾城、宮澤孝介、中村有希恵、木島啓介、山崎浩司、滝澤陽平、滝勇樹、大沢彩也花、佐々木直久、立部陽彦　エンディング デジタルアーティスト／新井啓介、先崎純一、中山美緒、細川槙介、豊田賢平　演出助手／村上渓　製作進行／東雄太　美術／渡辺佳人、デビー・リ　作画監督／青山充　絵コンテ／座古明史　演出／岩井隆央

【37話 STAFF】 脚本／山田由香　原画／小川瀬太郎、江口亮、仲理沙、備前克彦、中村叶子、髙尾綾、関谷明日香、細部明良、矢木正之、青木香菜、北田久恵、藤部昌夫、武元一貴、植野香加、ナボ、森谷弥子、加地真理子、大羽美琴、関綾子、猪狩井奈美　背景／studio AR.T.ON、桜敬麗、義境誼、谷村昇、崔有眞、高振榮、朴吉用、安慧根、李銀恩、増田竜太郎　エンディング CGディレクター／大曽根悠介　エンディング CGアニメーター／竹中乾城、宮澤孝介、中村有希恵、木島啓介、山崎浩司、滝澤陽平、滝勇樹、大沢彩也花、佐々木直久、立部陽彦　エンディング デジタルアーティスト／新井啓介、先崎純一、中山美緒、細川槙介、豊田賢平　製作進行／加集和人　美術／李凡善　作画監督／池内直子、森谷弥子、加地真理子、臼井里江　演出／関綾子

40話 バレちゃった!? 2年3組の宇宙人☆

ララが宇宙人でありひかるたちがプリキュアであることも発覚

まどかの父はララを宇宙人と疑っている。それを知ったクラスメイトもララに疑いの目を向け、距離を置くようになってしまった。そこへカッパードが襲来。まどかたちも駆けつけて、5人は2年3組のみんなが見ている前でプリキュアに変身した。カッパードは、まどかの父の心を吸収させて変形した武器で猛攻撃。しかし「みんなを守りたい。私らしくいたい」と強く願うキュアミルキーにトゥインクルイマジネーションが生まれる。武器をもとに戻されたカッパードは退散。2年3組の生徒は、意識を取り戻したまどかの父に「ララは友達」と訴えて、ララに謝罪する。そんなクラスメイトを快く許すララは、触覚で触れあう惑星サマーンの挨拶で仲直りした。





▲ありのままの自分を認めてくれたクラスメイトを守りたい。キュアミルキーがオーラに包まれた




▲▼ララの胸にカッパードの言葉「今に裏切られるぞ」が蘇る。だが、ララはプリキュアに変身して同級生を守る



▶▼まどかの父が桜子に話をしたことから、クラスにララを宇宙人と疑う空気が流れる




41話 月よ輝け☆まどかの一歩!

将来を決めるのは父ではなくて自分 決意を固めたまどかが歩みはじめる

生徒会長の任期を終えたまどかに対して、彼女の父は留学へ向けての準備をうながす。留学すればみんなと別れなくてはならないと悩むまどか。えれなは「一番笑顔になれる道を進んでみては」とアドバイスした。そこへガルオウガが襲来。圧倒的なパワーとスピードでプリキュアを叩きのめす彼は、自分を捨てて、すべてをダークネストにゆだねているという。そんなガルオウガに自分と父の姿を重ねるキュアセレーネ。彼女が「自分で未来を決める」と決意すると、トゥインクルイマジネーションの輝きに包まれた。5人の反撃でガルオウガは退散する。帰宅したまどかは、父に「将来の道は自分で考える」と宣言して大きな飛躍へ向けて小さな一歩を踏み出した。



▶◀まどかの父が彼女の将来を決めている。ガルオウガとダークネストの力関係と同じだ







▲▼父に従ってきたまどかは、自分を「自らの意志では輝けない月」となげく。えれなは「まどかの笑顔はまぶしい」と励ました





▲まどかに「自分の将来は自分で考える」と宣言され、父はまどかが誤った判断をしたとショックを受けるが、母はまどかが成長したと喜んだ

42話 笑顔の迷い、えれなの迷い。

えれなが心からの笑顔を見せてくれないと悩む母が巨大ノットレイに!

えれなは、将来何をしたいのかわからないことに頭を悩ませていた。進路についての三者面談の席で「やりたいことはとくにない」と答えてしまうえれな。それを聞いた母は、「えれなはやりたいことを我慢しているのでは?」と感じて複雑な表情を見せる。面談後えれなの母の前にテンジョウが現れて巨大ノットレイにしてしまう。駆けつけたえれなは、巨大ノットレイに閉じ込められた母が「えれなの笑顔は心からのものではない」と悩む姿にショックを受けた。それをほくそ笑むテンジョウは、笑顔にこだわるえれなの態度が母を苦しめているとなじる。プリキュアの活躍でえれなの母はもとに戻り、テンジョウは退散。えれなは家の前で笑顔を作って帰宅した。



▲「プリキュアの経験を無駄にしたくない」と語るえれな。まどかは「新しい経験を求めているのでは」と助言






◀えれなの迷いを感じた母は「家のことは気にせず、好きなようにやればいい」と諭める




▶仲間に励まされ、みんなの笑顔を守るという決意を新たにするキュアソレイユ
◀無理に笑顔を作るえれな

フワのお食事
チョコバナナ＆タイヤキ



▲ひかるの「うお座ペン」でタイヤキ、まどかの「いて座ペン」でチョコバナナが実体化

【42話 STAFF】 脚本／広田光毅 原画／清水隆正、野津美智子、宍日美也子、松田千鶴、佐々木睦、矢田梓、斉藤玲子、久保田由華、廣中美佳、市村龍星、田中伸明、牛来隆行 背景／KLAS、西崎優、峰島千明、沼田健哉、細内拓哉、森下知騰、澤田朋子、大川真由美、いいだりえ CGディレクター／町田政彌 デジタルアーティスト／竹内和雄、向井択海、長谷見直季、馬場大治、黒田誠一、富安勝人、海老沢大生、ニコ・サベロン、ラボーニ・マトゥーバン、キム・バンテ、ジェトロ・サイソン 演出助手／高戸谷一歩、仲條ひな 製作進行／間静雄亮 美術／渡辺佳人、デビー・リ 作画監督／赤田信人 絵コンテ／入好さとる 演出／岩井隆央

【41話 STAFF】 脚本／村山功 原画／小澤誠、芳山優、高山さくら、都司智一、西村元秀、西村香子、芹田明雄、上久保聡美、齋藤一幸、ジュディ・ゼル バルトラス、エド マーチン・クリストモ、チャールズ ジョセフ・ヴィリャヌエバ、デニス・カブラオ、ポール・ザルディバル、ロメオ・アンニョヌエボ、レジー・マナバット、ボビー・デラペーニャ、フランクリン・タマング、ジョーイ・カランギアン、ユージン・アイソン 背景／studio AR.T.ON、柳德龍、黃焜廷、徐杜蘭、崔有眞、高賢榮、朴吉用、安徳燦、李殷熙、増田竜太郎 エンディング ディレクター／児玉徹郎 エンディング デジタルアーティスト／たかあき、下崎由加里、明日菜、佐山竜希、坪川尚史、小笠和正、上前健太郎、中谷純也、宮澤孝介 製作進行／東雄太 美術／李凡善 作画監督／フランシス・カネダ 絵コンテ／三上雅人 演出／川崎弘二

【40話 STAFF】 脚本／村山功 原画／和田善彰、藤井芳徳、川島大郎、志筒祐香、中澤あこ、遠藤香、佐久間信一、榎本勝紀 背景／ビック・スタジオ、近藤美幸、椎名恭子、関根悠城、藤倉桃子、北園太郎、永原かれん、山田芽衣、大石典由、藤井かおり、いいだりえ CGディレクター／町田政彌 デジタルアーティスト／竹内和雄、向井択海、長谷見直季、馬場大治、黒田誠一、富安勝人、海老沢大生、ジェフリー・ピカソ、レスト・ベルナルド、ディンド・タグバシ、ダンテ・カンバレJr. 演出助手／藤葉悠一 製作進行／星野和也 美術／大西穣 作画監督／高橋晃 演出／短野森生

Story Guide フワ♪



▼笑顔の力を信じるキュアソレイユから、まばゆいトゥインクルイマジネーションの光がほとばしる





▲科学が発達したグーテン星の人々は、自分の優秀さを鼻に掛けて、自慢ばかりしている



▲テンジョウは、手駒を使わずに、自分自身を巨大ノットレイに変えてプリキュアを襲撃



▶鼻が短かったテンジョウは、彼女に手を差し伸べる人々の笑顔を嘲笑と受け取ったのだ





◀▲テンジョウを笑顔にできなかったえれなは母の胸で泣きじゃくり、人を笑顔で結ぶ通訳を目指す





笑顔への想い☆テンジョウVSえれな！ 43話

テンジョウを笑顔にできなかったがテンジョウのために涙を流すえれな

ひかるたちは、ノットレイダーの星の位置を分析してもらうためにグーテン星を訪れた。このなんとそこはテンジョウの故郷だった。この星の住人は鼻の長さを自慢し、鼻が短い彼女はあわれみを受けていた。そんなテンジョウが自身を巨大ノットレイにしてプリキュアを襲撃。テンジョウを笑顔にしたいと願うキュアソレイユがトゥインクルイマジネーションの輝きに包まれ、テンジョウは退散した。地球に帰ったえれなは、テンジョウを笑顔にできなかった悲しさで涙を流す。母は「人を笑顔にできるってすごいことよ。でも人のために泣けるのはもっとすごい」と言ってえれなを抱きしめた。涙をぬぐったえれなは、母のような通訳になりたいと決意した。

サプラ〜イズ☆サンタさんは宇宙人!? 44話

サンター星人を手伝うプリキュアが子どもたちへプレゼントをお届け♪

クリスマスイブ。アブラハムから「墜落した宇宙船を助けて」と連絡が入る。現れた宇宙人は、プレゼントに驚く子どもの顔が大好きなサンター星人。ひかるたちは、故障したサンタロボの代わりにプレゼントの配達を手伝うことにする。だが、その途中ダークネストが現れ、プリキュアは大苦戦。ロケットのAIにピンチを救われた5人が反撃し、ダークネストのマスクが砕ける。するとマスクの下にあった顔はノットレイ。ノットレイにダークネストのヨロイを装着させてパワーアップを図る実験だったのだ。そんなこんなはあったが、クリスマス当日。子どもたちの喜ぶ姿に満足したサンター星人は、修理を終えたサンタロボとともに帰っていった。











▲5人は手分けして子どもたちの枕元へクリスマスプレゼントを配達する





▲ダークネストが直々にプリキュアを襲撃したと思われたが、それはダークネストではなく、ダークネストのヨロイを装備した一般兵のノットレイだった。だが、攻撃力は格段に向上



▼サンタクロース衣装のひかるたち





▲まだトゥインクルイマジネーションが発現していないひかるは「自分だけが取り残されている」という焦りを感じていた





▲誰もが違う輝きを持っている。自分も輝き、カッパードの輝きも知りたいと願うひかるにトゥインクルイマジネーションが発現













▲ひかるが自分と友達を比べて悩んでいると知った遼じいは、幼なじみのひかるの祖父と祖母が婚約したときの焦りや戸惑いを思い出した

輝くキラキラ星☆ひかるのイマジネーション！ 45話

ついにキュアスターにも待ち望んだトゥインクルイマジネーション発現

4人に取り残されていると感じたひかるは、遼じいの「周りが変わっても、はくちょう座のデネブの輝きは変わらない」という言葉に安らぎを覚えた。ひかるの前に現れたカッパードの猛攻撃で、ひとりで立ち向かう彼女の変身が解ける。駆けつけた4人が参戦。キュアミルキーの「ひかるはひかる」という言葉と遼じいの言葉がひかるのなかで重なって、「私は私。輝いていたい」との想いが芽生え、トゥインクルイマジネーションの輝きがほとばしる。5人の力で武器をもとに戻されるカッパード。彼はキュアスターが差し伸べる手を握ろうとするが、アジトへ引き戻されてしまった。トゥインクルイマジネーションはそろったが、ひかるは一抹の不安を覚えた。

【45話 STAFF】 脚本／村山功　原画／和田直也、藤井秀穂、川島太郎、中澤あこ、進藤香、佐久間信一、榎本勝紀　背景／studio AR.T.ON.、柳善鎬、黃洪詠、徐柱寧、崔有善、高智栄、朴吉司、安善伊、李智恩、増田竜太郎　エンディング ディレクター／児玉徹郎　エンディング デジタルアーティスト／たかあき、下崎由加里、明日菜、佐山竜希、堀川尚史、小池和正、上野健太郎、中谷純也、宮澤孝介　演出助手／仲畑ひな　製作進行／星野和也　美術／李凡善　作画監督／高橋晃　絵コンテ／大塚隆史　演出／高戸谷一歩

【44話 STAFF】 脚本／平野靖　原画／増田誠治、原田郁子、松田千鶴、高藤祥子、永澤謙一、久保田由華、長田雄樹、小谷愛美、南舞、大内朋美、安田陽子、倉津五月、青山充、高井浩一、薄井紀子、細田沙織、坂本花梨、土屋紹喜、高藤凌真、入江綾子、谷本薫、平松康絵、野中紗奈、桜田乃愛、小森輝史、大野南野、久野俊平、安部貴紘、川原清香、杉山早苗　背景／ビック・スタジオ、近藤美幸、関根悠加、藤倉奈子、永塚かれん、山田寿衣、大石貴由、いいだりえ　CGディレクター／町田政彌　デジタルアーティスト／竹内哲雄、向井沢海、長谷見彩季、馬場大治、東田誠一、富安勝人、海老沢大生、ジェフリー・ピカソ、レスト・ベルナルド、ディンド・タクバシ、ダンテ・カンパルJr.　演出助手／都築悠一　製作進行／東進太　美術／大西穣　作画監督／増田誠治　演出／角銅博之

【43話 STAFF】 脚本／村山功　原画／皆川慎秀、青山充、宍戸美也子、高橋任治、福原惠次、冨木由美子、廣中美佳、丸山匡彦、本吉悟、郡司翔一、金子利恵、野津美智子、谷本薫、桜田乃愛、市村麗華、小森輝史、久野俊平、横山美雪、松田千鶴、永澤謙一、稲上晃、Toei Phils.　背景／スタジオMAO、宮本里香、岩崎仁美、林野いくゆ、小林亮太、本間薫、山口美保、山下千聡、増田竜太郎　エンディング ディレクター／児玉徹郎　エンディング デジタルアーティスト／たかあき、下崎由加里、明日菜、佐山竜希、堀川尚史、小池和正、上野健太郎、中谷純也、宮澤孝介　演出助手／村上潔　製作進行／田口美月　美術／齋藤優　作画監督／稲上晃　演出／土田豊

46話 ダークネスト降臨！スターパレスの攻防

ノットレイダーの首魁ダークネストは13番目のスタープリンセス!?

12星座のスタープリンセスは、宇宙に平和をもたらす儀式を行うために、ひかるたちをスターパレスへ呼び寄せる。そこへノットレイダーのUFO群が襲来。ガルオウガ、カッパード、テンジョウは、装着したダークネストのヨロイによって心の歪みと力を増幅されている。多くの手下を犠牲にしてスターパレスの結界を破らせようとするダークネスト。その正体は、かつてスターパレスを追われた13番目のスタープリンセス「へびつかい座のスタープリンセス」だった。彼女は「現在の宇宙をすべて消し去る」と宣告。プリキュアの活躍でガルオウガたちはもとに戻る。だが、へびつかい座のスタープリンセスは、フワとスタープリンセスを連れ去った。





▶◀ダークネストのヨロイを装備したノットレイダーがスターパレスへ。宇宙星空連合も駆けつけた



▲ダークネストのヨロイを脱いだノットレイダーの首魁、その正体は、へびつかい座のスタープリンセス！



▲多くの犠牲を払って激突するノットレイダーと宇宙星空連合の間に割って入るキュアスター



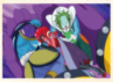


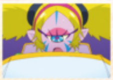
▼▶フワと12星座のスタープリンセスたちは、巨大なワープホールによってスターパレスごと連れ去られた





▲▶カッパードらをもとに戻したプリキュアはへびつかい座のスタープリンセスの攻撃で失神







▲駆けつけたアイワーンがガルオウガたち、プルンスとララのロケットがプリキュアたちを救い出す

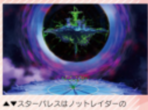
47話 フワを救え！消えゆく宇宙と大いなる闇！

宇宙消滅を狙うへびつかい座のスタープリンセスにフワが立ち向かう！

アイワーンに救助されたガルオウガたち、宇宙星空連合、そしてひかるたちは、フワとスタープリンセスたちを取り戻すためノットレイダーの星へ急行。へびつかい座のスタープリンセスは、命に与えられたイマジネーションによってゆがみを見せ始めた宇宙を消して新たな宇宙を作ろうとしている。その儀式には13星座のスタープリンセスの力とフワが必要だ。儀式を行えばフワは存在が消えると聞いて動揺するキュアスター。へびつかい座のスタープリンセスがプリキュアに向けて闇のエネルギー弾を放ち、フワがプリキュアの力をすべて己の身に宿して立ち向かう。光が弾けると、ノットレイダーの星の近くにあったブラックホールとともにフワも姿を消した。







▲▼スターパレスはノットレイダーの星の近くにワープしていた。フワとスタープリンセスを取り戻す激戦開始！







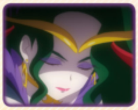






▲スタープリンセスの狙いは、フワとトゥインクルイマジネーションの力でへびつかい座のスタープリンセスを消すことだ。フワも一緒に消えると知って、キュアスターは戸惑う





▲▶へびつかい座のスタープリンセスは、想像力を巡る意見の対立でスターパレスを追われた







▲▶◀フワが闇のエネルギーに向けて突撃。ブラックホールとともにフワの姿も消滅した

【47話 STAFF】 脚本／村山功　原画／小川肇太郎、江口勇、加藤真理子、仲理沙、長尾瞳、中村叶子、備前克彦、松永真彦、細貝明良、青木香菜、北田久登、諏訪昌夫、槙野智加、森亜弥子、池内直子、関暁子、天羽美琴、金森美乃里、三浦綾華、アレン・ジェラルディーノ、ロメオ・アンニョヌエボ、ボビー・デラベーニャ、レジー・マナバット、フリッツ・ウラング、アルフレッド・レイエスⅢ、エド マーチン・クリストモ、アリス・ナリオ、フランシス・カネダ　背景／スタジオMAO、本間薫、篠原裕伸、岩崎仁美、熊野いくゆ、小林亮太、太田真琴、山口美保、増田竜太郎　エンディング ディレクター／児玉徹郎　エンディング デジタルアーティスト／たかあき、下崎由加里、明日菜、佐山竜希、坪川尚史、小池和正、上垣健太郎、中谷純也、宮澤孝介　製作進行／加集和人　美術／齋藤優　作画監督／池内直子、森亜弥子　絵コンテ／村上貴之　演出／関暁子

【46話 STAFF】 脚本／村山功　原画／稲川慎秀、田中伸昭、高橋任治、宍甘美也子、清水隆正、冨木由美子、松田千織、野津美鈴子、本吉悟、北田美弥子、都司智一、梶田乃愛、小森輝史、久野俊平、星野玲香、丸山匡彦、フランクリン・タマング、ポール・ザルディバル、デニス・カブラオ、ジュディ・ゼル バルトラス　背景／KLAS、峰島千明、沼田優琴、峰内拓哉、吉崎優、森下知美、澤田朗子、大川真由美、いいだりえ　CGディレクター／町田政彌　デジタルアーティスト／竹内樹雄、向井釈海、長谷見直孝、馬場大治、黒田誠一、富安駿人、海老沢大生、ニコ・サベロン、ラボーニ・マトゥーバン、キム・バンテ、ジェトロ・サイソン　演出助手／三木琴絵　製作進行／田口美月　美術／渡辺佳人、デビー・リ　作画監督／上野ケン　絵コンテ／座古明史　演出／ひろしまひでき

Story Guide フワ♪

48話 想いを重ねて! 闇を照らす希望の星☆



▲スターパレスを巨大な剣が貫くと、大いなる闇（ブラックホール）がいくつも生まれ、幾多の星を飲み込んだ



▶◀何もない空間にいる5人だが、イマジネーションの力でスターカラーペンが輝きを取り戻す



▲▶大いなる闇に飲まれたすべての想いを重ねたプリキュア・スタートゥインクル・イマジネーション！が炸裂

闇に飲まれた宇宙にともる希望の光 すべての生命のあと押しで宇宙が復活

フワの渾身の一撃でも消滅しなかったへびつかい座のスタープリンセス。彼女の号令で「大いなる闇」が広がり、宇宙は無に戻った。だが、ひかるたちは消えなかった。5人のなかで育ったイマジネーションによりスターカラーペンの輝きが戻り、5人は再び変身。へびつかい座のスタープリンセスとの戦いが始まった。すべての生命の想いを込めたプリキュアの一撃で大いなる闇は消滅。フワ以外はもとに戻る。おうし座のスタープリンセスは「プリキュアの力を使えばフワは蘇るが、力を失った5人はプリキュアになれなくなり、宇宙に来られなくなる」と告げた。それでも5人はフワを復活させる。ひかる、まどか、えれなは、ララやユニたちに別れを告げた。



▲▶プリキュアのイマジネーションを使うことでフワは復活した。ひかるはプルンスにフワを託し、いつか自分の力で宇宙へ行くと誓った

▶闇が消えて宇宙は平和になった。へびつかい座のスタープリンセスは、プリキュアが救った宇宙を見守ると決意



49話 宇宙に描こう! ワタシだけのイマジネーション☆



▲サマーン星では自分の足で歩くララスタイルが流行。アイワーンは惑星レインボーの人々の石化を解き、プルンスはフワの世話で忙しい

日本初の有人ロケット打ち上げ成功 乗組員のひかるが宇宙で見たのは？

宇宙に平和が戻った。ユニはアイワーンが発明した品で惑星レインボーの人々の石化を解き、ララは惑星サマーンの有名人になった。一方地球では、ひかるたちの前にララたちを乗せたロケットが出現。手違いで地球へ送られたノットレイのマスクを探しに来たのだ。そのマスクを被ったひかるの父が巨大ノットレイになる。だが、再びプリキュアに変身した5人がひかるの父をもとに戻し——。

時は流れ、ひかるは日本初の有人ロケットの乗組員になった。まどか、えれな、家族や知人が見守るなか、ひかるを乗せたロケットの打ち上げは成功。宇宙へ戻ったひかるは、懐かしいフワの声を聞き、窓から差し込む光のなかにキラやば～っ☆なものを見た……。



▲▼ひかるが出会った少女・花寺のどかは「ヒーリングっど♥プリキュア」の主人公。キュアグレースに変身し、フワとプルンスを助けてくれた

◀▲▶ララたちが再びユニコーンに成長したフワを連れて地球を訪れた!?

▲まどかの父がノットレイの試作改良型マスクを入手。それを被ったひかるの父が巨大ノットレイに!?



▲15年後の世界。ひかるは宇宙飛行士、えれなは通訳、まどかは有人ロケット開発プロジェクトのリーダー



▲フワたちと約束した通り宇宙へ戻ってきたひかるが目にしたものは!?

【49話 STAFF】 脚本／村山功　原画／和田直彰、藤井秀樹、川島太郎、中澤あこ、湊藤香、志賀祐香、佐久間信一、橋本勝紀、高橋任治　背景／鈴木弥生、ファン スヨン、リー ボンサン、増田竜太郎、いいだりえ、佐藤千恵　エンディング ディレクター／児玉徹郎　エンディング デジタルアーティスト／たかあき、下崎由加里、明日実、佐山竜希、坪川尚史、小池和正、上垣健太郎、中谷純也、宮澤隼介　製作進行／植田順一　美術／徐桂星　作画監督／高橋晃　絵コンテ／宮元宏彰、座古明史、川崎弘二　演出／川崎弘二

【48話 STAFF】 脚本／村山功　原画／松浦仁美、牛来隆行、近藤亨、原田節子、小澤誠、平林孝、池田早香、上田由希子、高井浩一、高橋任治、松田千織、都司智一、宍甘美也子、大内聡美、Toei Phils.、サンライズ作画塾、秀山優、横屋健太、井上和俊、濱田光穂、佐藤元、安田陽子、野津美智子、斉藤玲子、会津五月、永澤謙一、土屋聡義、細田沙織、坂本花梨、薄井紀子、片山敬介、高山さくら、仁井宏隆、油布京子、篠北恭太　背景／ビック・スタジオ、近藤美幸、榛名恭子、藤倉桐子、北畠太郎、永原かれん、山田芽衣、大石真由、いいだりえ　CGディレクター／町田政彌　デジタルアーティスト／竹内楓雄、向井択海、長谷見直季、馬場大治、黒田誠一、富安勝人、海老沢大生、ジェフリー・ピカソ、レスト・ベルナルド、ティンド・タグバシ、ダンテ・カンパレJr.　演出助手／村上渓　製作進行／東雄太　美術／大西穣　作画監督／松浦仁美、増田誠治　演出／宮元宏彰

Cast Interview 1

プリキュアを演じたキャストが1年間の思い出を熱く語る！



成瀬瑛美

【なるせ・えいみ】
2月16日生まれ。福島県出身。主なアニメの出演作は「まめねこ」マジカルMAJIKO役、「それだけがネック」湯奈役ほか。



キュアスター／星奈ひかる

ひかるとの出会いは まさに運命です！

好奇心旺盛なところが ひかると自分の共通点

――1年間、お疲れさまでした。アフレコ経験がほぼない状態からの1年でしたね。

はい。楽しい時間は一瞬で過ぎると言いますが、本当にそう感じるくらい短かったです。でも、濃密さも感じていますし、めちゃくちゃ楽しくて。たくさん勉強もさせていただき、物語の終わりまでキャラクターを演じきれたという達成感がありました。

――成瀬さんは、「プリキュア」シリーズの大ファンとしても知られています。オーディションの話が来たときの感想は？

「プリキュア」が好きで、これまでにもキャストの方のインタビューを読んでいたので、伝説のオーディションに参加できることがまずうれしかったです！　オーディションでは、黄色が好きという理由で黄色の子（えれな／キュアソレイユ）を受けたんですが、手応えはなかったんです。そこで、スタッフの方から「ピンクの子（ひかる／キュアスター）もやってみてください」とお話があって、黄色の子は自分なりにキャラクターを固めていたけれど、ピンクの子は考えている時間がなく、ほぼ素のままやりました。性格や振る舞いが私と似ていて、相性がバッチリだったみたいなので選んでいただけたようです。すごく努力をしたというよりは、星奈ひかるちゃんというキャラクターがいて、彼女がいるオーディションを受けることができたからプリキュアになれた。運命的な出会いだと思っています。

――結果が来るまでの間は、どんな気持ちでしたか？

私は自分がプリキュアだと思って生きてきたので、もし選ばれなかったらプリキュアじゃなかったということだし、この先の人生どうしよう……みたいな気持ちでした。なので、連絡をいただいたときはうれしすぎて、めちゃくちゃ泣きました。

――周りの人から反響はありましたか？

（でんぱ組.incの元メンバーである）夢眠ねむちゃんから背中をバンバン叩かれて、泣きながら喜んでもらえました。ほかのメンバーも、私の「プリキュア」好きを知っていたので、ビックリはしていたけど、喜んでくれました。

――1年間という長丁場のアフレコでしたが、期待や不安はありましたか？

セリフのタイミングを合わせたり、マイクに入ったり抜けたりを器用にやらなければいけない。想いの強さだけでどうにかなるものではないので、やっぱり不安でした。でも、わからないことはすぐほかのキャストの方に聞ける雰囲気だったので、たくさん周りの方に助けていただきながら、アフレコ現場に慣れていくことができました。

――ひかる／キュアスターの役作りについてはどんなアプローチをしましたか？

好奇心旺盛で、好きなものに熱中しすぎるところが私と似ていると思ったんですが、1話で宇宙に飛び出していったときはさすがに私だったらためらうだろうなと考えたんです。それでも、ひかるは行くと決めていたので、彼女みたいに強く生きなくちゃと思い、少しずつ行動や考え方を理解しようと努力しました。物語が進んで、無敵だったひかるが、惑星クマリン（10話）でカッパードに負けて挫折を覚えたときは、その演じ方に悩みました。ひかるはふだん明るくて元気だから、どこまで落ち込んだらいいんだろうと思ったんです。子ども向けの作品だから、あまり暗くなりすぎると怖いと思われるかもしれないし、でもリアリティーも持たせたいといろいろ考えました。パジャマパーティの回（26話）では、友達と遊んだ経験があまりない女子中学生が、みんなと一緒にいられるのもいいなと思うようになったというリアルさを、自分の経験を落とし込んで演じました。

――45話では遼じいに「自分だけ取り残されてると思ったり、あせったりする」と吐露していましたね。

ひかるの気持ちはすごくわかりました。私も、自分の生き方は正解だと自信を持っているけど、このままでいいのかと葛藤したことがあって。でも、遼じいは「自分は自分らしく輝いていい」「友達と比較することもある」と教えてくれた。自分と重ね合わせても思い入れの強い回になりました。

――『映画スター☆トゥインクルプリキュア 星のうたに想いをこめて』では、ララを諭し、ユーマを見送る姿もありました。

ひかるって、18話と22話でそれぞれお母さん、お父さんの夢を応援しているんですよね。お父さんに「行かないで」って言ってもいいくらいの年齢だったのに、親の気持ちを尊重できる。そんな彼女を演じたあとだったから、映画ではちょっと大人びた空気感になったのかなと思っています。

――そんな成長を経て、最終話では15年後のひかるを演じることになりました。

もっと大人っぽくしたほうがいいのかなとも思ったんですが、ひかるは中学生のころの気持ちのまま大人になるタイプだと思い、あまり変わらないように演じました。宇宙に行くシーンは、別のお仕事でJAXA（宇宙航空研究開発機構）を見学したり、宇宙飛行士の山崎直子さんと対談したりしたときのお話を参考にしつつ、自分がライブでステージに出るときの「よし、行こう！」という気持ちも込めて演じました。

――宇宙飛行士になろうと頑張った姿が、部屋にあった花の宛名からもわかりました。

はい。自分の力で宇宙に行くまでになれてめちゃくちゃかっこよかったです。48話でララが星に帰ると言ったあと、ひかるは手を差し出そうとしたけれど、結局出さなかったんですよね。あそこは声を入れるか入れまいか悩んだんです。でも私は、あそこでひかるが宇宙飛行士になる決意を固めたと思ったので、あえてその決意を表現するためにも無言で演じました。

――ひかるといえば、「キラやば～っ☆」のログセも忘れられません。

シーンに合った言い方をすることを心がけていましたが、うれしいとき、楽しいときに言うだけではないので、そのときのあ

りとあらゆる感情を自分のなかに入れて使っていきました。

ひかるらしいかどうかが演技のポイント

——ひかると縁が深かった、カッパードとのやりとりについても教えてください。

1話で目の前に現れた瞬間、ひかるが「かっちょいい！」と叫んだことにビックリしました。宇宙人だろうが、特徴的な見た目をしていようが、かっこいいと思ったらかっこいいと言えてしまうひかるを見て、本当に壁がない子なんだなと感じて。いつかは（カッパードと）打ち解けてくれる日が来るんじゃないかと思っていたので、最終的にそうなってうれしかったです。47話で見せたように、おにぎりを自分の手から取って食べてくれるって、仲よしの証拠ですよね。あのあと、カッパードの心も溶かしてあげられていたらいいなと思います。

——フワやプルンスについては？

フワとの関係は、終盤が本当にさびしかったです。でも、ひかるが最後にフワを復活させたいと思っていた気持ちは、絶対に正解だったとも感じています。プルンスは、アイドル&アニメファンのリアリティーが感じられました。マオを前にするとだいぶはっちゃけるけど、ずっとプリキュアを助けてくれた、すごくありがたい存在で。見た目はかわいく、中身はおじさんというギャップも素敵でした。

——どの話数も思い出はたくさんあると思いますが、そのなかでもとくに印象的だったエピソードを教えてください。

まずは、37話のハロウィン回。カッパードが町の人たちとはしゃいだり、仲よくなれたりするところがすごく好きでした。それから、マオが登場した15話も新しい展開でキラキラしていましたし、25話の星まつりや27話の人魚の回は、ふだんと違うファッションになるところが好きで。12話はララと別れなければいけないかもという話で、「離れたくない」と言っていたんですよね。それが最終話では言わなかったところもグッときます。40話で、ララの正体がクラスのみんなにバレて、ララを抱き締めるシーンもよくて……。

——あのシーンは、実際のアフレコでも小原さんを抱き締めたそうですね。

あんまり深く考えていなくて、ちょっとやってもいいかな、くらいの軽いノリだったんです。あと、ひかるのお当番回だと、35話で生徒会長に立候補したところも、最終的に桜子を応援しちゃうという着地点がいいなと思いました。それから、ストーリーがわからない年齢の子が見てもかわいいというパワーを持ったキャラクターデザインも素敵でした。変身バンクもよかったですよね。

——変身バンクといえば、今回は歌が入っていました。歌のオーディションもあって、成瀬さんだけ踊っていたとか。

意識したわけじゃなくて、気がついたら楽しくて踊っていたんです。今にして思えば、歌のオーディションがあったことに助けられた部分もあったのかな。セリフのときは緊張していたけど、歌うことほど楽しいことはないので、オーディションとはいえ、力を抜いて歌えたんですよ。

——合格したあと、ひかるとして歌うときに心がけたことはありますか？

キャラクターソング「イマジネーション☆ハレーション☆彡」はポップな曲なので「キラやば～っ☆」を詰め込みました。映画の挿入歌「Twinkle Stars」は、生きるか死ぬかわからない、意識のない状態で歌ってくださいと言われたんです。ユーマの絵を目の前に置いていただき、その状況を思い浮かべながら、歌うというよりも演じる感じでした。ユーマを救う説得力を出すために、大好き、愛しているという気持ち、親の気持ちで歌っていきました。この歌に想いを込められないと映画のテーマが壊れてしまうというプレッシャーもあったので、いつも以上にていねいにレコーディングに取り組みました。

——決め技や名乗りについては、実際にアフレコをしてみてどうでしたか？

途中でイントネーションが変わったらいけないと思っていたので、最初のアフレコまで何度も練習をしました。それから、たくさんいるプリキュアの誰とも被らないようにしたかったし、子どもがマネしやすいようなものにしたいとも考えて。男の子が見てもかっこいいヒーロー感と、女の子が見てもかわいいと思えるヒロイン感のちょうどいいところを狙いたいなと思いました。でも、最初のころの話数を今観ると、声が高くてキャピキャピしていますね。

——アフレコ中は「ひかるらしく聞こえたかどうか」で悩むこともあったそうですね。

大人っぽすぎたんじゃないか、ちょっとやりすぎじゃないかと悶々としたこともありました。でも、キャストの方から「えいちゃん（成瀬）から出たものがひかるだから、正解なんだよ」と言ってもらえて、吹っ切れたところもあります。

——成瀬さんから見て、「スター☆トゥインクルプリキュア」（「スタプリ」）にしかない魅力とは？

キャラクター同士の関わり方について、これまでのシリーズのなかでも個人のことを大事にしていると感じるんです。絆はあるけれど、自分自身も大事にしているからこそ、48話の別れのシーンは離れたくないって泣くんじゃなくて、選んだ道を尊重して応援するという形になったのかな。

——本作に参加して知ったことは？

次の週の台本しかもらえないのは本当なんだと知りました。なので、バケニャーンの正体がユニだと知ったときは驚きました。毎年キャストがすごく仲よくなるというのも本当で。それから、私が「プリキュア」シリーズを好きになったときには、キャラクターショーに行く年齢ではなかったので、自分が携わってみて、こんなにも子どもたちに愛されているんだと初めて実感しました。

——そんな成瀬さんにとって、「プリキュア」とは？

今までは「大好きです!!」と言えたんですが、今は涙を流しながら「大好き……」という感じかな。これまでは「プリキュア」と聞けばいろんなシリーズの子が浮かんできたのに、今は「スタプリ」しか浮かんでこなくなりました。

——最後に応援してくれた方へひと言お願いします。

1年間、精一杯ひかるちゃんとして生きてきて、「スタプリ」を愛してくれている皆さまと一緒の時間を過ごせて、とっても幸せです。いっぱい伝えたいことはあるんですが、これからも愛してくれるとうれしいです。みんな、キラやば～っ☆だよ！

成瀬瑛美から プリキュアのみんなへ

小原好美さま



ここちゃんとは「スタプリ」で出会わなかったら、一生会えなかったと思います。一緒にお祭りに行ったり、朝までSNSしたり、ひかるとララのような関係になれたのは、本当に奇跡だなと思っています。アニメではひかるがララに地球のことを教えるけど、アフレコでは私が宇宙人みたいな存在だったので、ずっとそばで支えてくれたことがうれしかったです。本当にありがとう。出会えてよかったです。これからも仲よくしてね。

安野希世乃さま



希世乃ちゃんは、笑顔が本当に素敵で、リアルなえれなさんみたいでした。希世乃ちゃんもアフレコではいつも隣にいてくれて、いろいろ相談に乗ってくれて、いつもやさしい言葉をくれて、作中でひかるがえれなさんに憧れるように、私も希世乃ちゃんを思っていました。えれなさんの弟妹を包み込む母性、あたたかさは、希世乃ちゃんじゃないと出せなかったと思います。本当に素敵です。ずっと甘えたいよぅ、LOVE！

小松未可子さま



みかこしさんは、すごく明るい人で、一緒にいるのが楽しかったです。まどかさんがコアな映画をいきいきと語る姿は、みかこしさんが由来なんだと思っています。ご自身のお誕生日のイベントにも呼んでいただいて、「スタプリ」がきっかけで素敵なご縁をいただきました。いつもキラキラしていて、気が利くし、頼れるし、すごく素敵な女性だなと思って、1年間一緒に過ごしてきました。ぜひ、これからもよろしくお願いします。

上坂すみれさま



途中参加だったすみれちゃんの席を、ずっと空けてみんなで楽しみに待っていました。マオとしてかわいく歌う姿、ブルーキャットとしてクールに決める姿、強い意志があるところ、ユニの全部がすみれちゃんに似ていると思っています。ダンスレッスン中のすみれちゃんの禄姿がユニっぽくて忘れられません。「私は私」という雰囲気があって、自分というものを強く持っている姿が魅力的だと思います。これからも一緒に輝こうね、LOVE！



小原好美



キュアミルキー／羽衣ララ

【こはら・このみ】
6月28日生まれ。主な出演作は、「月がきれい」水野茜役、「魔法陣グルグル」ククリ役、「かぐや様は告らせたい～天才たちの恋愛頭脳戦～」藤原千花役、「カッコウの許嫁」海野幸役など。

何よりも子どもたちに楽しんでもらえたのがうれしかった

ララの境遇に寄り添うような演じ方

——全49話の放送が終わりました。

アフレコが終わってすぐは心に穴が空いたみたいでした。ただ、湿っぽくなく、にぎやかでお祭り騒ぎのように終わったところが『スタプリ』らしいなと感じています。

——オーディションは、ひかる／キュアスターで受けたそうですね。

はい。スタジオで、シリーズディレクター（SD）の宮元（宏彰）さんから「ミントグリーンの子も受けてみませんか」と言っていただいたんです。資料はテープオーディションのときに見ていたので、語尾に「ルン」が付くのは知っていたんですが、改めて演じるにあたり「『ルン』ってなんだろう……（笑）」と思って。そのときは自分の感覚で演じましたね。

——歌のオーディションもあったそうで。

歌はミントグリーンの子で、というお話でした。「歌……大変だ、でも楽しそうだな」という感覚でした。スタッフの方とのやりとりでは平静を装っていましたが、内心は緊張で吐きそうでした（笑）。

——小原さんは、2019年9月に行われた「スター☆トゥインクルプリキュアLIVE2019 KIRA☆YABA！イマジネーションライブ」まで、観客の前で歌ったことがなかったんですよね。

そうなんです。キャストが公になる前に、ほかのプリキュアを誰が演じるのか教えていただいていたんですが、私以外、みんな歌手としても活動している方だと気づいて。これまでキャラクターソングを歌わせていただく機会はありましたが、人前で歌うのは人生で初めてのことで。ライブ経験がある方と比べたら誰よりも足を引っ張ってしまうから、誰よりも練習をしなければと思っていました。でも子どもたちは、キャラクターのビジュアルや歌に触れることで応援したいという気持ちも強くなるだろうとも思ったので、まず私が歌に楽しく向きあうことを大切にしようと考えました。

——キュアミルキーのモチーフカラーであるミントグリーンは、今までのシリーズにはあまりないカラーでもありました。

もともとエメラルドグリーンに近い色が好きだったので、決まったときは自分の好きな色だったのもあってうれしかったです。「ルン」や「オヨ」という独特な言葉の課題はありつつも、彼女と向き合うのは楽しみでしたし、スタッフの方からも「16年目に入って新しい試みをしたい」とうかがっていたので、ミントグリーンもそのひとつかなと。新しい要素が出てくると、どんな子なのか、どういう物語になるのかと考えるきっかけにもなると思うから、すごく素敵なことだと思っていました。その段階で「ピンクの子と対になるダブルヒロインのようなイメージで考えてください」とうかがって、より気合いが入りましたね。

——そんなララ／キュアミルキーを演じる際に、どうアプローチをしましたか？

ララは、惑星サマーンとは考え方が違う地球にやってきて、初めて外の世界に出た子どものように、いろんなものに警戒心を持っていたと思うんです。だから、最初のころはなかなか心を開かない、少しきつい感じで。あと、ララだけ頑なに家族の話をしなかったのがずっと引っかかっていて。「ララはきっと惑星サマーンで過ごすなかで、大人にならなきゃと背伸びをする気持ちが強かったのかな」と考えていたので、最初はちょっとおませさんなところを意識すれば彼女に近づけるだろうと探り探りでしたね。「ルン」はララのなかでは日本語でいう「です」とか「だよ」、うなずくときの「うん」だと捉えたら、自然にセリフも入ってくるようになりました。特徴はある子だけれど特別なことではないんだと思うことで、ナチュラルに彼女になることができたんじゃないかなと思います。

——ララは地球でいろいろ学ぶキャラクターでしたが、転機はどこだったと感じていますか？

とくに大きな転機は、学校に行った13話だと思います。ひかるたち3人が自分を受け入れてくれていたから、「ルン」に対してのクラスメイトのリアクションを聞いて、変なことなのかと思うようになって、無理やり「ルン」を使わないようにしたり、それから、AIのグローブを外して頼れるものがないなか、「どうしたの」と問われただけで逃げ出してしまったり。ララは相当無理をしているなと感じましたし、まず演じている私がしっくりこなくて。そう思えたときに、私もちゃんとララになれているんだと感じました。私は、2話でひかるから「ララちゃんはララちゃんだよ」と言われたことをきっかけにララがプリキュアになれたので、それ以来、ひかるの言葉がララをより人間にしてくれていると感じていたんです。それをえれなさんやまどかさんが見守って受け入れてくれる。その形が13話でとくにきれいに見えたし、ララがどんどん人として成長し、柔らかくなっていくのが感じられたなと。きっと、人と違うと感じることって、日常でもあると思うんです。そういうポイントを、異星人と地球人で表現することで、子どもたちにも伝わりやすくなっていると感じられた話数でした。

——ひかるとララの関係性は、時々逆転するのが面白かったですよね。時にひかるののほうがぐっと大人びていることもあって。

ひかるって、「キラやば～っ☆」って言っているから子どもっぽく見えるんですけど、お父さんを海外に送り出すのって覚悟がいると思うんです。相手のことを思いやれる姿は大人だなぁと感じていたので、ララがひかるの影響を一番に受けて、お互いが刺激しあえているのもいい関係だなと思っていました。そんなララだからこそ、後半になると励ましたり見守ったりできるようになったと思うんです。まさに、二人三脚をしている感覚でした。

——アフレコでの思い出はありますか？

最初のころはえいたそ（ひかる／キュアスター役の成瀬瑛美）がララみたいなポジションでした。彼女は自分以外がみんな声優という環境で、自分を異星人みたいに思うところもあっただろうなと思うんです。でも、えいたそはプライベートでもあのままの明るさで。そんな彼女のよさがキャラ

クターにも出ているし、彼女がいることで現場にいい影響もたくさんありました。

——たとえば、そのいい影響とはどんなことでしょうか？

収録しているときに「ひかるのセリフだけください」と言われることもあったんです。私たちにとっては、あとからセリフの部分のみを録り直すことはよくあることですが、えいたそにとっては難しいこともあったと思うんです。そのとき、自然とみんなでもう一度、プリキュアメンバーでやろうとなるんです。そうやって自然と助けあおうとするところは本編の関係に通じるものがありました。

関わるすべての人で作りあげるのが『プリキュア』

——最終話は、15年後のお話でした。

声の高さを変えたほうがいいのかという考えは一瞬よぎりました。でも、1話で登場したときと最終話に近づいたときでララは全然違うから、あえて意識して変えることはしませんでした。ララは15年の間に地球で受けた刺激を惑星サマーンの人に伝え、惑星サマーンをより素敵な星にしようと努力していたと思うんです。きっと精神的に大人になっているだろうから、落ち着きみたいなところだけ少し意識しました。

——惑星サマーンも変化していそうです。

後日、ロロ役の斉藤壮馬さんとお会いしたときに「ホバーボートが歩行になるってすごいよね」「きっとみんな苦戦したんだろうね」とお話しました。カカ役の平野文さんも最終話の収録では楽しそうにしてくださって「ララ、1年間頑張ったね」とハグしてくださって（泣）。幸せに包まれた最終話の現場でしたね。

——最終話で、ララの隣にユニがいる姿を見たときに、宇宙人のプリキュアがもうひとりいてよかったなと思いました。

私も思いました！　ララとユニってお互いとくに何も言っていなかったけれど、似ているところもあって、異星人同士ということで支えられている感じはあったんだろうなと思うんです。惑星に帰っても支えになっていただろうし、ユニもアイワーンがいるとはいえ、唯一会える仲間としてうれしい気持ちがあったと思って。きっと、48話でひかるたちとお別れしてからの15年で、ララとユニは濃い時間を過ごしていたのかなと思っています。

——ララはAIとのやりとりも、思い出深いものがありますね。

AI役の伊藤美紀さんには、いつも支えていただきました。伊藤さんは「29話～30話はララとAIの掛け合いが重要だから頑張ろう」とお話をしてくださって。「気合いを入れるために禁酒をしよう」という話にもなりまして（笑）。実際、30話はすごくいいものになったと思うし、伊藤さんにお礼を言ったら「お酒を飲みに行こう」と言っていただけて、伊藤さんとの絆も深まりました。それから、秋映画（『映画スター☆トゥインクルプリキュア 星のうたに想いをこめて』）の収録日には「ララさまを応援する気持ちで祈っておりますので、頑張ってきてくださいね。キラやばな1日を」とメッセージをいただいて、収録前に泣いてしまったくらいで。30話は、ララのAIを思いやる気持ちが深まった回なんです。この話数も、本当に大好きな回です。

——秋映画の思い出は？

それぞれの行動を描きつつ、ユーマとの出会い、敵とのやりとりと、たくさんの要素を詰め込んだ宝箱のような印象です。アフレコの前に挿入歌の「Ｔｗｉｎｋｌｅ Ｓｔａｒｓ」のレコーディングがあったんですが、田中裕太監督から今までと違うものを作りたいという熱意を感じましたし、全力で演じたいと思っていました。それもあって、台本をいただいてからセリフを全部頭に入れたんです。掛け合いやディレクションをメモするためにもちろん台本は持ちましたが、次のセリフってなんだっけと考えることをしたくなかった。流れが頭に入っていたので、ララとしてうまく気持ちを乗せられたのかなと感じています。えいたそは「ほかの『プリキュア』じゃなくて、『スタプリ』に出られてよかった」とよく言うんです。映画のときも「ひかるとしてプリキュアになれてよかった」と。私も同じ気持ちです。この人が座長で、ララの相方でよかったと思いました。「スタプリ」でよかったなと。

——『スタプリ』は歌も大きな要素でした。

ララとして歌う際にどんなことを心がけましたか？

誰よりも楽しく歌っているのがひかるで、えれなさんは力強く、まどかさんは上品で、ユニはミステリアスさと、えれなさんとは違ったパワフルさがある。じゃあ、ララとして歌うってなんだろうと思って。地球に来ていろいろなものに触れて、うれしい発見や驚きをする。そんな彼女の表情がころころ変わる様子を歌えばいいのかなと思いました。「Ｔｗｉｎｋｌｅ Ｓｔａｒｓ」は歌い出しがララとひかるでしっとりとしたスタートなので、ひかるがいるから大丈夫というところから気持ちに余裕が出てきて、ほかの3人も合流したときには安心感があり、いつもの5人がそろったうれしさとララらしさが出せたらいいなと思っていました。

——1年間走り終わった小原さんにとって「プリキュア」とはなんですか？

正直、自分とは無縁だと思っていました。なので、ララに選んでいただいてうれしさはもちろん、不安もありました。でもスタッフの皆さんが「あなたたちが主役の舞台だから、私たちはそのために盛りあげます」と笑顔で言ってくださって。関わっている人すべてで作りあげる、それが「プリキュア」なんだなと感じて。魔法のようなチームに入れていることはすごく幸せでしたし、純粋に人の心に届いて人の心を動かすことができるのが「プリキュア」のすばらしさなんだと思っています。

——最後に、1年間応援してくれたファンの方へメッセージをお願いします。

1年間応援していただいて、本当にありがとうございます。さびしくもありますが、1年という期間が決まっていたからこそ注げたものもあるし、人として大切なものをたくさん教わったと感じています。何より子どもたちに楽しんでもらえたことがとってもうれしいです。私たちは宇宙の平和を守るために冒険をしましたが、観てくださった皆さんも仲間のひとりとしてこの1年の冒険を振り返ってもらいたいです。そして、作品を通じて出会った大切な気持ち、「スタプリ」から得た星のかけらを大切にしていってください。アニメは終わっても物語は続いていますので、これからも皆さんと一緒に成長していきたいです。そして、絆や仲間を思いやる気持ち、正義の気持ちは次のシリーズにつながっているので、この先のシリーズもぜひ応援してください。私たちも、これからもプリキュアとしてそれぞれ頑張っていきます！　みんな本当に応援ありがとうルン♫

小原好美からプリキュアのみんなへ

成瀬瑛美さま



「スタプリ」がなかったらきっと出会うことはなかったと思うから、奇跡の出会いに感謝の気持ちでいっぱい。この1年ずっと隣にいるのが幸せで、えいたそがひかるだったから「スタプリ」チームがみんな笑顔で最後まで駆け抜けることができたんだと感じてます。星奈ひかるは世界中で成瀬瑛美にしかできないキャラクターだと思う。本当にすごいことだと思う。1年間本当にありがとう！　そしてこれからも、えいたその側にはでんぱ組.incさんと同じように「スタプリ」という家族がいることを忘れないでね。これからもずっと仲良しだルン。

安野希世乃さま



きよさんがえれなを演じたことで、キャラクターに魅力がさらに増していて、役者ってすごい！　と改めて感じました。きよさんの母のようなやさしさにいつも支えられてすごく心強かったですし、何よりきよさんの歌声が大好きです！　このメンバーで誰よりも歌声がパワフルで、いまだに変身バンクを見ると感動して泣いてしまいます（笑）。安野希世乃ファンになったので、これからも応援していきたいと思います♫　きよさん1年間本当にありがとうルン。

小松未可子さま



小松さんはこのメンバーのなかで一番キャラとのギャップがあって、まどかと正反対な面白いところも大好きです。えいたそと私がはしゃいでいるときは一緒に盛り上がってくださったり、時には見守ってくださったり……。えいたそが芝居で悩んでいるときに寄り添っている姿もやさしさにあふれていてすごく印象的でした。お姉ちゃんのようなやさしい先輩。またご一緒したい!!　そのときはまた仲よくしてください！　ありがとうルン。

上坂すみれさま



いつかご一緒したいとずっと気になっていたから、「スタプリ」で共演できて本当にうれしかったです！　すみぺはキュアコスモとすごく似ていて、色っぽさやミステリアスなところ、私にはないものをたくさん持っていて、本当に魅力的で大好きです。仲よくなりたくて不思議な行動をとったりしてごめんね（笑）。すみぺが加わったことで、本当に素敵な五角形のバランスのいい星のようなプリキュアチームになれたなぁと感謝の気持ちでいっぱいです。これからも仲良くしてね♫　ありがとうルン。

Cast Interview 3

『スタプリ』は年月を経て 何度も観返してほしい作品です



安野希世乃

【やすの・きよの】
7月9日生まれ。宮城県出身。主な出演作は、「冴えない彼女の育てかた」加藤恵役、「マクロスΔ」カナメ・バッカニア役、「オリエント」猿渡みちる役など。



キュアソレイユ／天宮えれな

オーディションから心を動かされたえれな

――全49話の放送が終わりました。

毎週1回行っていたスタジオに通わなくなったことで、最近ようやく終わったという実感がわいてきたところです。

――オーディションは、まどか／キュアセレーネ役で受けたんですよね？

テープオーディションで、まどかのオファーをいただいていたんです。これまで自分が演じてきたキャラクターの傾向を考えると納得だったのですが、ほかのキャラクターの台本を見せていただいたときに、明るくて、人を元気にさせられる太陽みたいな、えれな／キュアソレイユにすごくひかれて。えれなとしても自主的にテープを送らせていただきました。その後のスタジオオーディションでは両役を聞いていただきましたが、最後の歌の審査のときに「えれなで歌ってみてください」と言っていただけて、すごくうれしかったです。

――安野さんは「キラキラ☆プリキュアアラモード」で、古のプリキュア・ルミエルを演じていました。

ルミエルがおしとやかな雰囲気のキャラクターだったので、まどかだと近しい雰囲気になりそうでしたし、全然違う私を見てほしい、違うキャラクターをやってみたいという気持ちもありました。じつは、ルミエルのお話をいただいたとき、少し迷いもあったんです。プリキュアであるルミエルをやってしまったら、自分の力でプリキュアをつかみ取る夢が遠ざかってしまうかもしれないと思って。でも、スタッフの方から「心配しなくて大丈夫です」と言っていただけて、お引き受けしました。「キラキラ☆プリキュアアラモード」に琴爪ゆかり／キュアマカロン役で出ていらして、その前に「Go！プリンセスプリキュア」でチエリ／先代キュアフローラを演じた藤田咲さんが打ち上げ会場で、2度目のプリキュアとして作品に関われた熱い感謝の気持ちを述べられていたのに胸を打たれ、私ももしまたチャンスをいただけたら全力で頑張ろうという想いでいっぱいでした。それもあって、えれなという純粋に心を動かされたキャラクターをやってみたいと思ったのかもしれません。

――えれなは、物語の途中から「笑顔」について悩んでいくキャラクターでしたが、どの段階でそのことを知りましたか？

オーディションの原稿にもそれらしいセリフがあったので、物語のなかで葛藤していくということは知っていました。だから、太陽のように明るい自分を演じている面もあるということを、いつも心に置いていました。でも、人もコミュニケーションも好きで、みんなと笑顔でいたい想いや、家族への愛情は本物だと思っていましたから、彼女がそのとき何を考え、何を感じているのかを大切に演じようと思って。彼女の心の陰は、本人は意識していなかったんだと思うんです。ですから、気づいているふうに演じてはいけないとも考えていました。

――えれな／キュアソレイユを演じる上で、難しかったことはありましたか？

戦いのシーンが難しかったですね。キュアソレイユは肉弾戦がベースでしたが、「プリキュア」は当日スタジオに行くまで映像が観られないんですね。キュアソレイユに初めて変身する3話はとくに、キュアソレイユの軽やかな動きの見せ場が多く、どこでどう動いているのか、敵はどちらから来てどうかわすのかを、一度観ただけでは確認しきれず……。キュアソレイユの体の動きや体の使い方を理解しながら声を入れていくのは、最初はとても大変でした。でも、これも自分に与えられた大きな試練だと思って、乗り越えていけるように頑張りました。

――さまざまな人々と接するなかで、えれなの演じ方は変えていきましたか？

えれなは外と内の境界がはっきりしていて、「内」と判断した人たちのことは絶対に自分が守る！　という印象でした。なので序盤はとくに、大切な人たちを傷つけようとするノットレイダーのことは絶対的な悪として向き合っていましたね。それから話が進んで終盤になり、悪と思っていたテンジョウたちのバックボーンを知って共感してからは、自分の正義に迷いが出てきました。その揺らぎはえれなにとっての大きな成長だったと感じています。相手の気持ちを想像するのに長けたえれなが、さらにもう一歩先の、敵対する存在にも歩み寄るようになった瞬間だったんだなと胸が熱くなりました。14話での弟のとうまとのやりとりで感情的になるシーンで、最初に演じたときに「やさしくなりすぎています」「すべてを理解してお母さんのような目線になるのではなく、歳の近い姉でいてほしい」というディレクションをいただいたんです。年の近い弟のとうまにだけは正直にぶつかっていくえれなは、ほかでは見られない、年相応な姉の表情で新鮮でした。

――えれなは、43話で母親を前に大泣きしていたのも印象的でした。

えれなには自分の気持ちを吐露するシーンが終盤までほとんどなかったんですよね。いつも、目線の先に相手がいて。それもあって、観てくださっている方からは、超人みたいで人間味が感じられないと思われていたところもあったみたいです。序盤は行動理論がシンプルでまっすぐだったぶん、終盤で感情があふれて驚かれた方も多かったかもしれませんね。

――トゥインクルイマジネーションを手に入れるまでに3話かかりましたが、そのことについてはどう感じましたか？

まず、ここまですっきりしないで引っ張るのは珍しいなと思いました。シリーズディレクターの宮元さんが、当初は3話かかる予定ではなかったけれど、今まで内面を表さなかったえれなに必要なことを掘り下げていったら3話かかった、とおっしゃっていました。私は、英語の教師として学校にやってきたテンジョウ（ジョー・テング先生）のことを、えれなは初めてと言ってもいいくらいの憧れの存在として見たんだと思うんです。この人なら、自分の抱えている違和感を飛び越えるくらいに、世界を広げてくれるんじゃないかって。だから、目論見が破れてテンジョウが去ってしまったときのえれなの気持ちに寄り添うと……

正直切なかった。「心の闇と向き合いなさい」というテンジョウによる罠の助言をも前向きなエネルギーに変えられたえれなでしたが、大好きなかえでママから「本当の笑顔を見せてくれない」という思ってもみなかった告白をされたことも大きなダメージだったと思うし、終盤は私も痛みを感じながら、かなり感情移入しながら演じました。

——そんな成長を経て、最終回では15年後の姿が披露されました。

えれなにとって、15歳で起こった出来事は、それまで生きてきて一番大きかっただろうし、自分を見つめ直した出来事でもあると思うんです。その結果、自分の本当の望みと大切なものを再確認してからは、どんな苦労があったとしても、挫折とも思わずまっすぐに歩いていけるようになったと思うんです。揺れるえれなは15歳で演じきった気持ちだったので、その後の15年間は健やかに太陽として育ったという想いで、15年後の彼女を演じました。「声が大きく変わる印象は持たなくていいです」とも言っていただいていたので、夢を叶えて通訳を務める彼女を、堂々と誇らしく演じられました。ほかのキャストの方からも「えれなは大人になったね」と言っていただけたので、自然な成長を経た演技ができていたのかなと思えました。

力強さや軽やかさ 根の明るさを込めた歌

——本作は歌も重要な要素でしたが、えれなとして歌う際に心がけたことは?

物語は最初から全部できあがっているわけではなく、少しずつえれなのことを知っていった1年だったので、演技に関してはどのトーンが正解かというのは答えがなかったんです。彼女が驚いたときや、ホラー映画を観ておびえるときなどの意外な声は、オンエアを観てようやくベストを尽くせたなど感じるくらいでした。ただ、歌に関しては、絶対にこの声で歌うという謎の自信があったんです。彼女の歌声が頭のなかで聴こえていて、えれなはこう歌うから、えれなの歌声をきちんと奏でようというイメージを全力で追いかけながら歌っていましたね。変身バンクで流れる歌「スターカラーペンダント！カラーチャージ！」も、自分のなかではドンピシャなものが出せた。えれなの力強さ、前に突き進んでいく軽やかさ、そして根が明るい感じというのはすごく意識していました。「プリキュア」の現場では、「もう少し大人っぽく」とか「もう少し幼く」など、年齢感について言われることはほとんどないんです。ですから、えれならしく、ということを第一に考えて歌っていましたね。キャラクターソング「キミのソンリッサ」は、エールソングとして「みんなに笑顔になってほしい」という想いをこめて歌いました。

——49話を通して、とくに印象に残っているエピソードは?

とくに、ということであれば、えれなが最初に葛藤をした8話。宇宙を救うためにケンネル星のプリンセススターカラーペンをもらわないといけないんだけど、それが彼らにとっても大切な宝なので、えれなが迷ってしまう回です。ケンネル星のみんなに友好だと示したあと、奪わないといけなくなって足が止まってしまう。これは、文化や価値観が違う相手とどう向き合うかという問題だったと思うんです。結局プルンスが謝ってくれて、ケンネル星のみんなが理解を示してくれたことで解決したんですが、相手の話も聞かずに無理矢理はダメだと、踏みとどまる姿勢をえれなが示したことにすごく意味があったと思っています。ギャグとしても冴え渡っていたのが印象的でした。14話は「大好き」という気持ちで家族の笑顔を取り戻したことで、えれなの信じる家族愛のパワーが計り知れないんだなと思った回でしたし、その愛情と笑顔に隠されたえれなの本当の想いを知ることができた42話～43話も印象的でした。28話のまどかとのやりとりでは、えれなとまどかが対照的な存在でありながら鏡のような存在でもあり、互いのことがよく見えていて、力を合わせればより強くなれる、素敵な関係だと強く思いました。また、ユニに23話で「ひとりで背負い込まないで」「私たちにも背負わせてよ」と手を差し伸べていたところでは、人のことを本当にいつもよく見ていて、ほっとけないんだなと、えれなLらしいやさしさをひときわ感じられました。それから、えれなの回ではないんですが、ひかるがトゥインクルイマジネーションに目覚める45話も印象に残っています。笑顔になれないひかるに、遼じいが「ありのままでいてもいい」というやさしさを語るのですが、ひかるは遼じいと話してもすっきりしないんですよね。もう少し自分で考えてみなきゃダメなんだと天文台をあとにできるところが大人になっているなと思ったし、その後、自分を省みて強さを身につけられたところがひかるらしいと思いました。

——安野さんにとって「プリキュア」とはなんでしょうか?

「スタプリ」の立ち上げ当初、15周年の区切りを経て、次に目指すのが20周年。新しい一歩である16年目のプリキュアは、もっと新しいことに挑戦できる作品になってほしいし、そう作りたいとスタッフの皆さんがお話をしてくださったんです。それも踏まえると、「スタプリ」はオンリーワンの新しい価値観を問いかける作品になったと自信を持って言えます。人間としての誇り立ち、他者との関わりで自分を見つけていくこと……観てくれているお子さんにはもしかしたらまだ難しいのかもしれませんが、お子さんたちの心にクエスチョンをたくさん残したシリーズだったと思うんです。そして、それはきっと女の子だけじゃなく、男の子が見ても同じクエスチョンを抱くものので、さらに、もう少し年齢がいけば、ハッとするような問いかけもたくさん盛り込まれている。そう考えると、私にとって「プリキュア」は、もう女児アニメの枠を超えた存在です。そしてこの先も成長しつづける、ずっと目が離せない作品になってくれると思います。

——では、最後に1年間応援してくれたファンにメッセージをお願いします。

「スタプリ」は、やさしい言葉で作られていますが、多くの問題提起が詰まっていて、ひとつの答えだけを提示しているわけではないと思うんです。いろいろな角度から観たぶんだけ、いろいろな発見がある。なので、いろいろな世代の〝あなた〟に観ていただけて本当によかったです。年月が経って観返すことでまったく違った表情が見えるとも思うので、よければこのオフィシャルコンプリートブックとともに、何度も観返して、末永く愛してもらえたらなぁと思います。そして、何度も観て、あなたによって何度も新しく生まれ変わらせてもらえたらうれしいです。これからも心のなかに「スタプリ」という星座を輝かせて、忘れないでいてください。1年間お付き合いいただき、本当にありがとうございました。

安野希世乃から プリキュアのみんなへ



成瀬瑛美さま

笑顔を絶やさないえいちゃんが、「今、ひかるらしくいられているか」ということにいつも真剣だったのを、とてもひかるらしいと思っていました。でも、そんなえいちゃんだからこそ、生まれたときからひかるになることが決まっていたようにピッタリだなぁと思ったし、ひかるはえいちゃんと一緒に冒険するために待っていたんだと思います。あなたがひかるだったから、「スタプリ」という星座はこの形になりました。どんなときもひかると一緒に現場を照らしてくれてありがとう。



小原好美さま

ララの葛藤や孤独など考えることがたくさんあったと思いますが、ここちゃんもえいちゃんと同じく長い時間をかけて役作りをし、ララにまごころで向き合っていると感じていました。いつも「さすが〇〇」「〇〇らしい」と声をかけてくれて、ほかのキャラクターについてよく見てくれていましたね。毎週新しいグッズを見つけてきてくれて、全心全力で「スタプリ」を楽しみ、愛していると思っていました。そんなあなたに励まされていたし、背中を押してもらっていました。ありがとう。



小松未可子さま

ずっと、隣でえれなを自分のことのように見てくれて、えれなのセリフで私が迷ったときは助け船を出してくれて。まどかにも負けないくらい、自分の役と同じくらいえれなを意識してくれたことが、すごくうれしかったです。いっぱい一緒のマイクに入ってくれてありがとう。あと、プレゼントしたセレーネ色の指輪をつけてイベントに出てくれたときは、最初は照れてしまってステージでは言えなかったけどうれしかったです。1年間、二人三脚で月と太陽を歩いてくれて本当にありがとう。たくさんたくさん助けられました。



上坂すみれさま

ユニの気持ちを吐露するお芝居も、本音を押し殺すお芝居も……すばらしかったです。とくに38話でアイワーンを許すときのお芝居では、ユニの気持ちの変化を、針の穴に糸を通すように繊細に表現していて。私はその姿を純粋にすごいと思い、上坂すみれという役者を心から尊敬しました。すみぺが演じてくれたから、ユニの揺れ動く心の複雑さを知れたし、ユニを大好きになったし、えれなと同じ気持ちで歩み寄りたいと強く思えました。ユニもすみぺも大好きです。今度、日本酒を一緒に飲みに行ってください。

Cast Interview 4



小松未可子



【こまつ・みかこ】
11月11日生まれ。三重県出身。主な出演作は、『アルテ』アルテ役、『映像研には手を出すな！』さかき・ソワンデ役、『八男って、それはないでしょう！』イーナ・ズザネ・ヒレンブラント役など。

キュアセレーネ／香久矢まどか

プリキュアは成長や絆を教えてくれる「人生」のような作品

まどかの控えめな部分を声にも乗せたかった

――全49話の放送が終わりました。

最終話はすごくきれいに終わったなと感じましたし、彼女たちの未来を見られたことで「（未来の物語が）始まったな」という感覚もありました。でも、まだ物語のなかにいるみたいです。私は、プリキュアを担当させていただくというのは「プリキュア大使」になったというイメージなんです。大使の任務はまだ終わっていないぞ、みたいな。これから先、OGとしてシリーズに関わっていくという気持ちがあるので、まだ始まったばかりという気持ちもあります。

――オーディションは、まどか／キュアセレーネだけ受けたのですか？

テープオーディションでは、まどかと一緒にえれなも受けました。スタジオでまずえれなを、それからまどかをやらせていただいて。最後に歌のオーディションがあったのですが、そこはまどかで歌ってくださいと言っていただいたので、そのときは「まどかなんだ！」という気持ちでした。

――意外でしたか？

そうですね。私にとってまどかはあまり演じたことのないタイプでしたし、自分は発声が強いタイプなのに、オーディションの前に声出しの時間があまり取れなくて、正直不安もありました。私は自分の素に近いキャラクターのほうが、説得力を持って演じられるんじゃないかと考えています。ふだんの私はお世話を焼きがちだし、兄と弟がいるのでえれなのほうが気持ちがわかるんです。一方で、まどかの要素はひとつもなかったので、実際に役をいただいてからも、どこが受け入れられたのか不思議でした。

――そんなまどかを演じるにあたっては、どんなアプローチをしましたか？

まどかはお嬢さまで、乱暴な言葉遣いはしないだろうし、家のなかでも大きな声は出さないで育ったと思ったんですね。その控えめな部分を声に乗せられたらと思いました。それから、繊細な家庭だけど、母親はどこか朗らかな部分があって、堅い仕事をしている父親がそれで救われている部分もある様子を見ていると、まどかは母親のお茶目な部分も持っているんだろうなと思い、家族関係を見ながら少しずつ考えました。

アフレコが始まる段階で、バックボーンについては教えていただくんですが、細かいエピソードは本編の台本をいただいてから知る形でした。なので、気が強いとか弓道部という設定は知っていたけれど、ライバルと戦ったり、オークション会場に子どものころ連れて行ってもらったことがあったり、ということは台本で知りました。

――まどかは、冒頭はとくに誰に対しても心を開ききっていない印象でしたが、演じ分けについてはどうしていましたか？

まどかは自分がそのグループでどの立ち位置にいるかを考える子だと思うので、自ら話をしにいったり、引っ張って行く空気を出したりと変えていきました。ただ、プリキュアの4人に対しては、長く一緒にいるうちに、どんな自分も許してくれると理解できるようになったと思うんです。もしプリキュアにならなければ、慕われはするけど接しづらいというまま終わっていたのかもしれないなとも思うので、ひかるが最初にプリキュアになってくれたからこそ、今のまどかになれたと思っています。

――えれなとの関係はどう感じましたか？

まどかの芯の強さと人を思いやれる部分は、えれなにも通ずる部分があるなと思いました。思いやるからこそ悩んでしまうタイプなんですよね。でも、似ている部分があったからこそ、お互いに助けあえたのかなとも思うんです。えれなの成長と迷いが、まどかも成長させてくれたんじゃないかな。

――まどかは、冒頭から父親に隠しごとをすることになるので、かなり長く葛藤していたように思います。

じつは、オーディションの段階で「お父さんの言いなりにはならない」みたいなセリフがあったんです。だから、本編では、もっと複雑になったり、もしかしたら、陰を背負ってプリキュアを裏切ったりするのかもしれないくらいには考えていました。でも、まどかは芯が強くて思いやりがあるところは変わらなかったので、そこまでにはなりませんでした。家庭環境について、まどかはひかるたちと出会うまでに違和感があったかもしれないけれど、みんなの家も同じようなものかもしれないと考えていたと思うんです。だけど、ひかるたちと一緒に行動するようになって、自分の父親とひかるたちの父親が全然違うことがわかってきて、自分がやりたいことをもっと前に出していいことを知り、今まで抱いていた違和感の理由が明確になっていった。その結果、心の迷いが長く強く出ることになったんだろうなと思っています。ただ、まどかは周りにそれを気づかせないようにしていたので、演技の面でも感情を見せすぎないように気をつけました。

――最終的にまどかは、宇宙開発特別捜査局に勤めていて、父親のあとを継ぐような形になっているというのも印象的でした。

尊敬しているから父のようになりたい、でも父の言いなりになるのではなく、自分の道は自分で決めるとした結果、同じ道を歩んでいるというのが彼女らしいですね。父親が総理大臣になっていたのは驚きましたが、まどかも父親もきっと並々ならぬ努力をしたでしょうし、まどかを支えてくれたのは5人での思い出だったんだろうと思うと、その職業を選んだことにも夢や未来が詰まっていると感じられました。プリキュアの役目を終えてからの人生が、彼女たちをよりキラキラさせている。その未来図を見られて、すごくいい最終話だったと思います。

――15年後のまどかを演じる際に、心がけたことはありますか？

15年後の彼女たちって、今の私たちと年齢的に近いんですよね。だから、どこまで等身大で演じたらいいかを考えました。き

っとこの15年は、プリキュアになるまでの15年以上に濃かったと思うし……。でも、人間関係には変わりがないと思いましたし、当然、相手に対する気持ちにも変化がないので、あまり重く演じる必要もないのかなと思うようになりました。

——ノットレイダーのなかでは、ガルオウガとの関係がとくに強かったですね。

ノットレイダーのなかで一番落ち着いて、私たちの言うことを察して聞いてくれているのがガルオウガなんですよね。敵対はしているけど、筋の曲がったことは絶対にしない武士道みたいなものがガルオウガにはあるなって思っていて。そういう部分で、まどかとガルオウガは似ているのかもしれないなと感じていました。

変身バンクの歌は期待と高揚感を込めて

——全49話で印象的だったエピソードは？

パッと出てきたのは、ユキオの回（24話）。個人的には、マオであるユニに救われた回でもあるなと思っています。とくに、氷でできた楽器でセッションをするのが印象的で。私もマリンバをやっているので、すごく懐かしい音がするなと思ったんです。そして、あの話数あたりから、みんなの迷いが少しずつ出てきたことも印象に残っています。じつは、この回は、みんなと一緒にいることでまどかも影響を受けているんじゃないかと思い始めた回でもあるんです。収録中「スノーボード中のえれなとまどかにアドリブを入れてください」という指示をいただいて。えれなが「イエーイ！」って言ったあとに「ヘイヘーイ！」と入れたんですね。「さすがに早いです」と訂正されましたが（笑）、あのころからそのくらい打ち解け始めていると思っていて、心の変化を感じられたという意味でも印象的でした。

——まどかがそのテンションになったら、周りからも驚かれそうです。

まどかは感情を荒らげるタイプではないですからね。どこまではっちゃけていいのかは探り探りでした。ギャグ回でみんなのマネをしてリアクションもしていて、ＯＫをいただけることもあったので、通して観てくださるとそんな彼女の変化も感じていただけると思います。

——「スタプリ」は歌も大きな要素でした。まどかとして歌う際に心がけたことは？

まどかはカラオケに行ったことがなかったと思いますが、ピアノを習っているし、音感はいいだろうと思いました。その上で、歌い方はていねいで、ノリノリ感はなさそうだなと思って。上品なイメージは変えず、間違えないようにと緊張感が漂うイメージで歌っていきました。一人称が「わたくし」なので、キャラクターソングではその言葉のハマり方も面白かったです。

——変身バンクでの歌はどうでしたか？

いろいろなシーンで使われる歌なので、最初の状況に合わせすぎてもいけないし、後半はソロよりもみんなと合わせて歌うシチュエーションが多かったので、いろいろ考えました。結果、自然と歌ってしまっている状況なので、不安感よりも未知に対する期待と高揚感があるだろうと思って。ただ、まどかはあまり大声で歌うタイプではないので、エネルギーを高めつつ、繊細なバランスを出して歌うようにしました。

——名乗りや決め技はどうでしたか？

技は弓の攻撃なので、自信を持っているだろうと考え、思わず出てしまった声にビックリする、そんなイメージでした。自分がなりたい自分になれていると考えると、名乗りは一歩先にいるまどかの姿なのかなと思って、比較的強めに演じました。

——アフレコ現場では、小松さんの立ち位置はどんな感じでしたか？

まどかに近いのかな。えいちゃん（成瀬）がその場を宇宙空間にしてくれて、ここちゃん（小原）は、好奇心旺盛な癒し担当。きよのん（安野）は、みんなをやさしく見守りつつ、ライブやイベントのときはどっしり構えていてくれる。すみぺ（上坂）はユニと同じようにひとりの空間を作るタイプですが、アフレコが進むとちゃんと輪に入ってきてくれていました。私はみんなに乗っかるタイプで、えいちゃんのテンションに混じっていっちゃう。ひかるに共鳴するまどかに通じるものもあったのかもしれません。

——上坂さんからはペンダント、安野さんから指輪をプレゼントされたと聞きました。

そうなんですよ！　すみぺからは最後の収録のあと「みかこしさん、これ、プレゼントです。毎週（車で）送ってくださったお礼です」とペンダントをもらいました。なんだか初めての彼女からもらったプレゼントみたいで、イベントのときはよくつけていたんです。きよのんからはお誕生日に指輪をもらって、これもイベントでつけていたら、打ち合わせが終わったあとにきよのんから「さっきはちょっと恥ずかしくて言えなかったんだけど、指輪つけててくれたよね」って言ってもらって。

——モテモテですね。

すみぺにもらったペンダントときよのんにもらった指輪をしてイベントのステージに上がる私って、ちょっと三角関係みたいですね（笑）。

——放送が終わった今、小松さんにとって「プリキュア」とはなんでしょうか？

昔は女の子が変身して悪と戦って強くなる、みんなの憧れのヒーロー、ヒロインかなと思っていたんです。でも、実際に自分が作品に参加してみて「プリキュア」は成長や絆の物語であり、普通に生活してきた女の子たちが、自分の力で一歩踏み出していく物語。努力なくして強くなることはありえないと教えられた気がします。まさに「プリキュア」は「人生」だなと思います。

——では、最後に1年間応援してくれたファンへメッセージをお願いします。

1年間「プリキュア」シリーズ全体と、最新作であった「スタプリ」を応援してくださって本当にありがとうございました。「スタプリ」で掲げられていたテーマは「イマジネーション」「多様性」でしたが、みんなのことを認めたり受け入れたりするだけで、こんなに世界が楽しくキラキラ輝くということを学べた気がしています。皆さんの周りにもそんな人たちがたくさんいると思いますので、その人たちを愛して受け入れて、人生の一歩を踏み出す糧になっていたらうれしいです。彼女たちはいったんプリキュアの役目を終えて、自分たちの人生を歩み出しています。私たちもＯＧとしてシリーズを支えていきたいと思っています。そして、皆さんにはこれから生まれる新しい人生観を持ったシリーズを楽しんで見守って、「プリキュア」が皆さんのなかで永遠であったらいいなと思います。

小松未可子から プリキュアのみんなへ

成瀬瑛美さま



えいちゃんは、今回1年間通してのレギュラーで、しかも主人公ということで、不安も強かったと思います。でも、誰よりもこのチームの不安を消し去ってくれる存在でした。アフレコでもプライベートでも、近くにいる人を笑顔にしてくれる、本当に真のアイドルで心から尊敬しています。生まれ持った座長の、スターのパワーがあって光り輝いていました。えいちゃんだからこそ「スタプリ」は成り立ったなと思っています。

小原好美さま



ここちゃんは、みんなと私たちをつないでくれる架け橋のような存在。人なつこくて、誰に対しても分け隔てがなく、意識せずとも自然と周りのことを見られるタイプで、人との交流が本当に好きなんだなと思っていました。ここちゃんの柔らかい空気感や、いつも「プリキュア」グッズをお裾分けしてくれる、家族のような雰囲気が素敵でした。ふと横を見るとそこにいてくれるのが愛おしくて、とてもキュートでした。

安野希世乃さま



きよのんとは声優デビューが近くて、勝手に同期的な存在だなと思っています。ふとした悩みや、ふと気づいたこととかをすごく相談しやすくて、えれなとまどかの関係性そのもののような感じがありました。街中で、えれなカラーの洋服を見かけると、つい連絡をしたくなるような近しい友達ですね。きよのんは母性も強いですが、私は姉妹みたいな感覚で接していたところもあるかもしれません。ずっとすごく安心感をくれる存在でした。

上坂すみれさま



すみぺは、本人にも気まぐれでネコっぽい部分やあまのじゃくなところがあって、めちゃくちゃかわいいんです。そこがユニっぽくもあり、妹分的な存在だなと思っていました。改めて言うと恥ずかしいんですが、たまたま車でアフレコに来られなかったとき、帰り道で「今日も一緒に帰っていいですか」って言ってくれたことが、お付き合いしたての中学生カップルみたいでものすごくときめきました。内心、すごくうれしかったです。

Cast Interview 5

ユニとアイワーンが一緒に惑星レインボーを取り戻してくれてよかった



上坂すみれ

【うえさか・すみれ】
12月19日生まれ。神奈川県出身。主な出演作は、「メジャーセカンド」藤井千里役、「社長、バトルの時間です！」ヴァル美役、「恋する小惑星」森野真理役、「うる星やつら」ラム役など。



キュアコスモ／ユニ

気持ちを切り替えながら演じたユニの変化

——全49話の放送が終わりました。

すごくいろんなことをやった気がします。あっという間のようで長い道のりだったようでもありますが、最終話と最終決戦が素敵だったので、今は晴れやかな気持ちです。

——いろいろなことというのは、リアルでのイベントやライブも含まれていますか？

ライブや舞台挨拶ももちろんですが、玩具用の音声の収録や歌など、収録の種類も多かったんです。それから、ユニは本心を言わない子だけど本当は悪い子じゃない。その「悪くない部分」をどのぐらい出していけばいいのかさじ加減が難しく、キャラクターをつかむまでにいろいろ試行錯誤をしたので、それも含まれています。

——オーディションで受けたのは、ユニ／キュアコスモ役だけでしたか？

そうです。当時はまだ名前がなくてレインボーの子でした。過去にも『プリキュア』シリーズのオーディションを受けたことはあったのですが、どうにも自分とプリキュアが結びつかず、マネージャーさんに「いいんですか、受けますよ、文句言わないでくださいね」みたいな気持ちでした（笑）。

——その段階でのユニに対する印象は？

器用に変化ができるのに、自分でも本当の気持ちがつかめないところが面白いなと思いました。私は子どものころ、魔法が使えるとしたら全部の魔法を使いたいと思っていたので、全属性を持ち合わせているユニはとても魅力的でした。

——ユニは15話からの登場でしたが、スタジオの雰囲気はどうでしたか？

1クール以上経っているので場はできあがっていました。でも、4人ともユニを待っていたと歓迎してくださいましたし、安野さんや小松さんとは別の現場でも会っていたので、知らない人ばかりで緊張するというよりは、アフレコスタジオに緊張するみたいな感じでしたね。大きなお城に単騎で乗り込むような緊張感がありました。

——ユニはいろいろな面があるというお話がありましたが、そんなユニを演じる際には、どんなアプローチをしましたか？

『スタプリ』は台本をいただいて、映像は当日スタジオで観るという収録方法だったので、とにかく台本を読み込みました。今、ブルーキャットなのかマオなのか、ユニなのか……キュアコスモのときも、ちょっと雰囲気が違うというのが演じ分けられるように、いつも考えていましたね。ユニは語尾に「ニャン」と付くので、かわいいのかと思っていたら、「ニャン」が付くのが当たり前の星の生まれだからということだったので、気合いが入っているとか、あしらっているとか、そのときの感情に合わせた自然な「ニャン」を練習しました。

——ブルーキャットは、基本的にはクールで落ち着いた雰囲気でしたよね。

（ブルーキャットが惑星レインボーの指輪を取り戻しに行く）36話はブルーキャットっぽさがきちんと出せたかなと思っています。36話ではシリーズディレクターの宮元さんから、ちょっとセクシーなニュアンスがあるとそれっぽいんじゃないかというお話もあって。ものを盗む以上、かっこいい怪盗として迷いを見せない演じ方を心がけました。

——マオは、王道のアイドルのようでした。

私、なぜかマオみたいなテンションの高いキャラクターを演じることが多いんです。マオは宇宙一のアイドルなので、とにかくみんなに元気をあげられるようなポジティブさを意識しつつ、歌でもかわいさを前面に出して、そしてちょっと怪しさも出せたらと演じていました。

——本来の姿であるユニについては？

ユニは、星まつりの回（25話）で浴衣を着てはしゃいだりもするけれど、惑星レインボーのこと思い出した途端に帰ると言い出したりして、基本的に言葉がたりない子だなと思っていました。ひかるやララなら思い出したとしても我慢してなんでもないふりをすると思うんですが、ユニはさびしいけどひとりで頑張っている反動が出てきちゃうというか……。それもあって、話数ごとにユニの印象って結構違うんです。冷静なときは遠巻きに足を組んでみんなをリラックスして見ている感じですが、キュアコスモに変身した回（20話）や、アイワーンを許す回（38話）など、本心で話すときはめちゃくちゃ言葉数が多いんです。「最初から言ってよ」みたいなところはありますが、そこがかわいいところなのかな。

——ユニは相手によって、接し方がとくに違う印象です。

フワのことは終始かわいがっていたけど、畏敬の念があるというか、この子は傷つけてはいけない、プリンセスからの宝物みたいな気持ちが強かったような気がしますね。逆にプルンスのことは「私のファンでしょ」みたいに雑に扱って。ファンだとわかった途端にタメ口になっちゃうところがよかったですね。ひかるはプリキュアになるきっかけをくれたので、この子はすごい、到底理解できないこともやってのけちゃうと思いつつ、はしゃぎすぎて疲れないのかな、と思っているような感じでしたね。ララに対しては、ちょっと不思議な関係性だなという印象でした。いろんな友達がほしいララと、ひとりが好きなユニって対照的なんですけど、きっとふたりで話すときは「宇宙あるある」で盛り上がることもあっただろうし、ララの考えも一理あるなと思いながら接していたんだと思います。えれなは、フワパニック（23話）でパニックになったときに隣にいてくれたのが印象的です。ただ、あまりふたりで行動することはなかったし、ユニはえれなとまどかをふたりセットで見ている感じがして。ひかるたちの保護者なんだから、ちゃんと見ておいてよ、みたいに接していた気がします。

——基本的にはひとりが好きなユニですが、オリーフィオにはなついているんですよね。

もしかしたら、ただ人見知りだっただけかもしれませんね。戦っている最中に「ユ

ニはやさしい」って言われて恥ずかしそうにしていたこともあったので、ネコっぽいというか、ひとりっ子気質というか……。ただ、ネコとは集会をするんですよね。あのとき何を話していたのか。ネコがどう思っていたのかが気になります。

――キュアコスモとして、名乗ったり決め技を言ったりするシーンはどうでしたか？

変身バンクがすごくかわいかったんですが、キュアコスモは力強くとディレクションをいただいたので、惑星を取り戻すというモチベーションを込めました。バトルや名乗りもかわいい外見に負けないよう、力強さを入れることを心がけました。

「プリキュア」は老若男女に元気を与えてくれる存在

――ノットレイダーのなかではアイワーンとの因縁が深かったですが、彼女とのやりとりについては？

アイワーンは、ユニがブルーキャットにならざるを得なかった理由でもあるので、ずっと敵として認識していたんですが、ユニがロケットを取られるようなコミカルなシーンのときは、バケニャーン時代の仲のよさが見えたんです。だから、和解できたらいいなという気持ちはありました。

――台本をもらうまで細かいことは知らないというお話でしたが、バケニャーンがユニだったというのはいつ知りましたか？

19話の台本をもらうまで知りませんでした。バケニャーン役の上田燿司さんが素敵だなぁってずっと思っていて。なので、正体がわかったときはビックリしました。19話以前にバケニャーンがブルーキャットなんじゃないかと考察している人はさすがだなとも思いました。

――ちなみに、19話以外で台本をもらって印象的だったエピソードは？

フワが成長する31話は、台本の表紙のイラストまで変わったので驚きました。それからサボテン星人にセリフがないことも台本で知ってビックリしましたし、フワパニックの回では、台本に「1フワ　木野日菜」「2フワ　木野日菜」「3フワ　木野日菜」……って書いてあって、木野さん大丈夫かなと思った記憶があります。

――全49話のなかでとくに思い出に残っているエピソードを教えてください。

ブルーキャットが再登場（36話）してドン・オクトーと対峙するシーンがすごく好きです。惑星レインボーのお宝の指輪をドン・オクトーが持っていると知ったブルーキャットが最初は盗みに行こうとしたんだけど、ひかるから諭されて、（星空刑事 メリー・）アン警部補にも説得されて、最後は「返してほしい、お金なら用意する」って言うところがいいなって思って。ドン・オクトーが返してくれた指輪をブルーキャットがしたときに、悲しみのブルーになるのが、彼女の悲しさをより引き立てるなと思っていました。それから、33話で大きくなったフワがお手伝いをしようとするんですが、そのわがままな感じはかわいさが詰まっていましたね。あと、5人の技が完成した32話。ずっとプリキュア・サザンクロスショットを横で見ていたので、合わせ技に入れてもらえたのもうれしかったです。

――最終話は15年後の物語になりました。

ひかるが地球からララに会いに行くことがまさか実現すると思わなかったので、そこまで描いてくれて感謝の気持ちでいっぱいでした。ただ、レインボー星人は歳を取らないのか、姿が変わらなかったので、成長したアイワーンを見て、ちょっとうらやましくて。でも、一緒に惑星レインボーを取り戻してくれて開拓している姿が微笑ましく、一番いい結末を迎えられたなと思います。それから、ララともいい友達になれたみたいで、それもうれしかったです。

――惑星レインボーがもとに戻っていくところは、感慨深いものがありましたか？

オリーフィオは回想シーンか石になった姿しか見てこなかったので、いきいきとしている姿を見られたのがよかったです。ただ、最終決戦後、スタープリンセスたちに「惑星レインボーは戻るの？」と聞いたら「あなた方ならできます」って言われたのが、ちょっと複雑で（笑）。本当になんとかしたユニたちはすごいんですが、スタープリンセスって言葉がたりないと言うか……。「ペンを集めて」「トゥインクルイマジネーションを集めて」「惑星レインボーは自力で頑張って」と段階を経てくれたのは、目の前のタスクをきちんとこなせるように指示してくれたのかもしれないので、理想の上司に近いのかもと思います。

――ユニとして歌うときに、どんなことを心がけましたか？

変身バンクの歌は、気持ちのエネルギーで変身をするという指示をいただいたので、心の声を歌にしたつもりです。ユニのキャラクターソングは独白なので、いろいろな歌い方をして、劇場版の主題歌「Twinkle Stars」は、レコーディング済みの方の声を聞かせていただきつつ、みんなを見守りながら歌いました。出会いにありがとうというやさしい歌だったので、そのやさしさも出せたらと思っていました。

――1年終わってみて「プリキュア」に参加したと実感することはありましたか？

小さなお友達がキュアコスモの格好をしてくれたり、親子で観ていますとお便りをいただいたりして、ようやく実感した感じです。私としては、1年を通してキュアコスモ役と自信を持って名乗れるようになったのは大きな変化でしたし、この1年で得たものがたくさんありました。

――そんな上坂さんにとって「プリキュア」とはなんでしょうか？

無条件にすごいところに連れてってくれる存在かな。私は子どものころに「プリキュア」を観られなくて、知識がおぼろげな状態でスタートしたんですが、そのすごさをあらためて実感しました。「スタプリ」は宇宙に行ったり、宇宙人プリキュアがいたりして、プリキュアがなんでもできると教えてくれました。老若男女に元気を与えてくれて、「プリキュア」が終わったら日本はおしまいなんじゃないかと思えるくらい、人々の精神衛生に関わる重大なファクターを担っている気がします。

――最後に、1年間応援してくれたファンへメッセージをお願いします。

とにかく1年間、「スタプリ」のみんなと一緒に走りきってくださってありがとうございます。私たちも「スタプリ」の好きなところを、いつか皆さんと話せる機会ができたらうれしいなと思っています。最終回では15年後が描かれましたが、その先もひかるたちには素敵な道が続いていくので、これからもひかるたちのことを大事なお友達だと思っていってほしいです。

上坂すみれから プリキュアのみんなへ

成瀬瑛美さま



みんな言っているかもしれませんが、ひかるそのものでした。初めて会ったときの挨拶から、言葉に星がたくさんついているみたいで、この人が確かにひかるだと感じたことを覚えています。どんなに長い収録でも、自由で笑顔でした。私は目が死にがちなので、最後までその技術を盗めなかったことが心残りですが、成瀬さんのことを思い出すと、とても元気になれます。存在してくれてありがとう。これ以上の座長はいないと思います。

小原好美さま



小原さんとは、ほぼはじめましてだったんですが、天然で人なつっこいところがあり、私は小原さんが地球に帰化したララにしか見えませんでした。最初、なかなかスタジオで話に入り込めなかった私に、誰よりも話しかけてくれましたし、お菓子やおもちゃの指輪もくれて、なんだか孫みたいな気分でもありました。本当にかわいらしい方なので、そのまま大きくなってほしいです。なぜか、すごく年下に感じるという不思議な魅力があります。

安野希世乃さま



安野さんは日本酒の鬼という認識でしたが、リテイクを自ら申し出る回数も多く、ライブで人の立ち位置も覚えていて、ていねいなお仕事をされる方でした。えれなの声がトーンは低いのにやさしさがにじみ出るのは、安野さんの人柄ゆえだと思います。あと、安野さんのお誕生日にドーナツを贈ったのですが、私の誕生日には素敵なトートバッグをくださり、どう見ても価値が釣りあわずごめんなさい。でも、これからもよろしくお願いします。

小松未可子さま



みかこしさんは、私が最初になついた先輩です。途中参加だった私に「スタプリ」の現場が通し見（※）であることや、台本の文字の大きさまで教えてくださって、すごく頼もしかったです。まどかみたいなお嬢さまのお芝居は新鮮でしたが、エレガントななかに力強さがあったのは、みかこしさんだからだと思います。時々アドリブで大喜利をしている姿がみかこしさんらしくて楽しかったです。いつか、まどかのNG集が出ることを祈っています。

※アフレコ当日に、その日に収録する映像をスタジオで観ること。作品によっては練習・確認用に事前に映像が配られることもあるが、「プリキュア」シリーズはそれがない

キャストスペシャルメッセージ

プリキュアを支えたフワ&プルンスと、プリキュアと戦ったノットレイダーのキャラクターを演じた声優陣からのメッセージ!

フワ役 木野日菜

Q 出演が決まったときの感想は?

「HUGっと!プリキュア」に出演させていただいたとき、現場に行くたびに熱量の高さを体感していたので、次こそはもっと深く関わりたいという強い気持ちでオーディションに臨みました。なので、フワ役として出演が決定したときは、とてもとてもうれしかったです!

Q キャラクターの印象はどうでしたか?

フワのお顔は、オーディション会場の控え室で初めて見たのですが、見た途端に今まで練習していた台本の「フワ〜!」というセリフが輝いて見えました。それほどフワがかわいかったんです! 実際のアフレコで動くフワを初めて見て、それもまたかわいすぎて悶えました……。最終話目前で私がどうしてもプリキュアたちとお別れしたくないよ〜と涙ぐんでしまうなか、フワは「みんなを守るためにお別れする! みんな今までありがとう〜!」と迷いなく強く言っていて、フワからたくさんのことを教えてもらった気持ちでした。フワの成長には感動しっぱなしでした。

Q 演じる際に心がけたことは?

本当の赤ちゃんや小さい子どものように、というのを心がけました。

Q ユニコーンの姿に成長してから、演じ方は変えましたか?

ユニコーンの姿になっても中身はフワのままなので演じ方が変わることはなかったのですが、話せる言葉の量が増えたので、人間だとしたら2〜3歳のお話が楽しくなってきたころかなぁと思って演じさせていただきました。

Q プリキュアにひと言お願いします!

「ありがとう」という感謝の気持ちでいっぱいです。「スター☆トゥインクルプリキュア」という作品からたくさんのことを学びました。この感じてきた気持ちは、生涯ずっと持ち続けていきたいと思います。

Q シリーズを通して印象的だったエピソードは?

フワがマタークッキーを食べてとんでもなく多くなってしまった"フワパニック"のお話はすごく印象に残っています。演じていてすごく楽しかったです……! クリスマスのお話も大好きでした! サンター星人が想像していたサンタさんのイメージと違って面白かったですし、みんなの意訳が見えてきて、さびしさを感じるなか、フワが「どこへでもワープしてみんなと会える〜」と言うシーンも好きです。プリキュアのなかで演じながら季節を感じられることは、何よりも幸せなことでした! あと、フワがユニコーン姿に成長して、「フワなんでもできるフワ〜!」と言ってワープをいっぱいするけど、失敗して涙目に落ちちゃう話も好きでした。みんなのお手伝いをしたいと張り切るけどうまくできなくて、ひかると初めてケンカするというお話もあたたかくなりました。

Q 最終話まで終わっての今の気持ちを聞かせてください。

1年前、フワ役として出演が決まってこんなに長い期間演じさせていただくことが初めてだったので、自分自身どんな成長ができるだろうとワクワクしていました。1年後の今、最終話を迎えて「スター☆トゥインクルプリキュア」にたくさんのことを教えてもらって、心がとても豊かになり、声優としても成長できたと思います。大人になって忘れかけていた気持ち、大人になったからこそ突き刺さるあたたかくてまっすぐな想い、言葉、行動の重み、イマジネーションの輝き、小さい子どもたちに伝えたい大人たちの想いは、もちろん子どもたちにも、そして大人にも伝わるんだと驚きました。こんな素敵な作品にフワ役として関われたことが、本当に本当に宝物です。ずっと忘れません。

Q 読者にメッセージを。

1年間「スター☆トゥインクルプリキュア」を観てくださった皆さま、本当にありがとうございました!! プリキュアへの応援を日々の生活のなかで感じることも多く、そのたびにとてもうれしかったです。お子さんをお持ちのお母さんが「娘に伝えたいことは、代わりにプリキュアが教えてくれた」とお話されているのを聞いて、それがまさに私も感じたことのすべてでした。私自身もプリキュアに教えてもらったことがたくさんあるなかで、このプリキュアのあたたかいメッセージが子どもたちに届くなら、その想いを受け取ってこの先の人生に変化を起こせるならば、こんなにすばらしいことはないと思います。私もいつかお母さんになる日が来たときは、「プリキュア」を一緒に観て、一緒にそのあたたかいメッセージを受け取れたらと思います。

プルンス役 吉野裕行

Q 出演が決まったときの感想は?

おじさんなのに……。

Q キャラクターの印象はどうでしたか?

おじさんなのに……。おじさんでいいんだよね……?

Q 演じる際に心がけたことは?

おじさんだよなぁ……。プリンセス、フワが大事。そのへんの使命感。

Q プリキュアにひと言お願いします!

少女時代にプリキュアで経験したことが、大人に成長してきっと活かされていますよね。

Q シリーズを通して印象的だったエピソードは?

壮大なマシントラブル……。学生時代の「あれ? これもうここで授業終わりで帰っていいパターンになるんじゃね?」そんなワクワクがありました。今までこんなことなかった。そういう瞬間にどう行動し対処するのか、いい経験だったと思うし、データが取れましたね。

Q 最終話まで終わっての今の気持ちを聞かせてください。

素直にこの作品に関われたことに感謝します。だいぶ好きだと思うんだよね(笑)。

Q 読者にメッセージを。

「スター☆トゥインクルプリキュア」が、あなたにとって思い出深い作品であったならうれしいでプルンス。

ダークネスト／へびつかい座のスタープリンセス役 園崎未恵

Q 出演が決まったときの感想は?

へびつかい座のスタープリンセスが初めて登場する放送当日に、ある記事でもお話しさせていただいたんですが、長く続くこのシリーズにとても重要なお役で登場させていただけることが本当にありがたく感じていました。ただ、実母がバレエの教室を営んでいるのですけれども、そこの生徒さんたちも多くご覧になっている「プリキュア」への出演を内緒にしなくてはならないのが、正直なところちょっと辛かったです(笑)。

Q ダークネストとして初期からアフレコに参加していたそうですが、そのときも「へびつかい座のスタープリンセス」であることは意識していましたか?

ダークネストはご覧いただいたとおり、得体の知れない、性別もわからない敵キャラクター。初登場のアフレコから、ダークネストがじつはへびつかい座のスタープリンセスであり、なぜダークネストと名乗り、ひかるたちと相対することになったのか、ということをシリーズディレクター(SD)の宮元さんから説明をされていましたので、ヨロイを着て闇の力を纏っていたとしても、心にはつねにへびつかい座のスタープリンセスが持つ信念がありました。形は変わっていきますが中身は変わりません。でも、闇の力による外側の形状もあります。そこで当初の形を持たないときはちょっと儚くようなイメージで、ヨロイを着たときは物理的な強さや硬さを持ったイメージで演じ分けを考えていました。——とはいえ、加工されちゃうんですけどね。

Q キャラクターの印象はどうでしたか?

何しろダークネストは初登場時、黒い"ゆらぎ"のような様子で出てきましたので、てっきり"概念としての悪"だと思っていたので、段階で正体を知らされて、印象が変わったというか、根本から役作りを考え直さなければならないほどでした。そういう意味で、第一印象との変化はものすごかったです。ダークネストの実体化した姿とプリンセスのときのデザインは最初から知らされていたわけではなく、わたしには「ほかのスタープリンセスたちと同じ様子になる予定です」とざっくりとした概要を聞かされていただけだったので、毎回登場を楽しみにしていました。基調になるカラーは初めからグリーンと決まっていたようですが、線画で描かれた設定資料には色は載っておらず、それを知らずに初回のアフレコにたまたまグリーンと黒のワンピースを着ていたら役作りだと思われました(笑)。

Q 演じる際に心がけたことは?

闇の力を纏って性別も不明の状態、実際声もエフェクトをかけてわからないようにされていましたが、たとえ加工されていたとしてもしゃべる口調などから性別や演じ手が、わたし園崎未恵であることを視聴者の皆さんに気づかれないように、かなり気を遣って演じていました。往年の作品でさまざまな敵役を演じた先輩方のお芝居を参考にしたりもしました。宮元SDからは、「暗くなり過ぎないようにしてください」という(おそらく正体がプリンセスだから、ということなのだと思います)、あとは各シーンで求められている演技と、わたしの頭のすりあわせとしての要望が、各話の演出の方から都度出されていました。

Q シリーズを通して印象的だったセリフやエピソードは?

印象に残っているセリフはやっぱり、「キラやば〜っ☆」ですかね。ひかるがずっと口にしていたこのキーワードは、へびつかい座のスタープリンセスの気持ちを動かし、宇宙の消滅をとどめることができました。この言葉を、へびつかい座のスタープリンセスにどう言わせるか、わたし自身がとても悩んだセリフでもあります。最終話は、そんな「キラやば〜っ☆」な世界の一歩を見た気がして、だいたい泣いていましたね……。個人的にはプリキュアひとりひとりと部下たちが、戦いを通じて心が通う一連のエピソードがとても好きでした。

「スタプリ」はゲストの方やファミリーがとても豪華で、わたしが普段から収録の現場でお世話になっている方々や、わたしがデビュー当時にお会いした先輩方と一緒に仕事ができるという、夢のような番組でした。また、キャストのお誕生日にキャラクターのイラスト入りケーキが出てきたり、スタッフの方のお祝いごとに花束が贈られたり、いつでも愛に溢れた、あたたかな仕事場でもありました。プロデューサーの柳川(あかり)さんの各話に込められた想い、そしてひかる役の成瀬さんの、周りがパッと明るくなる持ち前の元気さが、そういう空気を作っていたのかな、と感じています。余談ですが、部下のガルオウガ役の鶴岡君が、じつはイチゴ大好きというのがスタジオ内で発覚し、イチゴのお菓子はまず鶴岡君か、みたいな雰囲気になっていたのがなんとも楽しかったです。

Q ほかの12人のスタープリンセスたちに、今何か言えるとしたら?

優雅にお茶会などをしているが……何かあったら我はすぐに闇を放つぞ……?

Q 最終話まで終わっての今の気持ちを聞かせてください。

最後は「宇宙に行く」というひかるの想いが、みんなと重なった最終話。各話でコツコツと積み上げてきた伏線が"わッ"とカタルシスを呼ぶ、怒涛のラスト数話でしたが、本当に、この「スタプリ」に関わることができてよかったなぁ、としみじみ思っています。作品は、いろいろな人たちの想いが重なってできていきます。その重なる一瞬を迎えたことが、とても光栄でした。各話で重なっていく、たくさんのみんなの想い。「みんなの想い、重ねるう〜!」が、プリキュアの5人だけでなく、ましてや作品のなかだけにとどまらず、こんなに大きな意味を持つなんて!

Q 読者にメッセージを。

まずは1年間を通じたご視聴、本当にありがとうございました。へびつかい座のスタープリンセスとしてEDにようやく名前が載るころには、もう最終話間近でしたが、1話ずつ最初からまた観ていただきたいぐらい、多くの名言に溢れています。お子さん向けのアニメーションに見せかけて、じつはそれを一緒に観ている大人たちに、さまざまな疑問を投げかける、それがきっと「プリキュアなのだなぁ」と感じていました。「スタプリ」の番組のテーマは「多様性」と、番組放送当初からずっと言われてきました。夜空に浮かぶ星たちのように、世の中にはたくさんの人たちがいて、人それぞれの考え方や価値観が存在しています。大人のわたしたちはそれを知っていますし、世の中のみんながわかりあい、仲よくし、手を取り合うのが理想なのでしょうが、それがなかなかうまくいかないことも、わたしたち大人はわかっています。そしてそれらが摩擦を生んでいる様子も、つねに目の当たりにしています。わたしの演じたへびつかい座のスタープリンセスは、"仲よくする"というのが解決のすべてではなく、相容れないのならば、それぞれでそっと距離を置く、というのも、お互いをわかろうとして得られた結果であり、ひとつの形だということを示していたのではないかな、と思っています。残念ながら、人はひとりではいられません。世の中と関わらなくては生きてゆくことができません。よりよい自分であるために、なりたい自分になるために、自分のイマジネーションと誰かのイマジネーションを、重ねてその違いを知るのだと思います。その"違い"をお互いが認めることで、それぞれの個々がよりいきいきとできる、豊かな未来を創っていけるではないでしょうか。未来に描く、未来を描く、子どもたちはもちろん、豊かなイマジネーションでたくさんの未来・夢を描いていきますが、大人のわたしたちも、まだまだたくさんの未来を描くことができるんだよ、ということを、1年を通して教えてもらった気がしています。想像は、創造のタネです。わたしたちのなかには、想像する力と、それらを創造し、実現する希望が存在しています。そのタネが芽を出し、花が咲くために、ときには、ひかるたちプリキュアのような"勇気"がきっと必要です。なりたい自分を、みんなが描けますように、希望に満ちた未来が描けますように、そう願っています。

ガルオウガ役 鶴岡聡

Q 出演が決まったときの感想は?

昨今、1年間付き合う役と巡り合えることはなかなかないことですので、気合いが入り、身の引き締まる想いでした。

Q キャラクターの印象はどうでしたか?

なかなか動かない御仁でしたが、フード付きマントを纏うミステリアスなあの風体から繰り出される天然さに、フードやマントでは驚きを隠しきれませんでした。今思うと、ガルオウガがいるシーンで唯一の箸休めポイントだったと思います。

Q 演じる際に心がけたことは?

宮元SDの「重みを大切に」という言葉。同時にダークネストの正体や、ガルオウガの身に起きたことなどもうかがっていたので、「重み」の重さを感じながら過ごした1年でした。

Q シリーズを通して印象的だったセリフやエピソードは?

僕は果物のなかでイチゴが好きです。それを知ったララ役の小原好美さんが、差し入れのなかにイチゴ関係のお菓子があると、わざわざ僕に届けてくれました。ありがとルン。AI役の伊藤美紀さんは本番ではできないのをわかっていながら、テストのときだけは感情豊かに存分に遊びまくっていました。幾度となく余分な緊張をほぐしていただき感謝しています。好きなセリフというかシーンは……。ガルオウガ「ララをよこせ!」プリキュア「おいおい……」のくだりは、僕もプリキュアと同じ気持ちでした。

Q 関わることが多かったまどか／キュアセレーネにひと言。

貴女も大小さまざまなものと戦っていた。最大の敵は父上とお見受けする。しかしながら、信じ、決断し、実行したその意志は、貴女が放った矢のなかで最も堅牢で最も美しい一矢だったように思う。小松未可子さんのお芝居とも相まってすばらしかった。じつに見事也。

Q 最終話まで終わっての今の気持ちを聞かせてください。

とてもさびしいです。僕にとって作品の終わりは役との別れ。終えたことを惜しんでいる自身がおり、惜しんでいるということは、まだガルオウガと別れたくない気持ちと、役をまっとうできた満ちたりた気持ちがあるからなのです。しかし、僕が担当した役には珍しく生存・共存しているので、今後のガルオウガのことは僕だけのイマジネーションを描きたいと思います。

Q 読者にメッセージを。

いわゆる、ニチアサに再び関わることができて光栄でした。登場人物も非常に豊かで、さまざまな視点で見られるこの作品は、年齢や経験によってさまざまな味わいがあったのではないでしょうか? 「スター☆トゥインクルプリキュア」をご覧になった皆さんに、キラやば〜っ☆な未来が訪れますように。1年間ご覧いただきまして、誠にありがとうございました。

カッパード役 細谷佳正

Q 出演が決まったときの感想は?

驚きました。ありがたい話だなと思いましたし、気がかりなこともありました。多くの子どもたちが観るであろう番組に、自分が起用されるということで、自分は何を望まれているのだろう? と考えました。大人向けのやりとりをしている作品がその時期多かったので、「子ども番組」という多数の人が持つであろうイメージに、自分は不似合いだなと思っていたからです。演者として、やりたいことをちゃんとやっているのかな? という想いもありました。

Q キャラクターの印象はどうでしたか?

初めて「カッパード」のデザインを見たときは、まだ映像に色が付いていなかったので、大人っぽいデザインだなという印象でした。色が付いたデザインを初めて見たときは、「明るい色だな」という印象を持ちました。キャラクターのバックグラウンドの説明は初期の段階から受けていたので、キャラクター性が自分のなかで変化していったと感じることはなかったです。

Q 演じる際に心がけたことは?

毎話数、演出をする人間が変わるので、こちらに伝えられる要望は毎回変わりました。序盤は、それでもひとつ自分のなかにキャラクターの形を作らなければ進めないなと思っていたのと、そういう製作形態を経験するのが初めてだったので、キャラクターの声というところで一貫性が保てているのかな? と考えていました。心がけたのは、自分の主張を普段よりわかりやすく

Q シリーズを通して印象的だったセリフやエピソードは？
ることでした。「自分はこう考えている」ということを仕事でしていたと思います。

Q シリーズを通して印象的だったセリフやエピソードは？

長いシリーズなので具体的なセリフの内容は思い出せませんが、「一瞬、異物を排除しようとする。自分と同じ者は受け入れるが、自分と異なる者とはわかりあおうともしない」というカッパードのセリフは、印象的でした。そしてその状態を解決し、争いを生まないためのエピソードを、子どもたちや、これから大人になっていく人々に、作品を通して伝え続けることが、本当にすばらしいことだなと思いました。

Q 関わることが多かったひかる／キュアスターにひと言。

ひかるというキャラクターは、「無敵」だったなと思っています。戦いの最中にあっても、どこかにユーモアを持っていて、シリアスにならない。敵対する者を「根絶」することを決してしない。遠くから一見すれば、「異者から、戦うことで何かを守っている（正義の味方）」ように見えるかもしれないですが、このキャラクターは、「ただ、異なる者同士がわかり合うための対話」を、全話を通して繰り広げてきたのだと思います。敵を作らない、敵がそもそもいない。無敵のキャラクターだったなと思います。

Q 最終話まで終わっての今の気持ちを聞かせてください。

最終話を録り終わったときの話になりますが、ギックリ腰でも無事録り終えられてよかったなと思います。

Q 読者にメッセージを。

子どもたちに対しての、「スター☆トゥインクルプリキュア」に込められたメッセージは、もしかしたら新鮮に感じるかも知れないし、もしかしたら、もうすでに知っていることかもしれないなと思います。子どもたちは大人が思うよりも、ずっと賢く、すべてを知っているのかもしれないと思うからです。この作品を受けとめた無垢な世代が、大人になったとき、どんな価値観が「世の中のスタンダード」になっているのか、とても楽しみです。最後まで観てくれて、ありがとう。

テンジョウ役 遠藤綾

Q 出演が決まったときの感想は？

どんな世界観なのか楽しみでしたし、プリキュアさんやマスコットがどんな姿なのか、ワクワクしました。

Q キャラクターの印象はどうでしたか？

第一印象はストレートに、「天狗か!!」だったと思います。ほかの敵たちも、妖怪モチーフということで、意外性というか、世界観の幅広さにどんな展開が待っているのだろう、と楽しみでした。テンジョウの過去が描かれてからは、悩みや想いが、彼女の悔しさ、彼女なりの正義というのが悲しくも強いと思っていました。

Q 演じる際に心がけたことは？

スタッフの方から要望という形はありませんでしたが、あまり怖すぎないで……と言われたことはありました。個人的には色っぽくはしない、かな。

Q シリーズを通して印象的だったセリフやエピソードは？

ジョー・テング先生として学校に潜入するお話は楽しかったです。もっとぶっ飛んだ感じにしたいくらいでした（笑）。

Q 関わることの多かったえれな／キュアソレイユにひと言。

笑顔に対して対照的で、とくにテンジョウは嫉妬心や辛い過去もあるのに、笑顔いっぱいのえれなに突っかかるのが、本当は笑顔でいたい自分がいるんじゃ、と思わせるところが愛おしいです。

Q 最終話まで終わっての今の気持ちを聞かせてください。

1年を通してキャラクターを演じられてうれしかったです。役は敵ですが、プリキュアが成長していく姿を観られて幸せでした。

Q 読者にメッセージを。

「スター☆トゥインクルプリキュア」をご覧いただいて、ありがとうございました。子どものころ、アニメから学ぶことってとても多かったです。初めて知ること、異質、感情、そして大人になって、ふと思い出したり、シンプルで大事なことだと気づいたりします。「スター☆トゥインクルプリキュア」が、あなたにとってそんな存在になれたらうれしいです。

アイワーン役 村川梨衣

Q 出演が決まったときの感想は？

やったー！　って思いました。老若男女を問わず、長きに渡りこんなにもたくさんの夢や希望、キラキラをみんなに与えられる「プリキュア」に出演することがひとつの夢でしたので、とってもとってもうれしかったです。

Q キャラクターの印象はどうでしたか？

最初に拝見したときは、じつはまだラフ絵の段階で、全貌が見えていない状態でした。ですが、大きなおめめはぱっちり描かれていたので、このすがきっとアイワーンだ！　というのと、名前の由来もなるほどと思いました。次にしっかりアイワーンの姿を見たときは、ラフより頭身が少し伸びていて、色味もかなりビビッドな感じで、インパクトの強さを感じました。回が進むにつれての印象はめちゃくちゃ変わりました！（笑）アイワーン自身も変わっていったので必然と言えるかもしれませんが、どんどん茶目っ気も出てきたり、ツンツンしたり、かわいい表情もたくさんあって、憎んでも憎みきれない愛らしいキャラクターになっていったと思います（ちびアイワーンもかわいかったですね～）。アイワーンには幸せになってほしい……というお声も皆さまからたくさんいただいていて、とてもうれしかったですし、たくさんの方から愛されているキャラクターだとあらためて思いました。

Q 演じる際に心がけたことは？

宮元SDからは最初はとにかく根暗根暗な感じじゃ、アイワーンは天才なので周りのことを見下してばかにしているので、というようなお話がありました。後半はアイワーンもどんどん変化していったので、変化に応じてという形で、特別にこう！　ということはなく、お任せいただいていたように思います。遊ばせていただける部分もあったので、自由に楽しく演じさせていただきました。

Q シリーズを通して印象的だったセリフやエピソードは？

上でも少し触れましたが、ちびアイワーンがかわいかったなぁ……という思い出が——（ここ目頭が熱くなる）。とてとこと小さい体で、必死にガルオウガさまのあとを追っていく姿が愛らしい……。そしてやさしいガルオウガさまをはじめ、ノットレイダーのみんな。間違いなくノットレイダーはアイワーンにとっての居場所でした。渾身のアイワーンのダークペンパンクにかわいい～！　とはしゃいでしまいましたし、ベーってしてるアイワーンもかわいくて印象深いです。あとはやっぱりキュアコスモとの激闘も印象深いです。現場はいつも楽しい空気が流れていました。みんなでお菓子を食べたり、おいしい差し入れもたくさんいただいたりして、あたたかいチームだなあといつも心もあったかくなっていました。

Q 関わることが多かったユニ／キュアコスモにひと言。

きっかけはアイワーンだけど、お互い傷付け合ってしまったふたり。でもコスモが一歩前へ進んでくれたおかげでアイワーンも自分の過ちをきちんと認めることができたし、ちゃんと償いができた。今のアイワーンならちゃんと言えると思うけど、あのころの恥ずかしがりやのアイワーンの代わりに、ありがとうユニ！　これからもアイワーンと仲よくしてあげてね！

Q 最終話まで終わっての今の気持ちを聞かせてください。

現場でもどよめきが上がったアイワーンの成長姿！（笑）収録段階で十分びっくりしていましたが、オンエアで完全体（？）の成長姿を見て、こんな素敵な姿になってるとは――!!　とさらにビックリしました！　そういう意味では、早くアイワーンの成長ぶりを見てほしくて、最終話も楽しみにしていました。もちろん終わってしまった寂しさはあるのですが、アイワーンとして、「スター☆トゥインクルプリキュア」に携われたことの幸福が寂しさを超越しています。素敵な作品の一部になることができて、とても幸せに思っています。誠にありがとうございました。

Q 読者にメッセージを。

「スター☆トゥインクルプリキュア」を1年間応援していただいた方々も、そして途中からでも応援していただいた方々もありがとうございました。「スタプリ」を通して、日々の生活での発見や気づきがあったらいいなあと思いますし、ただただ笑顔になってくれたらうれしいです。みんなだけのイマジネーションを、これからもたくさん描いていってくださいね！

Event Report（イベントレポート）

2019年9月に行われたライブレポートと、2020年2月に行われたシリーズ初の感謝祭のレポートをお届けする。

スター☆トゥインクルプリキュアLIVE2019 KIRA☆YABA！イマジネーションライブ

開催日時：2019年9月28日
場所：東京・昭和女子大学人見記念講堂





キャストと3人のアーティストによる豪華でキラやば～っ☆なライブが開催

2019年9月28日に東京・昭和女子大学人見記念講堂にて「スター☆トゥインクルプリキュアLIVE2019 KIRA☆YABA！イマジネーションライブ」が開催された。プリキュアのキャスト5人と、EDを歌う吉武千颯、プリキュア歴代歌手の宮本佳那子、五條真由美も参加した豪華なライブだ。当日は、OPテーマを全員で歌唱したり、プリキュアのキャストたちがそれぞれのソロ曲を歌ったりと大盛りあがり。今回が人生で初のライブだったララ役の小原好美はMCで「吐きそうルン」と緊張をポロリとこぼしていたが、そうは感じさせない笑顔と、ほかの出演者のサポートもあり、終始観客している人を元気にさせてくれるライブステージだった。本公演のBlu-ray&DVDは、マーベラスより発売中。

スター☆トゥインクルプリキュア 感謝祭

開催日時：2020年2月15日、16日(大阪)、2月22日、23日(東京)
場所：大阪・オリックス劇場、東京・中野サンプラザホール



キャラクターショーから朗読劇まで笑いと感動のスペシャルステージ！

2020年2月に、大阪・オリックス劇場、東京・中野サンプラザにて「スター☆トゥインクルプリキュア 感謝祭」が行われた。ファミリー公演は、キャラクターショーのほか、プリキュアキャスト5人や、OP&EDを歌った北川理恵（東京のみ出演）、吉武千颯の歌唱、さらにはプリキュアが客席に下りて、来場者の子どもとお話をするコーナーなど盛りだくさん。プレミアム公演では、OP&EDの歌唱やソロのキャラクターソング歌唱コーナーはもちろん、ファミリー公演よりもさらにセリフが増え、客席の笑いを誘うツッコミが入ったキャラクターショーも行われた。また、プレミアム公演のみの朗読劇コーナー「15年後の再会」で、最終話のあとに地球で再会したプリキュアの5人が女子会を開き、だんだんと酔っ払っていく……という面白エピソードを、キャストが熱演。また、48話の別れのエピソードの生アフレコや、千秋楽の公演では、キャストが今だから言っておきたいことを宣言するコーナーなども。サプライズで、製作スタッフやフワ役の木野日菜からキャスト、アーティストへの花束贈呈も行われ、涙するキャストの姿も見られた。放送が終わったあとの"お祭り"にふさわしく、感動と喜びでいっぱいになる、にぎやかなイベントとなった。本公演のBlu-ray&DVDは、マーベラスより2020年7月15日に発売予定。

Staff Interview 1

スタッフが製作の裏側について語り尽くす！

【シリーズディレクター】

宮元宏彰

【みやもと・ひろあき】アニメ演出家、アニメ監督。主なアニメの担当作品は、TVアニメ「ワンピース」（2005～2015年、シリーズディレクター）、映画「ONE PIECE FILM GOLD」（監督）など。

プリキュアが多くの価値観に触れて大人になっていく物語

――全49話の放送が終わりました。

ちょうど49話のオンエアを、集まれるスタッフやキャストの皆さんと観ることができたんです。終わった瞬間は気が抜けた感じがありましたね。

――シリーズディレクター（以下SD）のオファーがあった時点で、どの程度まで作品の枠組みは決まっていましたか？

柳川あかりプロデューサーから企画書をいただいた段階だと、「星座をモチーフにしたい」「宇宙を舞台にしたい」「多様性をテーマに」ということは決まっていました。それから、宇宙人のプリキュアを出したいと。ストーリーや物語の組み立て方の具体的なところはこれから詰めていく感じでしたが、自分としても面白そうだなと感じました。

――宇宙人がプリキュアになるのは、長いシリーズのなかで初めてでした。

「HUGっと!プリキュア」でアンドロイドのプリキュアが登場しましたから、それほど強い違和感はなく、シンプルに面白そうという感覚でした。もともと、「プリキュア」シリーズの根本には多様性というテーマがあるので、それを「スター☆トゥインクルプリキュア」でどう描いていくかということを考えました。

――1年間のシリーズとしては、どのようなことを意識しましたか？

先ほどもお話したように、今までのシリーズでも多様性を描いてはいるんです。ですから、「多様性」をプッシュするだけでは「スタプリ」らしさがたりなくなってしまうだろうと考えていました。そこで、シリーズ構成の村山（功）さんと話をしていくうちに「イマジネーション」というキーワードが出てきたんです。多様性を受け入れるのに必要なものはなんだと考えたら、それはイマジネーションの力だろうと。イマジネーションは自分を高めるためにも必要だし、相手を理解することにも必要なもの。それが作品のキモになれば、子どもたちにも「多様性」が伝わりやすくなるのかなと思って。そこから方向が固まり、イマジネーションをキーワードにしてキャラクターたちの成長を1年かけて描いていこうということになりました。

本作のターゲット層となっているのは3歳から6歳くらいの子どもたちなのですが、3歳のころって世界の中心は自分だし、「自分は無敵」みたいなところがあるんですよね。そんな子たちが幼稚園などに入って、自分と同じような、でもちょっと違う他人と集団生活をしていくうちに葛藤するということは、多少なりにあると思うんです。それがまさにイマジネーションが試されていく場面なのかなと思い、その変化や成長をプリキュアの世界でも描きたいと思いながら製作に臨んでいきました。

――物語が進むにつれてひかるは友達の行動や言動を意識していくようになりますが、物語の冒頭だとひとりでいることにまったく疑問を持っていません。その"無敵さ"は、まさにターゲット層の子どもたちに重なりますね。

まさにその通りで、ひかるは誰に対しても壁はないんだけど、自分が好きなことだけに突き進んで、違和感がない。自分はそれでいいんだと信じ切っていて無敵なキャラクター。でも、自分の肌で宇宙を知って、いろんな世界に飛び出していって、いろんな人たちと出会い、いろんな価値観を知る。そして、自分と違う人がいて、その人たちと一緒にいると楽しいこともあるし辛いこともあるということを知っていく。そういう意味では、「スタプリ」は、ひかるが「一人前」になっていく姿を描いている物語でもあります。無敵だった彼女は、大人になることで「弱く」なっていく。中盤ぐらいから「自分ってなんだろう」と迷い始めます。最終的には「自分は自分」と見つめ直して、もう一歩上っていく。現実世界でも人はこうやって悩んでいるんだということを、彼女の気持ちや行動を通してわかりやすく表現できたのではないかなと思っています。

――そんなひかると対になるララは、惑星サマーンではもう大人という年齢でしたし、ひかると出会ってからもしばらくは「大人であろうとする」キャラクターでした。

じつは、今回はひかるとほかのメンバーは明確に役割をわけたんです。序盤、ひかる以外の子たちは、自分の世界を固めていて、「自分ってこうだよね」という大人の考え方を持っている。ひかるは無敵なので、「そうかなぁ」と疑問に思い、それを崩していく。そうすることで、みんながそれぞれ自分の可能性に気づくようになったらいいんじゃないかなと。ひかるが無敵である一方で、ほかの子たちは小さい世界に閉じこもっているんですね。ララは、そこがとくにわかりやすくなればいいなと思って、13歳ではあるけれど惑星サマーンでは大人という設定にしました。「大人だからこうならなければいけない」と決めつけてしまっているうえに、AIが理想を決める惑星サマーンの生まれということもあり、AIが決めたとおりにやるほうが素敵だと信じているんです。実際、現実にもある程度「決められたとおりにやるほうがいいんじゃないか」という悩みを持っている子どももいるんじゃないかなと思っていたので、





「多様性」を受け入れるために必要なものがイマジネーションの力



一部の子どもには共感できるキャラクターとして考えていきました。

——えれなとまどかも、自分の役割を決めてしまっている子ですが、彼女たちは宇宙に出ることで新しい価値観に気づいていく印象でした。

そうですね。宇宙に行けば地球の常識なんて通じない人もたくさんいるんですよ。それこそ、自分も初めて海外に行ったときにはすごくカルチャーショックを受けましたし、日本の常識が海外では常識じゃないんだということもよくあって。そういう経験を「スタプリ」の子たちにもしてほしいなと思っていました。

——えれなは「笑顔」について考え込む子になりましたね。そのエピソードの解決まで、3話をかけたのが印象的でした。

えれなの生き方については描くのが難しく、ずっとスタッフの間で話しあいを続けていきました。結果、自分のベースになるところ、正しいと思っていたところに、違う価値観を持ってこられて戸惑うというところを掘り下げようということになり、テンジョウとのやりとりでしっかりと描いていきました。

——まどかは、父親のことを尊敬してはいるけれど、どこかそれがすべてでいいのか迷っているような印象が、冒頭からありました。

まどかはどちらかというと勇気がないという方向性で描いていきたいなと思っていました。外の世界に対して恐怖のようなものがあって、香久矢家が世界のすべて。父親の言っていることは、苦しいけれど正しいし、信じたいと思っている。そんなちょっとモヤモヤしたものを抱えていたところでひかると出会い、いろいろな星に行くことで世界の広さを知ったんですね。プリキュアになることを選び、父親にそれを内緒にしている時点で一歩踏み出し、父親の知らない世界を持ってはいるんですが、そこからさらに前に進むことが彼女にとっての殻を破ることになればいいかなと思っていました。

——そんななかで、追加になったユニについては？

ユニはめちゃくちゃ難しいキャラクターでした。あの子は最初からなんにでもなれるんですよ。その気になればどんな姿にも変われるから、外見的な問題では悩むことがない。なので、なんにでもなれるからこそ「本当の自分はどうなりたいのか」というところに想いをはせるキャラクターとして考えていきました。生い立ちや境遇がかなり重く、自分がみんなを救わなければいけないと思っている。でも、それが本当に自身の望んでいることなのかと自分に問いかけているところでひかるたちと出会い、本当に自分のために生きていくところに気づく流れになりました。アイワーンとうまく絡めることができたのは、よかったところですね。

イメージだけで判断してほしくない想いを込めた敵キャラ

——敵側であるノットレイダーのアイワーンはとても存在感のあるキャラクターになりましたね。

子どもたちにもアイワーンのようなときってあるんじゃないかなと思ったんです。思いもよらず悪いことをしてしまったり、他人を傷つけちゃったり……。でも、その子にも事情があったり、本当にやりたいことがうまく伝わっていなかったりしただけだったりする。キャラクター同士の関係性を考えるなかでそこにたどり着き、結果としてユニとアイワーンは仲よくなれたらいいなと思いながら関係を作っていきました。ただ、惑星レインボーにまつわる展開が重すぎて、アイワーンのやったことを許すってどうなんだろうというところでは悩まされましたね。ただ、ユニがそれを許したからこそ、アイワーンはユニと一緒に前に進んでいく可能性を信じることができたのかなと思っています。

——カッパードやテンジョウ、ガルオウガたちがプリキュアと戦う事情もはっきりしていました。

ノットレイダーに関しては、最初に見えるイメージだけで判断しないでほしい、最後まで観て伝わるものがあればいいという気持ちで設定をしていきました。決めつけって、誰しも知らず知らずのうちにしちゃっていることがあるんですよ。観ている人に、それに気づいてもらえたらいいかなと。

——今回敵側に追加のキャラクターが登場しませんでした。

もともと、多様性がテーマなので、いろんな形の宇宙人が出てきたほうが面白いだろうということで、種族や外見は統一せず、いろいろなところから集まってきている感じにしたんです。ただ、敵側も理由がなく敵対しているわけではない。その人なりの正義や理由があって、宇宙を乗っ取ろうとしているところは見せたかった。追加の敵を出さなかったのは、それによってこれまでいたキャラクターが途中でいなくなっちゃうのがさびしかったからです。すごく愛着がわいちゃったんですよね。そのあたりから、ノットレイダーの幹部たちとプリキュアをライバルっぽくぶつけていったほうが作品のテーマが明確に浮き出るというのが見えてきたので、敵側とプリキュア側がペアになるような形になりました。

——ダークネストの正体がへびつかい座のスタープリンセスというのは、当初から決まっていたんでしょうか。

そうですね。最初のころはもっと単純にひとりで悪いことを考えている人でした。しかしノットレイダーたちの物語を考えていくうちに、へびつかい座のスタープリンセスもノットレイダー側に付いたほうがいいだろうという形になりました。

——へびつかい座のスタープリンセスは、46話まで視聴者には正体がわからない描き方でしたが、12星座のスタープリンセスは、当然敵が何者であるかは知っていたんですよね？

それは、そうです。ただ、12星座のスタープリンセスは積極的に世界には関わらないというスタンスを取っているんです。イマジネーションがよくなるのも悪くなるのも、人間たちに委ねている。本当に宇宙がなくなっちゃいそうな危機に対しての浄化作用としてプリキュアを用意しているあたり、完全に委ねているとは言えないのですが、基本的には傍観者ですね。とは言え、別にプリキュアを危機にさらしたいがためではなく、トゥインクルイマジネーションは自分のなかでこうありたいという想いがあふれることで作用するものであり、自分で気づいて発現するものだから、必要以上に語ってはダメということもあって、傍観しているというスタンスにしました。

——フワやプルンスは、外見に関しては玩具会社とのやりとりなどもあったと思いますが、どうでしたか？

企画の段階から、宇宙が舞台なので従来の妖精とは異なるクラゲ型で変幻自在のよ

観てくれた人たちのイマジネーションが広がる手伝いができていたらうれしい

うな宇宙人を出したいというお話があり、それから、メインの妖精とそれをお世話する妖精がいるというお話がありました。プルンスは、宇宙がモチーフなので、何か特定の動物に見えるよりは、不思議な生きもののほうがワクワクするだろうということもあり、ちょっと変わった宇宙生物としてデザイン案を出しました。一歩引いた年長者のサポートキャラクターながらも、外見的にはかわいくあってほしいというオーダーがあったので、眉の太さは残しつつ愛嬌のあるキャラクターにしました。フワは、メインの妖精でかわいくしたいという要望がありましたので、その要望を汲んでいます。性格に関しては比較的自由度が高かったので、プルンスの中身はおじさんにして、ギャグ担当として遊ばせていただきました。「HUGっと！プリキュア」のハリハム・ハリーもそうでしたが、子どもたちって潰されたり飛ばされたりするのを喜ぶんですよ。あと、画面的にも動きが出るので、プルンスには結構いろいろな形になってもらいました。ただ、当初はそこまで積極的に戦いで活躍するキャラクターではなかったんです。フワが守られて、みんなに育てられていく赤ちゃんのような立ち位置で、とくに前半は戦いに参加できないので、その分をプルンスが補ってくれた感じですね。

声質はバラバラでも集まって星座になるイメージのキャスティング

——キャストについては、どのように選んでいったのでしょうか。

　もともと、いろいろなタイプのプリキュアが出てくる、多様性がテーマの作品だったので、オーディションをする際も声優とは違ったフィールドで活動している方も参加できるといいですね、という話をしていました。『キラキラ☆プリキュアアラモード』のときがまさにそんな感じだったこともあり、今回も歌手の方や芸人をメインに活動している方などにもお声がけをしてもらったんです。声優っぽくない人がいてもよかったし、5人全員の声質がバラバラで、いろいろなタイプの人が集まりひとつひとつがそれぞれ輝いて、1個の星座のようになったらいいなと思っていて。その考え方をベースに、ひかるを中心に据えつつキャスティングは考えていきました。とくに、ひかるとララは明確に対になる存在でしたから、声質だけでなく、お芝居のニュアンスやトーンも違っていたほうがいいと思っていました。

——それぞれのプリキュアのキャストについて、選んだポイントなどを教えてください。まずはひかる／キュアスター役の成瀬さん。

　成瀬さんとの出会いは運命的でした。もともとキュアソレイユ役でオーディションを受けていただいたんですが、キュアソレイユはちょっと違うなと思っていたんです。オーディションでは、受けに来ていただいた役のほかに、気になる役をその場で演じてもらうこともあるんですが、スタジオに現れたときからひかるのようだったので、ひかる役もやってもらおうということになりました。結果、ほかのスタッフたちとも一致で「ひかるしかない」という話になりました。

——続いて、ララ／キュアミルキー役の小原さん。

　ひかるが突き抜けて声にインパクトのあるキャラクターだとしたら、ララはそれに対して真面目なニュアンスが強めに出るといいなと思っていました。小原さんは、崩したときの声が特徴的でしたが、ナチュラルなお芝居がすごくよかったし、崩したときとナチュラルなときとの声のバランスもすばらしかったんです。成瀬さんとぶつかりあうと、よりいいものができるだろうと思ったところがポイントでした。

——えれな／キュアソレイユ役の安野さんはどうですか？

　えれなは明るいんだけど、柔らかさもある女の子。芯のあるまどかと対になる役で、安野さんはキュアセレーネ役の小松さんとの声のバランスがよく、ほかのメンバーとも被らない声だと思っていました。これは安野さんだけでなく、ほかのメンバーにも言えることなのですが、キャストの性格や雰囲気にキャラクターが寄り添っていくこともあったんですね。とくにえれなはそれが強く、最初はもっと天真爛漫なキャラクターになる予定だったのが、かなり思い悩む部分が出るようになりました。安野さんの声には、ふとしたときに悩んでいるような声がにじみ出ているなと感じたんです。アフレコが始まったころに、安野さんから「えれなも悩んだりするんでしょうか」みたいな質問があって、そのときは「そうかもしれない」くらいの曖昧なニュアンスで答えていましたが、その声がうまく作用してくれたように感じています。

——まどか／キュアセレーネ役の小松さんのポイントは、今お話があった「芯」ですか。

　そうですね。まどかはぱっと見からしてお嬢さまなので、オーディションに来てくださった皆さんが、おしとやかなお芝居をされたんですね。そうすると、雰囲気がすごく似てしまって。でも、じつはまどかってすごく芯が強くて、それを隠している、抑えている子なんですよ。小松さんの声を聴いたとき、その芯の強さが感じられたので、選ばせていただきました。あとから聞いたら、ふだんはあまりまどかのような役はやらず、活発なキャラクターが多いと聞いたので、最初の印象は間違いじゃなかったんだなと思いました。

——そして、ユニ／キュアコスモ役の上坂さん。

　ユニって、自分が持っている本質をずっと隠しているキャラクターなんです。怪盗もアイドルも、人間としての姿もあるけれど、全部自分の本当の姿を隠してやっている。ぱっと見では強く見えるけど、内に秘めている想いもあって、それがふとしたときに出てくる。それを演じわけられる人がいいなと思っていました。上坂さんは、演じわけもうまかったですし、芯が出てくるところがとくにすばらしく、説得力があったのでそれで選びました。

48話ではどうしてもプリキュアの力をなくしたかった

——今回、48話で戦いには決着が付き、49話がまるまるエピローグという形でしたね。

　キャラクターが大人になっていく物語をやりたいとお話しましたが、大人になるってなんなんだろうという話にもなったんですね。そこからプリキュアの力ってなんだろうという話になって。この世界では、プリキュアの力って宇宙を救うためにもらった、スタープリンセスから分け与えられているものなんです。そして、変身バンクの歌にもありますが、「憧れの自分」「なりたい自分」になれる不思議な力でもある。それは子どもたちが観ていて憧れるような力ではあるけれど、今回はその力がなくても、なりたいものになれるんだというところも



描きたかった。村山さんとも話していたんですが、なりたい自分になるって簡単なことではなくて、現実的にはなれないことのほうが多いし、挫折もするよねと。きっと観てくれていた子たちも、この先に思いどおりにならないことがたくさん出てくると思うんです。でも、プリキュアの力がないから、思いどおりにならないんだとは思ってほしくなかった。なので、プリキュアの力を最後まで持っているのはやめようと決めました。プリキュアの力がなくなっても、自分自身のイマジネーションの力で頑張って大人になった姿を見せないといけない、それを描かなければいけないとなった時点で、Rを採らないといけないからと49話のBパートはまるまる大人の姿にしました。

――となると、Aパートの扱いですが……。

あれは、ひかるの夢と受け取ってもらっていいです。意図的に少し曖昧な作りにしていますが、あくまでもひかるの夢。48話で明確にプリキュアの力はなくなるから、それ以降は絶対プリキュアにならないと決めていたんです。ただ、どうしても次の世代へのバトンをつなぐシーンは入れなければならないし、子どもたちに変身をしているところを見せたいという想いもありまして。それから、あんまりにも現実的に変身できませんということを突きつけても観ている子たちが悲しむだろうなと考えて、結果生まれたのが、最後の変身シーンを見せるAパートでした。ある程度年齢を重ねている子や親御さんは夢だと思ってもらっていいですし、小さい子たちはあれも現実だと思ってくれていい。そんな折り合いをつけた結果です。

――大人の姿を描くにあたり、「15年後」とした理由はなんでしょうか？

それはひかるをベースにしています。宇宙飛行士になるって、実際すごく大変なことだと思うんです。リアリティーを持たせたいと考えたら、勉強をしたり訓練をしたり、大学も出ないといけないだろうし、15年ぐらいはかかるかなと考えて15年後にしました。

――ララやユニたち、宇宙人にとっての15年は、地球人の15年と違うのかな、と思ったりもします。

寿命については明確にしていないのですが、ユニは見た目よりももっと長い時間生きているかもしれません。そこは皆さんのご想像にお任せします。ララやユニも15年間、前に進み続けているというところが描ければいいかなと思ったんです。自分たちの思うやり方で、なりたい自分を目指して歩き続けている。それを明確にしたくて、彼女たちの姿をああいった形で描くことにしました。

――フワの声が聞こえて、画面が白くなる49話のラストシーンで何が起こったのかは、完全に視聴者に委ねる形ですか？

そうですね。2月に行われた「スター☆トゥインクルプリキュア感謝祭」で15年後をテーマにした朗読劇はありましたが、あれはお祭りで、楽しんでくれた方へのサービスくらいの気持ちです。アニメとしてどうなったかというのは、視聴者のイマジネーションに委ねたいと思っています。もちろん、希望的に受け取ってもらって問題ないんですが、未来はイマジネーションでどんなふうにも描くことができるというメッセージも込めて、白い画面にしました。

変身バンクにもキャラクターの個性が出るように

――変身バンクや決め技についても教えてください。今回、シリーズで初めて変身に歌が入っていました。

じつは、歌があるというのはすごく大きかったんです。歌わないことはできますかと聞いたら、できませんと言われたんです。もともと作品のテーマは「多様性」じゃないですか。変身前の見た目や衣装が揃っているよりも、それぞれの性格に合った服装にしたいと思っていたし、そのバラバラ感が変身バンクで揃っていく感じがいいと思っていて、変身バンクもキャラクターの性格やイメージを持ったままにしたいと思っていたんですね。ところが、歌っている曲はメロディーも歌詞も同じもので、変化をつけづらかったんです。なので、変身バンクの映像に関しては合わせるところは合わせつつ、ほかはある程度自由に動きをつけることにしました。キュアスターは自由な感じ、キュアミルキーはかわいく、キュアソレイユはかっこよく、キュアセレーネには凛とした美しさがあって……と。春夏秋冬をモチーフにするということも決まっていたので、その要素を入れつつキャラクター感を出せる方法を模索していきました。歌はユニゾンするところが気持ちいいだろうと思ったので、最後の飛び出すところは合わせて、ほかは自由にという感じでしたね。とにかく作画のカロリーが高いので、空気感をそろえるためにもここは自分が絵コンテをすべて担当しました。

――決め技は、ほぼベースとなる技で戦っていましたね。

キュアスターなら肉弾戦、キュアミルキーはサポートのビーム攻撃という個性はある程度決めていました。その印象を残しつつ、あまりパターンをたくさん出し過ぎると、観ている子たちが混乱するかもしれないと思って、今回は技の数を少なめにしたんです。大人からしたら単調に見えるかもしれないけれど、子どもからしたら、マネもしやすいだろうと。個人的には全部マネができるくらいのものにしようと思っていました。あと、各星座のペンで技を出すという設定もあったので、ベースの技を少なくしたというところもあります。

――製作期間としては1年以上になると思いますが、やはり1年のシリーズというのは長いですか？

ほぼ2年近く関わっていたので、長くはありましたが、終わってみるとあっという間でしたね。終わり間際はさびしい気持ちと、もうちょっと観たいという気持ちが強かったです。そう思える作品になったのは本当によかったですし、きれいに終われたことに自分としてはホッとしています。「プリキュア」シリーズは、代々バトンを受け取って次に繋いでいくことが一番の使命なので、それがちゃんとできたことに、一番安堵しています。

――では、最後に1年間応援してくれた方へ、メッセージをお願いします。

1年という長い間、観てくださってありがとうございます。今回、多様性が大きなテーマとしてはありましたが、「スタプリ」としてはイマジネーションを大事に育てていったつもりです。イマジネーションが広がると世界も広がって見方も変わるということを、いろんな形で描きたくて、毎話、その想いを詰め込んでいきました。どの話数でもいいので、それが観てくださった方のイマジネーションを広げるお手伝いになっていたらうれしいです。もちろん、製作に際して大変なこともたくさんありましたが、皆さんが「スタプリ」を観てイマジネーションを広げてくれて、そして世界が「キラやば～っ☆」になれば、苦しんだ甲斐もあると思っています。本当に、最後まで観続けてくださって、ありがとうございました。





Staff Interview 2

【シリーズ構成】

村山功

【むらやま・いさお】
脚本家。主なアニメのシリーズ構成担当作品は、『魔法つかいプリキュア!』『マジンボーン』『トリコ』。近日公開される『映画プリキュアミラクルリープ みんなとの不思議な1日』の脚本も手がける。

相手を認め決めつけないことが『スタプリ』の多様性

――本作のシリーズ構成のオファーはいつころありましたか?

『映画プリキュアミラクルユニバース』の脚本をやっていたころです。その段階で、プリキュアが宇宙に行くこと、星座をモチーフとして出したいということは決まっていました。

――「宇宙人のプリキュア」を出したいと聞いたときの感想はどうでしたか?

宇宙が舞台だから、当然、宇宙人のプリキュアは出るよね、と思いました。以前シリーズ構成を担当した『魔法つかいプリキュア!』も、魔法つかいがプリキュアになりましたから、驚きはしませんでしたよ(笑)。それよりも、まず思ったのは、異世界からやって来た子とピンクの主人公がプリキュアになって、というテイストやテーマが『魔法つかいプリキュア!』と似ちゃうなぁってことでした。いっそのこと、プリキュアの半分以上が異星人でもいいんじゃないかと思ったくらいです。

――とはいえ、さすがに地球人が多めになりましたね。

いろいろな事情があって、そうなりました。でも、「スタプリ」の大きなテーマには多様性があるので、プリキュアの5人以外もきちんと描いていきたいと考えていました。プリキュア5人と、フワとプルンス、AIも含めた8人の「チーム・プリキュア」って感覚で物語を描いていった感じです。

――『魔法つかいプリキュア!』と似通ってしまうことを危惧していたとのことでしたが、似ないようにするために、まずどうしようと考えていきましたか?

『魔法つかいプリキュア!』においては、敵は主人公たちを襲う災害的なものという位置づけで設定していました。あまり敵側の心情を掘り下げないで、とくにプリキュアの3人の物語をじっくりと描く、ということをテーマに作るためです。一方「スタプリ」では、敵側を描き、彼らを掘り下げるなら差別化はできるかなと思いました。

――例えばどんなところで『魔法つかいプリキュア!』との違いを出していったのでしょうか?

一番気をつけていたのは、多様性を認めることと、決めつけをしないということ。2話で「決めつけはなしだよ!」というひかるのセリフがありますが、それは「スタプリ」の物語のベースというか、この作品の決意表明というか、僕自身も、ひかるにそのセリフを言わせることで覚悟を決めるというか。これから50話近く展開するお話のテーマと方向性を出しました。敵に対して説き、教えるというのは「プリキュア」シリーズではよくあることですが、今回は説得していくことよりも、認めていくことを重視する。もちろん、さまざまな違いによってどうしてもぶつかりあうことはありますが、根本では否定しない、全肯定の精神で臨む、ということを考えていました。

――プロデューサーや宮元SDからは、何かオーダーはありましたか?

プロデューサーの皆さんや宮元さんからということではないですが、前作の『HUGっと!プリキュア』でシリーズ15周年はひと区切りということで、「スタプリ」は今までとはまた違った、新しいプリキュアを提示するというのがコンセプトとしてありました。だいぶ無茶ぶりをされているなと(笑)。でも、『魔法つかいプリキュア!』のときも、シリーズの13年目だったので、12年で干支が1周してひと区切りなんで、今までと違う新しいプリキュアを作って!と言われた記憶があります。何回心機一転をやらせるんだと思います(笑)。

――物語全体としては、どんなことを意識しましたか?

基本は明るく楽しくということです。あとは、『プリキュア』を観ている小さな子どもたちは、宇宙や星座というのを理解どころか存在すら知らないでしょうから、そういうものがあるんだよというところからはじめて、子どもが観ても楽しめる宇宙を描くことをスタッフみんなで考えました。宇宙空間を「星空界」と定義してカラフルにしたのは、朝に放送される『プリキュア』で、延々と夜空に近い、暗い宇宙空間の映像が流れてくるのはいかがなものかと思ったからですし、惑星も子どもたちがワクワクできるようなファンタジー色を強めにしました。宮元さんがこんなカラフルなテイストの宇宙を描きたいと、イメージを絵にしてくれて、それをベースにイマジネーションを広げていった感じです。

――宇宙人の姿形が、地球の生物や人間の姿に近く、親しみを覚えやすくなっているのも同じ理由ですか?

そうですね。そこはシナリオというよりもキャラクターのデザインや作画や演出のおかげだと思います。恐かったり、観ていて気持ちが悪いデザインにならないように、きちんと配慮してくださいました。

――今回、プリキュアとノットレイダーが一対一で対峙することもありました。多様性というテーマにおいて相手を認めるという上で、一対一のほうが描きやすかったのでしょうか?

対比が明確にできるというのはありました。それから、敵側を掘り下げるにしても、ノットレイダーに物語をただ語らせてしまうと、プリキュアが置き去りになってしまいますから。やはり、プリキュアとノットレイダーを一対一にして心情を対比させたりぶつけあったりすると、ノットレイダーの物語をプリキュアの物語にもうまく絡められますので。

それぞれのキャラクターが「層」を持っているような性格を作っていった

――各キャラクターの設定についてはどう考えましたか?

プリキュアに関しては、バランスを見つつ、5人を同時に考えていきました。

今までのピンクのプリキュアが女の子の憧れであることが多いなか、ひかるは観ている子どもたちそのままの、何も知らないがゆえの無邪気さや強さを持っているキャラクターにして、感情移入しやすくしました。ひかるのキャラクターや目線が観ている子どもたちと近いといったら語弊があるかもしれませんが、無敵だったひかるが、回を重ねるごとに現実を知り、怖いものができていくというのも、ちょうど観ている子どもたちが同じ体験をするころなのかなぁって。子どもたちも現実を知り、他人と比較することを覚えて、自分の限界や長所・短所を知っていく時期だと思うので、子どもたちの1年の成長とひかるの1年の成長が重なりあって、ひかるに感情移入できたらいいなぁと、そんなイメージで描いていました。

ララは論理的で、ひかるの対になる存在として設定しました。あとは、宇宙と地球の交流を描く物語って、異星人がやってきて、異星人に感化された地球人が変わっていくというのが王道のパターンだと思いますが、ララは逆で、異星人が地球の文化に染まっていくキャラクターにしました。「オヨ」「ルン」というログセに関しては、原稿にして出したらそのまま採用された感じです。

ほかのキャラクターもですが、とにかく複合的で多層的なキャラクターにしたいと思っていました。えれなが学校では人気者だけど、両親がほかの家とは少し違っていたり、まどかはしっかり者だけどお父さんとの関係にちょっと問題があったりとか。まどか自身は父親との関係の歪みに気づいていないタイプでしたが、生徒会長で優秀であるという以外の層を作りたくて、そんな性格になっていきました。

相手を認め決めつけないことが『スタプリ』の多様性

ユニは、オリーフィオから分裂して生まれたので、設定的には性別の概念はありません。ですが、怪盗やアイドルと、スタッフの女性陣が昔憧れていたヒロインや、観ている女の子たちも楽しめそうな憧れを盛り込んだキャラクターになりました。追加のプリキュアでありながら、ひかるたちとの距離感が簡単には縮まらなかったのは、作品が「その人が持つ立ち位置や距離感を認める」というスタンスでいたからです。「こっちにおいで」と誘うような部分は極力なくしています。そのおかげかユニが持つキャラクター性を保ったまま、ラストを迎えることができたと思います。

—ひかるについては、好奇心旺盛ではあるけれど、プリキュアになるまではあまり友達が多いほうではなかったというキャラクター性が印象深かったです。

基本的に、ひかるは傍観者なんです。星を見ることが好きで、UMA（未確認生物）を見たいと思っている女の子です。突っ走ってはいるけれど、探しているものや相手に、もう一歩踏み込んでいかないんですね。それもあってか、学校のクラスにも特別、仲のいい友達はいなかった。ただ、いつも外から見ているからこそ、いろいろなことが客観的に見えるというところはあって、人の気持ちに気づけたり、気遣えたりする子です。だから、プリキュアたちをまとめる要の存在になれたんだと思います。

—各キャラクターの名前については、まずはほかのシリーズと被らないように考えていったのでしょうか?

そうですね。プリキュアになったキャラクターだけでも、すでにかなりの人数でしたから、みんなでホワイトボードに案を出しながら決めていきました。『プリキュア』は対象年齢的に下の名前をひらがなにしていますが、漢字にしたら、ひかるは「光」、まどかは「円」で。えれなは最初、「キュアエレナ」にしようと思っていたところ、リアルに「えれな」という女の子もいるからということで変更し、変身前の名前に。異星人の名前はカタカナ表記と決めていたので、ひらがなで、えれなにしました。

—プリキュアの家族構成も、それぞれ違っていて興味深かったです。

お話は大きく分けて、「宇宙・惑星」を舞台にしたお話と「地球」を舞台にしたお話があります。「宇宙・惑星」を舞台にしたお話は、異星人が登場したり、地球とはまったく異なる文化であったりと、場所が違えば人も価値観も違うという、空間的な多様性を描いています。

一方で、「地球」でのお話では、時間的というか世代・年代の違いによる多様性が軸になっています。たとえば、ひかるとひかるの家族や遼太郎、まどかとまどかの父・冬貴、えれなと弟・とうまや家族の間には、年代が違うことによるそれぞれの考え方や価値観があります。初めはそこまで狙って分けて書いていなかったんですけど、お話を走らせている途中でその構造に落とし込んだほうが見やすいかも、と気づきまして（笑）。もちろん、すべてのお話が当てはまるわけではありませんが。

—妖精であるフワもちゃんと成長していくところが素敵でした。

プリキュアにとって要になることと、大切な存在であること、成長してユニコーン、ペガサスチックな姿になることは最初から決まっていました。描き方としては、守られる側から守る側になるという成長にしました。ただ「器」という単語は、最初は決まっていなくて、物語の途中から使い始めた言葉です。

—ノットレイダーの外見のモチーフは妖怪なんですよね。性格設定については、どう考えていきましたか?

層を作るという意味ではノットレイダーも変わりなく、"悪い者"以外の層を考えて、さらにギャップがあるキャラクターにしていきました。

カッパードはナルシストっぽいんだけどおかしなポーズをとったりと、どこか憎めないところがあるというキャラクター。ガルオウガはただ筋肉だけのパワータイプではなく頭が切れるリーダータイプ。テンジョウは高飛車だけど、ノットレイをちゃんといたわるやさしさがある。アイワーンはおしゃまな女の子だけど、天才科学者という二面性があるという具合に。

—12星座のスタープリンセスは、ヒントを出すだけで、あとはプリキュアたちに投げっぱなしという感じもありました。

本来は、最初の時点でプリキュアにへびつかい座のスタープリンセスが敵であることを伝えないといけないですけどね。でも、へびつかい座のスタープリンセスを消滅させると、その際にフワまで消えてしまうという、プリキュアにとんでもなく苛酷なことをさせようとしているので、真実は言えないですよね。だからといって12星座のスタープリンセスは悪というわけではない。宇宙にいる生命体を作った、いわばすべての親に当たるキャラクターで、子どもたちを思うがゆえにへびつかい座のスタープリンセスを消そうとしているというキャラクターたちで。複雑ですよね。

—ゲストとして登場する宇宙人は、観ていても楽しい外見でした。物語として描く際に大変だったことはありましたか?

星の説明をしないといけないのが大変でしたね。まず星の説明があって、その星の人々と出会って、物語が展開して変身と戦いがあってキャラクターの成長や気づきがあって終わる……を1話に入れなければいけないので、各所に負担をかけてしまいました。各話のシナリオライターの皆さんも大変だったかと思いますし、キャラクターも惑星もイチから設定を考えないといけないので、作画やキャスティングも大変だったでしょうし。

—とくに印象的だった星はありますか?

初期の惑星サマーンです。ユートピアなのかデストピアなのか判断が難しい文化がたまらなく好きです。

—惑星サマーンの名前の由来は?

夏のサマーから取っています。キュアスター、キュアミルキー、キュアソレイユ、キュアセレーネはそれぞれ、春夏秋冬をモチーフにしていて、キュアミルキーは夏。サマーなのでそこからです。スミマセン、なんのひねりもなくて。

プリキュアの力がなくても前に進めることを描きたかった

—最終話は15年後。ひかるが宇宙飛行士になって、自ら宇宙に出て行く姿が描かれました。

プリキュアの力がなくても前に進んでいけるということを描きたかったので、目標にしていた職業になれたからスゴイというお話ではなく、夢が叶ったというのも僕のなかではそこまで重要ではないです。キャラクターを作っている当初から、ひかるは将来、宇宙飛行士を目指すというのは、スタッフの間で決めていました。ただ、大人になって宇宙飛行士になった姿を描くかどうかは、物語を進めて行くうえでどうするのか決めようという感じでした。

—ひかるにとっては、ララに会うため宇宙に行くことが目標で、宇宙飛行士になったのはそれを叶えるために必要だったからということですか?

そうです。ララに会うという夢を叶えるためにひかるにできることは、宇宙飛行士になることだけでしたから。ただ、言ったとおり、最終話で描くかどうかは決めていませんでした。えれなが通訳になることもそうで、設定として決めていても、実際に大人になった姿を描く必要はないんじゃないかという思いもあって。『プリキュア』では主人公たちが大人になった姿が描かれることがあります。『HUGっと！プリキュア』はテーマ的にも大人の姿を描く必然性はあったでしょうし、『魔法つかいプリキュア！』は変身すると等身が変わるので大人になった姿を描くことは最初から決めていました。今回は、もしかしたら大人の姿を描く必然性はないかもなぁと物語中盤までは思っていました。ただ、やはりいろいろと説明しきれないことや描ききれないキャラクターの感情の部分も出てきて、そ

全部を描かないけれど何があったのか透けて見えるような構成に

れなら絵で見せたほうがいいんじゃないかということになりました。

15年後にしたのは、宇宙飛行士になることを考えると、そのくらい期間がないとリアリティーがなかったからです。そして、フワが48話で生まれ直したんだとすると、ちょうど15年後には、フワが一緒に過ごしていたひかるたちと近い年齢になるというのもいいかなぁと思って。でも、実際のフワの見た目や言動は幼いままですが。

——ひかるが宇宙飛行士になるまでにどんなことをしていたのかは、部屋に飾られた花の送り主の名前などから推測できますが、例えばまどかがどうして宇宙開発特別捜査局に入ったのかは、はっきりとは描かれませんでしたね。

わかりやすくは描いてないかもしれないです。でも、よく見ていると感情がわかるというか、透けて見えるというか。「スタプリ」ではたまにやるようにしていた描き方をしていまして。あるエピソードとあるエピソードをリンクさせることで、誰が何を考えているのか想像できるというようなことです。例えば、10話・11話でカッパードたちがプリキュアをボロボロに負かしたときは、バケニャーンは傍観者として見ているだけで、プリキュアを助けようともせず素知らぬ顔でいます。でも、ユニがキュアコスモに変身する20話・21話では、10話同様にボロボロになったプリキュアを、ユニがキュアコスモになって助けると言うような描き方ですね。

——エピソード同士をつなげることで、ユニの感情の変化が語らなくてもわかる形になっているんですね。

そうですね。対にすることで透けて見えるというか。ひかるたちの15年間がどうだったのかも彼女たちがどう過ごしていたのかを、49話を見ているとイマジネーションがふくらむかと。

えれなは48話のあとで留学をして海外に行くので、ひかるとまどかが日本に残ります。49話で、宇宙開発特別捜査局で働くまどかとひかるがふたりで会話していて、えれなは通訳ブースにひとりでいるというのは、えれなが留学中の3人の距離感をイメージしています。えれなのブースに家族が来るのは、留学先にもたびたび、家族がやってきたんだろうなとか、ひかるとまどかはふたりで宇宙の話をいろいろとしていたんだろうなぁとか、想像力がふくらむように描いています。

——父親との確執を明確に解消したまどかの姿は描かれませんでした。

彼女が父親と同じ職業を選んだということがいろいろと物語っているかと。ただ、これはあくまで僕の考えたところであって、想像の余地を残した状態で描いているので、そこは観てくださっている方々のイマジネーションを広げていただけたらと思います。

——ユニとララは距離が近づいている印象ですね。

ふたりの立ち位置から、彼女たちが15年間、ともに歩んだであろうというのは感じてもらえたらと思います。

——ちなみに、49話のAパートはひかるの夢だったというような描き方でしたが……。

ひかるがプリキュアに変身するのを見て、自分もプリキュアになれる、と思っている子たちがたくさんいます。でも、もしかしたらプリキュアになれないのかもしれないと思う時期が、子どもたちにもすぐにやってきてしまいます。作品ではプリキュアに変身したら強くなれると描いているのに、なれないとわかったときに、強くなれない自分はどうしたらいいの！　ってなると思うんです。それもあって、プリキュアになれなくても強い、プリキュアでいたときよりも、もしかしたら前に進んでいけるかもしれない、というのを描きたくて。だから、48話でプリキュアの力を失ったひかるたちは変身するわけにはいかないので、夢のなかで変身という形にしました。

あえて描かなかった距離感について共有してもらえた喜び

——本編中では「イマジネーション」という言葉がたくさん登場しました。この言葉は、どういったところから生まれたのでしょうか？

大人の事情的な話になりますが、玩具のデザインとしてスターカラーペンとスターカラーペンダントのモチーフは決まっていました。ペンとインクつぼなので、テーマである多様性ともどうも相性が悪くて。ペンとインクはイマジネーションを表現するものだし、多様性も人のことを考え、思う想像力が何より大切なので、そこをつなげられないかと思って、イマジネーションと考えました。

——映像になったとき、驚いたことはありましたか？

シナリオの段階では、人と人の物理的な距離感について明記することはほとんどなかったんですが、宮元さんや演出の皆さんが絶妙な距離を描いてくれていたんですね。たとえば、ユニが仲間になって、みんなと一緒にいるときも、ひかるたちの輪から少し離れたところに立っているとか、体が完全にひかるたちのほうを向いてないとか。あとは、シナリオの読み込み方がすばらしくて。さっきもお話したとおり、49話の15年後では、ひかるとまどかが一緒にいて、えれなは一緒にいません。打ち合わせで「せっかくの15年後なんだから3ショットでお願いします」なんてことを言われるかなぁ。そのときは、さっきお話した15年の間の距離感を表現しているんですと言おうと思って、準備していました。ですが、柳川さんをはじめとするプロデューサー陣も宮元さんも全然ツッコんでこなくて、そのまま通って。むしろ、シナリオにはなかった、ひかるが書いたイラストを、まどかがえれなにスマホで送るシーンもコンテで加えてくれていました。あのシーンこそ、留学先のえれなにまどかが日本でのひかるとの出来事をスマホで連絡していたのかも、とイマジネーションを働かせてくれるシーンですよね。本当に感謝の言葉しかありません。

——全49話振り返ってみての感想を教えてください。

あっという間でした。後半に入るとシナリオを早く上げてくださいと製作サイドからせっつかれる毎日でしたが（笑）。

でも、キャストさんを含めてすばらしいチームで、「スタプリ」に参加できて最高でした。

——「プリキュア」シリーズのような子ども向け作品というのは、やってみて難しい部分は多いですか？

そうですね。大人向けは自分が面白いと思うものを考えればいいし、厳しい展開でも視聴者に受け入れられやすいんですけど。例えば、「スタプリ」が大人向けの作品であれば、40話くらいから12星座のスタープリンセスがひかるたちに「私だけのイマジネーションと言ってるけど、あなたたちのイマジネーションは我らプリンセスが分け与えたものなので」と言えばドラマチックになりますが、それをやるとお話のトーンも一気に暗くなるだろうし。カッパードたちに関しても、もっと早い話数で虐げられた異星人たちだったと明かしてしまえば盛りあがるんですが、それもやっぱり暗くなるし、かなり重い話になり、ロケットで星々を冒険する楽しい物語が死んでしまいますし。なので、ノットレイがじつはいろいろな星の異星人の集りだという、ノットレイのマスクの下もラストのほうまで見せないようにしました。

——49話までノットレイのマスクを取った顔を描かなかったのは、そういう理由があったんですね。

ノットレイたちに個性が見えると、プリキュアが思いっきり戦えなくなるので。

——最後にあらためて、1年間応援してくれたファンに向けて、メッセージをお願いします。

放送は終わりましたが、作品的にはあえて描かなかった部分、イマジネーションを働かせる要素はたくさん残しています。ぜひ、それぞれのイマジネーションを働かせて、補完して作品を楽しんでいただけたらと思います。

【キャラクターデザイン】

高橋晃

【たかはし・あきら】アニメーター、キャラクターデザイナー。主なキャラクターデザイン担当作品は『美少女戦士セーラームーンCrystal Season III』『ドキドキ！プリキュア』『スイートプリキュア♪』など。

「春夏秋冬」の裏テーマを盛り込んだデザイン

――「プリキュア」シリーズでは、3回目のキャラクターデザインになります。今回のオーディション時のオーダーは？

オーディションの段階では、「宇宙」がテーマだということを聞いていて、キュアスターとキュアミルキーに相当するキャラクターを描いてほしいというオーダーでした。そのときに、最初に出てくる4人のプリキュアには「春夏秋冬」も裏テーマとしてあるという話はありましたね。僕としては、主人公とその対になる宇宙人のプリキュアをデザインするという気持ちでオーディションに参加しました。

――キュアスターに花のモチーフが描かれているのは「春」だからなんですね。

そうです。最初に描いたときは、もっと花の要素が多くて、今、星になっている部分はほぼ花でした。頭に付いている球体のなかに花が入っているのと、ウエスト部分やサイド部分に花びらの模様があるのはその名残なんです。ただ、頭の花はコスモスなので秋の花なんですけどね。これは「宇宙」を意味する「コスモ」からのだじゃれです。

――キュアスターは、ツインテールの先にあるお団子ヘアがとても印象的です。

お団子の髪形を思いついたときは、いけるなと思いました。じつは、お団子にくっついている星の飾りも最初はスイセンの花のイメージだったんですが、どんどんシンプルになっていきましたね。それから、肩は最初から出したいと考えていました。作画的にハードルが上がってしまうんですが、やはり新しいこともやりたくて。キュアセレーネ以外はみんな肩が見えるようにしたんです。

――背中が大きく開いているのも目にとまりますね。

これは特に意識したわけではなく、全体のバランスを考えていった結果ですね。

――キュアスターは、前髪がパッツンですよね。

前髪をパッツンにしたかったというよりは、眉毛を太くしたかったんです。それを強調するために、パッツンにしたんだと思います。

――オーディションの段階でキュアスターとキュアミルキーを考えたということは、実際のデザイン作業に入ってからも、ふたりのデザインは同時進行でしたか？

そうですね。対になる存在ということもあって、同じタイミングで描いていました。キュアミルキーは「夏」なので、最初のイメージは「雲」。入道雲のように、全体がもっともこもこしていました。そこから宮元SDの要望などもあり、だんだんと浮き輪っぽくなったり、つるんとしたデザインになったりと変化していったんです。キュアスターとキュアミルキーはシルエットも近づけたかったので、足首にも飾りをつけて、それぞれ片足だけタイツをはいているのも、対比を意識したからです。

――宇宙人のプリキュアであるということで、入れたかった要素はありますか？

触覚と目のなかにある星は入れたいなと思っていました。目のなかの星は、ハイライトを入れて流れ星っぽくしたのもひとつの工夫です。髪形に関しては、当初から短めのほうがいいなと思っていました。

――キュアミルキーの触覚は、アイワーンのように上に向いていないんですね。

触覚は元ネタがあります。それをアレンジして、髪の毛の一部にしたいなと考えていました。感情表現にも使えるし、いいんじゃないかなと思ったんです。キュアミルキーは、全員がスカートである必要もないだろうという意見から、パンツルックをアレンジしていきました。変身前の髪にメッシュを入れるのは宮元SDのアイデアで、僕も聞いたときにこれはいいと思ったのを覚えています。

――キュアソレイユは、かなりアクティブなイメージのデザインです。

キュアソレイユとキュアセレーネは、キュアスターとキュアミルキーにとって年上のお姉さんキャラクターになるようにと作っていました。月と太陽というモチーフもあるので、ふたりも同時進行で、対になる存在としてデザインしていきました。キュアソレイユは、お父さんのキャラクターの印象にあわせて、衣装は踊れそうなものに。髪はそれに合わせていったらかなりのボリュームになっていました。額を全部出したのは、安室奈美恵さんのイメージです。キュアソレイユに安室奈美恵要素は全然なかったですけど。

――キュアソレイユの「秋」の要素はどこに盛り込もうと思いましたか？

イヤリングです。これは色も含めてまさに「ブドウ」なんです。もうちょっとブドウに見えるものも考えていたんですが、オミットされて完成形になりました。ほかのデザインは、「秋」よりも「太陽」のほうをプッシュしました。髪飾りもそうですが、星をふたつ重ねているのは、「太陽」のイメージがあったからなんです。炎を扱うプリキュアということもあり、全体のデザインに盛り込みました。

――泣きぼくろは最初からありましたか？

つけていましたね。確か、宮元SDから



プリキュアらしくない部分も入ったデザインにしたかった

視聴者としても楽しめ充実した時間が過ごせた1年だった

ポイントとして何かあったほうがいいよねと話があって、つけた気がします。あったほうがかわいいですよね。

――キュアセレーネは、王道のドレススタイルというイメージです。

まさに王道のお嬢さまなので、難しかったんですよ。僕としては、何か「らしくない」ものを入れたいなと思っていたんですね。でも、結果的には、プリキュアになったなぁという感想です。彼女の前髪をパッツンにしたのは、4人並べたときのバランスがよかったからです。パフスリーブはお嬢さま感を出すためで、「冬」のイメージである雪の結晶は首元やブーツなどにモチーフとして使っていきました。イヤリングの月はまさに「月」である彼女そのままです。改めて振り返っても、キュアセレーネは王道から外すことができなくて、「難しかったなぁ」という感想ばかりです。

――キュアコスモは、いろいろな要素がてんこ盛りですね。

宇宙人ということは決まっていて、ネコ耳がほしいというオーダーがありました。それから、ブルーキャットという怪盗になることもわかっている状態からのスタートでした。帽子はブルーキャット由来のアイテムですが、最初、ネコ耳はアクセサリーのようなイメージで描いていたんですよ。だから、キュアコスモは人間の耳とネコ耳の両方が付いている。実際、レインボー星人としての姿のときはひとつだけなので、これは変身がうまくできなかったからだと思ってください（笑）。キュアコスモに関しては、少し細かい話になりますが、キュアミルキーのデザインを考えていたときに、"ヒヨクドリ"という鳥のような丸まった緑色の尾を入れようと思っていてすっかり忘れていて、キュアコスモのデザイン中に思い出したんです。それで、髪の毛の先にくるっと丸まった尾のようなデザインを入れてみました。あと、ほかの4人には、星、ハート、太陽、月とモチーフがあるので、キュアコスモにも何かをと考えたのが三角なんです。なので、バケニャーンにも三角のモチーフを付けました。プリズムは三角ですが、虹＝プリズムだから三角というのは後付けで考えました（笑）。

――プリキュアのトゥインクルスタイルについては、どのようにデザインしていったのでしょうか？

ティアラを付けてほしいという要望がありました。あとは、お約束といいますか、パワーアップしたときは髪が伸びてコスチュームの丈も長くゴージャスになるというのがあるんですが、僕としてはそこまで派手にしたくなかったんです。スカートもなるべく長くならないように、ヘアスタイルも大きく変わりすぎないように……正面から見たとき重く見えないようにスッキリ、というのがトゥインクルスタイルのデザインのポイントでした。それもあって、キュアスターは脚がちゃんと見えるデザインになっているんです。キュアミルキーは、サイドの髪を強調してゴージャス感を出しつつ、ドレス感を出すために肩周りのデザインを変えました。キュアソレイユは、肩をかなり大胆に露出させて、ラテンの感性をより濃く。キュアセレーネも、トゥインクルスタイルのときは肩を出したいと思っていたんですが、彼女のキャラクター性も考えてケープを付けることにしました。キュアコスモも、ほかの4人と同じテイストで考えたくらいで、トゥインクルスタイルだから大幅に変えようとは考えませんでした。

私服はプリキュアの姿から大幅に変わらないように

――それぞれの私服についても聞きたいと思います。まずプリキュア姿を考えて、それから変身前の姿に落とし込んでいったのでしょうか？

そうです。ひかるのツインテールはキュアスターからの逆算で、だいぶ短くしました。もう少しおとなしい感じで、メガネをかけてツインテールの位置も低いところにしようと考えていたんですが、いろいろと試行錯誤をした結果、今の位置に落ち着きました。彼女はサロペットスタイルですが、とくにパンツスタイルかスカートかにこだわりはなく、いろいろな打ち合わせの結果と、活発であるという彼女の性格が絡み合って今のスタイルになりました。ひかるはあぐらをかいたこともあったので、このスタイルでよかったなと思います。

――サロペットのおしりにある星がかなり目立ちますよね。

あれはポケットのつもりです。どこからものが入るのかわかりませんが、星の要素は私服でも入れたかったんです。



――ララの私服デザインはどうでしたか？

宇宙人なので未来っぽく、ギミックも付いた服というイメージでした。本編では活かすところがありませんでしたが、じつはすごく多機能な服なんです。たとえば、肩周りの蛇腹が伸びるとか、上着の青いところが長くなるとか……。最初に描いたときは、ジャケットの下のデザインは考えていませんでした。ただ、僕のデザインではありませんが、26話のパジャマがまさに上着を取った姿なんです。それから、ララはハートのモチーフが付いたアイテムをたくさん身につけていますが、これは、サマーン星の有名ブランドのマークです。

――えれなもパンツスタイルで、活発な印象ですね。

身体を動かすことが得意なキャラクターなので、アクティブさを考えるとパンツになりますよね。お姉さんキャラクターでもあるところも潰さないように心がけました。プリキュア姿をベースに考えているので、前髪を下ろすことはせず、ずっと上げているスタイルになりました。上着は、麻とかそういう素材なんだろうなと思います。

――まどかは、私服もおしとやかな印象を受けました。

ジャンパースカートに長袖、胸元にリボンというスタイルは、ザ・お嬢さまですよね。普通の服を普通に描くのは大変なんですが、私服に関しては王道でいいだろうと思ってそれほど悩みませんでした。リアルだとここまでスカートが開くことはないんですが、アニメとしてのデフォルメポイントとして、スカートをふんわりさせたくらいです。あとは、ベルトのバックルやブローチに月の要素を入れましたが、髪のリボンも、プリキュア姿をそのまま落とし込んだ形にしました。

――ユニはブルーキャット、マオ、そしてユニといろいろな姿がありました。

人間姿のときは、お団子を3つつなげるヘアスタイルをやってみたかったんです。あとは三角のモチーフを押していった結果、あまり丸いところがないデザインになりま

した。マオは、ザ・アイドルです。1980年代アイドル風を追及した結果、あの髪形になりました。あとはネコを手や足のデザインに盛り込みました。当初描いたときはもっといろいろ盛っていたんですが、プリキュアよりかわいくなってはいけないということでだいぶ控えめになりました。

——ユニの獣人としての姿はどういうイメージでしたか？

　足の太さがポイントです。宮元SDからはふさふさした感じを出してくださいといわれたので、それを盛り込みました。獣人姿のときの独特な髪形は、全体のバランスを見て決めました。

——49話に登場した15年後のスタイルについてはどう考えていきましたか？

　5人とも宮元SDからラフをいただいていたんです。全体のイメージもなんとなくは聞いていたので、それを盛り込みつつ自分の好みも入れた感じですね。ひかるは、まずショートカットにしたいなと思いました。メッシュを入れるかどうかは考えましたが、とりあえず入れておいて、宮元SDに判断してもらおうと。ちょっとやり過ぎになるかなとも思ったんですよ。でも、ショートカットになってしまうので、髪にポイントがほしいなと思って入れたらOKが出ました。メッシュにはいろいろな意味を込めましたが、そもそもララにメッシュが入っているので観ていた方にはわかっていただけたんじゃないかなと思います。顔は、15年経ってはいますが、あんまり変えちゃうと誰だかわからなくなるのでほぼ変えず、ただかっこいい感じにしたいなと思ってデザインしていきました。

——ララの15年後はロングのヘアスタイルになっていますよね。

　これは、完全にひかるの髪形です。飾りこそ違いますが、ひかるそのまま。確か、ひかるをショートにというのは考えていたけれどその前にララの15年後ができあがっていた気がします。

——えれなは一見するとショートカットに見えますが、実際はロングをまとめているんですね。

　そうですね。髪の長さ自体は、中学生のときとほぼ変わっていないくらいかな。分け目を若干変えて、大人っぽさが出るようにしました。

——まどかは、中学生時代よりもすっきりしたイメージです。

　パンツルックなので、あんまり髪が長いとバランスが悪いかなと思って、ちょっと短くしました。もとの髪形とあまり変えないようにすると、このくらいの長さがちょうどよかったんです。髪のリボンに、ちょっとだけ中学生のころの名残がありますね。

——15年後のユニは、獣人姿として登場しました。

　ユニは、次のオリーフィオというイメージで、オリーフィオをモデルに描きました。顔を大人っぽく、衣装やアクセサリーもそれっぽく。実際、ユニがオリーフィオのあとを継ぐかはわからないので、これは僕の願望です。

——プリキュア姿も私服姿も、全体的にすっきりしたデザインでしたね。

　そうですね。あと、今回は1980年代風というテーマもあったので、ひかるがレッグウォーマーみたいな靴下をはいていたり、ララが手袋をしていたりするというのも、インスピレーションを膨らませて作っていきました。



楽しくデザインできたノットレイダー

——ノットレイダーのデザインはどうでしたか？

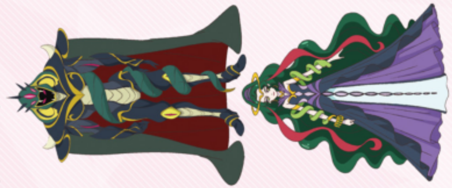
　もともと宮元SDのイメージがあって、それぞれのモデルは河童と天狗、ひとつ目小僧と鬼になっています。敵に関してはそれほど大変なことはなかったんですよ。ただ、描いてみたら、カッパードは頭髪が一部なくなっているし、テンジョウは露出が激しいしで、大丈夫かなと思っていました。カッパードの髪形は、河童のお皿をかっこよく描こうと思った結果で、僕自身もすごく気に入っているんですが、最初はちょっと心配でしたね。テンジョウが仮面を被っているのは……じつは美人な天狗っぽいキャラクターをうまく描けなかったから。仮面にしたらいいんじゃないかと思ってそうしたんですが、まさか後々それがストーリーに絡むとは思っていませんでした。アイワーンは、単眼というのが懸案事項ではありました。でも、金平糖をモチーフにとげとげとしてかわいいデザインになったなと思います。ガルオウガは青鬼なんですが、額にあるのはじつは3つ目の目なんです。ただ、そこを強調する演出もなかったので、もしかしたら視聴者の方に模様だと思われているんじゃないかなと、そこは少し心残りです。

——アイワーンは、15年後に大きな変貌を遂げていましたね。

　監督の絵コンテに、あの等身で描かれていたんです。それがすごくよかったので、それを活かし、髪形もそのまま描きました。僕としては、スタイリッシュでかっこいいキャラクターにできたらと思っていました。

——ダークネストのデザインは、最初から正体がへびつかい座のスタープリンセスとわかってのものだったのでしょうか？

　そうです。なので、それほど線は太くせず、腰も細く描いています。中身はプリンセスなので、鎧でそれをぼかしている感じですね。ダークネストがヘビモチーフなのは、正体がへびつかい座のスタープリンセスだったからなんですよ。だから、気づく人は早くから気づくだろうなと思っていました。



——へびつかい座のスタープリンセスは、ラスボスでありながらスタープリンセスという、複雑な要素を持ち合わせています。

　12星座のスタープリンセスとデザインの方向性は同じで、目のなかには星を入れました。ただ、ほかのスタープリンセスよりはちょっとお姉さんなのと、ヘビっぽい要素を盛り込んだところが違いでしょうか。豹変した設定もありますが、僕としてはそんなに悪いキャラクターとは考えていなかったんです。宮元SDからの指示でおどろおどろしくなりましたが、プリンセスらしさはきちんと描いていました。

——全49話の放送が終わって、今の感想を教えてください。

　「プリキュア」シリーズは3回目のキャラクターデザインですが、1年間関われるというのが本当に楽しくて。「スタプリ」は、本編の作画にも関わることができましたし、1年間、充実した時間を過ごすことができました。主人公のキャラ付けはもちろん、ほかのキャラクターの考え方や行動も観ていてしっくりくることが多く、視聴者としても楽しめる1年だったので、終わってしまって悲しかったです。でも、「プリキュア」シリーズはまだ続いていきます。「オールスターズ」などでは、「スタプリ」チームの登場もまだあるかもしれません。グッズ展開もまだまだあると思いますので、今後も楽しみにしていてください。

Staff Interview 4

【音楽】

林ゆうき × 橘麻美

【音楽】

【はやし・ゆうき】作曲家、編曲家。主なアニメの担当作品は、『僕のヒーローアカデミア』シリーズ、『ハイキュー!!』シリーズ、『からくりサーカス』『ポケットモンスター』（2019年）など。

【たちばな・あさみ】作曲家、編曲家。主なアニメの担当作品は、『ダーリン・イン・ザ・フランキス』、『ハイキュー!!』シリーズ、『ソラとウミのアイダ』『青春×機関銃』など。

「宇宙」というテーマはチャレンジがしやすかった（林）

シンセサイザーにこだわった音作り

——今回、音楽をふたりで担当することになったきっかけは？

林　僕はこれまでに『キラキラ☆プリキュアアラモード』『HUGっと!プリキュア』と2作を担当させていただいたので、今回は違うテイストもあっていいのではないかと思い、橘さんとやらせていただくことになりました。橘さんとはこれまで一緒にやらせていただいたことも多いですし、ひとりでやるよりも音楽性がより複雑になるかなと思ったんです。最近の『プリキュア』は多様性を押し出しているところもありますし、子ども向けの作品とはいえ、内容的に深いところもあるので一緒にお願いすることになりました。

——橘さんは、『プリキュア』シリーズの最新作の音楽を担当してほしいとお話があったとき、どんな感想を持ちましたか？

橘　『プリキュア』という作品はもちろん知っていましたが、これまでしっかりと観たことがなかったんですね。それもあって、まさかという気持ちでした。しかも、私自身が女児向けの作品はもちろん、少女向けなのに戦うシーンがあるアニメの曲を作るというのも初めてだったので、なじみがない分、楽しみながら作らせていただきました。

林　打ち合わせ自体をそんなに細かくしたわけではなくて、僕のほうが先にお話をいただいていたこともあって、苦手なところは全部橘さんにお任せしましたね（笑）。

橘　日常シーンとフワのテーマは私の担当でしたね。それからノットレイダーのテーマ。林さんはメインテーマや変身バンクでかかる曲でしたよね。

——作品のテーマを聞いたときの感想はどうでしたか？

林　正直なところを言うと「やりやすい」という印象でした。僕が担当した『キラキラ☆プリキュアアラモード』と『HUGっと!プリキュア』は、テーマがお菓子作りと子育てだったんです。"魔法つかい"や"プリンセス"のように、明確なイメージがわきにくい部分が多かったので、「宇宙」と言われたときに得意なジャンルが来たなと思ってうれしかったです。

橘　私も「宇宙に行く」ということは聞いていたので、いつから行くのかなというのが楽しみでしたね。ファンタジーの世界観を入れ込むこともできるので、どうやって作ろうかとワクワクしていました。

——今回、とくにどういった方向性で音楽を作っていきましたか？

橘　事前の打ち合わせで、シンセサイザーの音色を使っていこうという方向性になりました。林さんからシンセドラムの参考音色などもいただいて、そこから自分で作っていきました。

——なぜシンセサイザーを使うことになったのでしょうか？

林　今回、スタッフの方から「宇宙でレトロな感じ」というオーダーをいただいていたんです。僕のなかでは、宇宙であればちょっとエッジの効いた音色も使えるし、生楽器よりもシンセサイザーのほうが合うなと思って。子どもが観るヒーロー作品のような質感にしたいなと思ったんです。

橘　ファンシーさのある音も、シンセサイザーでふんだんに盛り込みましたよね。ノットレイダー側だとエレキギターが鳴っていたり、ドラムも激しかったりするけれど、そのなかにもシンセサイザーのファンシーな音色を入れて、統一感を図りました。

林　敵の音楽って、怖く作りすぎるとリテイクが出るんですよね。

橘　そこは子ども向けだからですよね。エレキギターの音色ひとつでもレトロっぽさを試行錯誤したり、バランスを取ったりしました。宇宙で冒険をしているときと地球で日常的な生活をしているときで、生楽器の分量を変化させるなど、バリエーションを持たせていきました。

林　正直、生楽器は使わなくてもいいかなとも思ったくらいなんですよ。ただ、さすがにそれだけでは難しかったので、一部の曲では生楽器も使いました。それでも、通常なら生楽器7、シンセサイザー3くらいの割合で作るところを、生楽器1、シンセサイザー9くらいで作ったところもありましたね。

『スタプリ』の音楽ではたくさんのチャレンジができた

——キャラクター用に作った音楽で、印象的だったものはありますか？

林　僕はブルーキャットの音楽ですね。とにかく怪盗らしさを出したくて、アップライトベースやサックスなど、大人っぽさが感じられる音を入れました。

橘　私はテーマのあるキャラクターってフワくらいだったんです。フワに関しては、圧倒的にかわいい音を選びました。

——フワは途中からユニコーンに成長していきました。

橘　それに合わせてもちろん音楽も変えていきました。それから、プリキュアたちが力を合わせて気持ちをひとつにしていくところにフワも加わっていく。そんな成長を感じるところがあったので、後半は厚みがあって壮大なイメージで作っていきました。

——惑星ごとに曲を作るという案はありましたか？

橘　特別な音楽を当てたのは、惑星サマーンくらいでしたよね。

林　惑星ごとに曲を作ってしまうと、その星でしかその曲を使えなくなってしまうんです。それよりも驚いたシーンやバトルシ

全体的にファンシーな音作りにこだわって仕上げた（橘）

ーンなどで幅広く使えるほうがいいので、あまり細かなくくりは設けませんでした。

――「映画スター☆トゥインクルプリキュア 星のうたに想いをこめて」の音楽についてはどうですか？

林 映画はフィルムスコアリングといって、絵にあわせて曲を作るので、スタッフ側からのオーダーはさほど細かくはありませんでした。今回は、先輩プリキュアの登場もなく、『スター☆トゥインクルプリキュア』だけで作れたので、個人的にはやりやすいなと感じました。

橘 劇場版ということで、生楽器はTVシリーズよりは多めかもしれません。少し豪華にしつつ、劇場で聴いたときに臨場感のあるものにしたいなと思って作っています。とはいえ、世界観がTVシリーズと変わるわけではないので、そこで違和感が出ないように工夫しています。

林 僕が担当したところでは、ひかるたちがウユニ塩湖やギアナ高地に行くシーンで使われる曲もあったので、そこは民族的な楽器とレトロシンセサイザーがリンクするようにしていきました。曲が絵ときれいに合っていて、観ていて楽しかったです。

――シリーズを通して、とくに思い入れのある曲はありますか？

林 玩具の制作の都合上、本編の音楽制作に入る前に変身バンクの音楽を作っているのですが、今回、変身バンクに歌が入るということもあって、制作中のやりとりの多さという意味で印象に残っています。いろいろなものに先駆けて作るので、試行錯誤も多くて。自分としては、小さな子が歌いやすいようにということを考えて作りました。あと気にしていたのは、ソロのときはいいんですが、複数人の歌声が重なったときに薄っぺらく聞こえないかということでした。ソロのアーティストがやるように、同じ音を重ねたり、ハモリを入れたりしたほうがいいんじゃないかと。そのあたりは微調整をしつつ作っていきました。

橘 トゥインクルイマジネーションに関わるところは、フワがパワーアップして大きく包み込むような壮大な曲で、すごく印象に残っています。フワのテーマも個人的には好きですね。惑星サマーンや宇宙星空連合に関しても、少し変わった音楽になっているところも個人的には好きなポイントです。いろいろな星で、いろいろな音楽が使われているのも面白いですよね。

――TV、映画の両方の音楽を楽しんでほしいですね。

橘 映画はユーマというオリジナルキャラクターとプリキュアたちがどう打ち解けていくか、成長していくかというお話です。作品の世界観が広がったり、地球を大旅行したりするようなシーンもありますので、絶対楽しいと思います。

林 地球大旅行は絶対楽しいですよね。きっと映画を観た子どもたちが行ってみたいと思えるようなシーンも満載で、未来を作れる作品になっています。

橘 夢がつまっていますよね。

林 そうですね。地球のいろいろな場所に子どもが興味を持ったなら、ご両親はぜひ連れて行ってあげてほしいです。

橘 沖縄にも行きますからね。

林 いきなり海外はハードルが高いかもしれないので（笑）、まずは国内から、ぜひ子どもたちと旅行してみてください。

TVシリーズのほうは、個性が際立った音楽ばかりだと思うので、それを含めて物語全部を楽しんでもらえたらと思います。

橘 これも個人的な心配ごとですが、個性的すぎて次のシリーズや次の次のシリーズのプリキュアと一緒の画面に出たときに、音楽的に違和感があったらどうしようかと思っています。

橘 でも、そう感じるのはそれだけ音楽でチャレンジができたということですよね。

林 そうですね。とにかく作り手としても気に入っている曲ばかりですので、楽しんでいただきたいです。

CD Information



スター☆トゥインクルプリキュア オリジナル・サウンドトラック1
「プリキュア・トゥインクル・サウンド!!」
●3,000円（税別） ●発売元：マーベラス



スター☆トゥインクルプリキュア オリジナル・サウンドトラック2
「プリキュア☆サウンド☆イマジネーション!!」
●3,000円（税別） ●発売元：マーベラス



「スター☆トゥインクルプリキュア ボーカルベストアルバム」
●3,000円（税別） ●発売元：マーベラス



「映画スター☆トゥインクルプリキュア
星のうたに想いをこめて」オリジナル・サウンドトラック
●3,000円（税別） ●発売元：マーベラス

Staff Interview 5

【プロデューサー】柳川あかり × 【プロデューサー】田中昂

【やながわ・あかり】東映アニメーションプロデューサー。主な担当作品は『おしりたんてい』『映画ふしぎ駄菓子屋 銭天堂』（プロデューサー）など。

【たなか・あきら】ABCアニメーションプロデューサー。主なプロデューサー担当作品は、『キラキラ☆プリキュアアラモード』など。『映画スター☆トゥインクルプリキュア 星のうたに想いをこめて』も担当。

子どもたちにどうやって「宇宙」に興味を持ってもらうか





――今回ふたりのプロデューサー対談ということで、まず、それぞれの役割について教えてもらえますか？

田中　ベースとなる企画を担当するのが、製作会社である東映アニメーションのプロデューサー・柳川さんです。私は放送番組として企画をどう成立させるかがメインの担当になります。TVシリーズ以外にも、映画や「ドリームステージ」というキャラクターショー、「スタプリLIVE」と「感謝祭」も事業として担当していました。テレビ局側の人間なので、一番視聴者に近いところでものごとを判断していく立場に立つことが多いです。ただ、完璧に分担しているというわけではなくて、4人いるプロデューサーが互いにサポートしながら作っていく形です。

柳川　企画のコンセプトも私だけで考えているわけではなく、プロデューサーの皆さんと一緒に話しあっているんです。製作会社としては、テレビ局の方々から「一緒にやりましょう」と言っていただけないと、話を進められない。ですから、プロデューサーは守備範囲が少しずつ違うだけで、チームで一緒に戦っていく関係性です。

田中　『キラキラ☆プリキュアアラモード』も担当しましたが、東映アニメーションのプロデューサーの方は皆さん個性が違いますが優秀な方々ばかりで、そのなかでも柳川さんは、ビジュアルイメージやテーマ設定、何を描きたいかをしっかり作っていただける方だという印象でした。企画の根っこのところがしっかりしていたので、やりたいことをくみ取りながらバランスを見るという仕事もやりやすかったです。

――田中さんは、『スター☆トゥインクルプリキュア』の企画を最初に見たときの感想はどうでしたか？

田中　私のところにお話が来た時点で、「宇宙」と「星座」がモチーフであること、「プリキュアが宇宙に行く」ということは書いてあって。ただ、ターゲットになる女の子たちにとっては、ちょっととっつきにくいモチーフかなと思ったんですね。例えば、「星座」をモチーフにするにしても、宇宙に飛び出さずに描く方法もある。でも、「宇宙に行く」というところは重要な要素としてあったので、それをどうやって見せるかを工夫しなければいけないと考えていました。『プリキュア』がメインターゲットにしている女の子って、身の回りのことに関心が強いので、「宇宙」に興味を持ってもらうにはハードルが高いんじゃないかと思っていたんです。それから、宇宙空間はどうしても暗いイメージになってしまうので、どうやって明るくキラキラしたものを入れるか。ロケットのような男の子に好かれそうなものをどう入れていけばいいかは、宮元SD含め、スタッフ陣で考えていきました。

柳川　もともとは、「宇宙」よりも「星座」が先にあったんです。「星座」をモチーフにするならば、「宇宙」も舞台にしたいという流れだったんですね。私は、「星座」を人間関係になぞらえたときの関係性ってロマンチックでいいなと思っていて。ひとりひとりの存在を「星」に見立てたときに、「星座」が人間関係、「宇宙」が社会という概念です。いつから、どのくらいの頻度で宇宙に行くのかは議論の争点でしたね。

田中　まさか宇宙戦争を描くことになるとは思いませんでしたからね（笑）。

柳川　だんだん、みんなタガが外れたみたいになっていきましたよね。もともとスタッフもSFや宇宙が好きな人たちが多かったんです。でも、3歳の子から楽しめるアニメにするということでその要素を抑えていた部分も多くて。

田中　シナリオの打ち合わせのときは、できないことをたくさん話しましたよね。「宇宙海賊を出そう！」とか（笑）。

柳川　ありましたね。9割は採用されていませんが、そのくらいたくさんのアイデアを出しあいました。

――制作スタッフ陣はどのように決めていったのでしょうか？

柳川　順番としてはシリーズディレクター、そのあとにシリーズ構成、キャラクターデザインとお願いしていきました。シリーズディレクターを宮元さんにお願いしたのは、『ふたりはプリキュア』で演出助手をされていたり、ほかのシリーズで各話の演出も担当されていたりしたことと、新しいことに対してすごく意欲的であること。コミュニケーションを取りつつ、新要素を積極的に考えてくださるのでお願いしました。

シリーズ構成は、私が『プリキュア』シリーズに初めての参加であったこと、宮元さんもシリーズディレクターとして参加されるのは初めてだったこともあり、明文化されていない『プリキュア』シリーズのお作法を理解している方にお願いしたいと思ったんです。そのなかでも、「スタプリ」のテーマやりたいことを鑑みて村山さんにお願いしました。お願いした当初は村山さんも『魔法つかいプリキュア！』で「異

これからもイマジネーションを大切にしていってほしい（柳川）

世界からやってきた子との交流を描く」という似た構造の物語をやってしまっていたので、というお話をされていましたね。でも、全話振り返ってみると、『魔法つかいプリキュア！』を担当されていたからこその『スタプリ』なのかなと思いました。ご一緒できて本当によかったです。

キャラクターデザインに関しては、例年と同様にオーディションを行い、高橋さんにお願いしました。

原点と新鮮さの両方を持たせることができた作品になった

――プリキュアは4人が最初に登場し、あとからひとり追加されるパターンでした。

田中　人数や登場順、タイミングに関しては、すんなり決まった印象でした。まず、主人公がいて、宇宙人のプリキュアと出会う。タイプの違うふたりが出会って物語がスタートするというのは、『ふたりはプリキュア』のころから続いているシリーズの原点でもあるんです。そこから、対照的な存在であるふたりの先輩が出てきて4人。さらに追加して5人。ひかるとララが軸になることはみんな納得していましたから、ほかのメンバーがどう支えるかを大切にしていきました。

柳川　星型のイメージで、5人にしたいと決めていました。地球人対宇宙人の2項対立にしたくなかったので、違う惑星出身の宇宙人を増やした構成です。

――ミントグリーンのプリキュアがピンクの対になるというのが新鮮でしたね。

柳川　『魔法つかいプリキュア！』のキュアフェリーチェがミントグリーンとピンクの組み合わせでしたし、昨今の女児向け作品でミントグリーンが特別珍しい色というわけではないんです。ただ、ピンクの対になるというのはチャレンジだったかなと思います。

田中　ピンクとミントグリーンの組み合わせって、すごい発明だなと思いました。ミントグリーンに宇宙っぽさがすごく出ているんですよ。

柳川　キュアミルキーは、髪が短かったり、かぼちゃパンツのようなスタイルだったりと、過去お子さんから支持が高かった要素に挑んでいったようなデザインで、プリキュアの王道からは外れています。もちろん、作る側としては、魅力的だと信じて世に出していますが、正直どんな反応が返ってくるかは期待と不安が半々ではありました。結果、かなり好意的に受け止めていただけたので、ホッとしました。

田中　これまでのシリーズで積み重ねてきたデータから考えると、グリーン系はピンクの隣には置かないキャラクターですよね。でも、組み合わせや見せ方が、この作品にすごくマッチしていたと思います。キュアミルキーは登場時から人気がありましたが、1年を通してそれがどんどん増していったんです。その増し方は、製作陣の狙い以上でした。

柳川　今回、どのキャラクターもそれぞれ一定の人気がありました。作り手側の気持ちとしては、どんなお子さんでもお気に入りのキャラクターが見つかるといいな、という思いでいますから、人気が一極化せずに愛着を持ってもらえていることはうれしかったです。

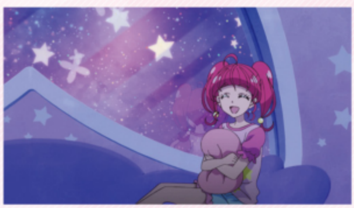
――プリキュア5人の家族関係も、それぞれ個性的でしたね。

柳川　なるべく違う家族像を描きたいというのは、当初から話していました。

田中　打ち合わせで長く時間を取ったのは、ひかるのお父さんが、どうして家にいないのかということでしたよね。それから、えれなの家族像をどこまで描いていくか。センシティブなことだなという感覚ではあったんです。

柳川　家族関係に関しては、どれがいいとか悪いとかを描きたかったわけではないです。そこにメッセージ性はないんです。強いていえば「家族像の正解はない」ということだけで。深く掘り下げすぎて深刻になりすぎると、今回やりたいこととは乖離してしまうので、その案配を議論していきましたね。

田中　家族関係を深く描きすぎると、こういう家族は世間からこう見られています、となってしまいかねない。その描き方では、子どもにその価値観を押しつけてしまうことにもなりかねないんですね。中学生くらいになると、問題意識も芽生えてきているから、家族関係を深く描いて、そこで浮き彫りになる問題を解決するという流れでもいいんですが、ターゲットとしている子どもたちには先入観がない状態なので、この作品で現在の価値観を植えつけないように、つねに配慮しています。





――まどかの家族について、ひかるたちが何も言わないのもその流れからですか？

柳川　そうですね。当事者でない人が否定をしないということは大切にしました。たとえば、まどかの家にしても、本人が父親との関係を問題として捉えていたら、ひかるたちが何か行動を起こしてもいいんですが、そうではないのに勝手に切り込んでいくのは違うかなと。視聴者であるお子さんたちも、自分の身近にある世界が当たり前のもので、それ以外の世界を知らないし、そのことに疑いも持っていないことが多い。まさに前半のまどかやえれなに近い状態です。それが、ひかるたちとの交流を通して「普通ってなんだろう？」「私はどうありたいんだっけ？」と自問自答が始まっていきます。

――遼じいは、最初から最後まで強く目立つわけではないけれど、キーになるキャラクターという印象でした。

柳川　ひかるは、クラスメイトとの関係が決して悪いわけではない。でも、自分が好きなことについて、同じように語れる人が同世代や身近にはいない。そういうキャラクターにしたいと話している過程で、遼じいが生まれたと記憶しています。実際、身近に友達がいない子も大勢いると思うんですよね。でも、本当に探していた友達は、まだ出会っていないだけで地球の裏側にいる言葉が通じない誰かかもしれないし、親子くらい年齢が離れた誰かかもしれない。そんな想いがあり、ひとつの願いとして遼じいを登場させています。

『スタプリ』を全方位的に楽しんでいただける「感謝祭」ができてよかった（田中）

スターカラーペンの取り扱いでより深まったプリキュアの関係性

――全49話で印象に残っているエピソードを教えてください。

田中　印象に残っているのは、パジャマパーティ（26話）のあたりです。宇宙人が来てもグイグイいくところからスタートしたひかるが、いろいろなことを理解して、人間っぽくなっていくのがちょうどこのあたりからだなと思っていて。後半戦に向かって、ひかるが変化していく様子を見られて、その先の物語の道筋も見えた気がしたのを覚えています。

柳川　どのエピソードも思い入れ深いので悩んでしまいますが、いくつか挙げるとすると、まず8話です。ケンネル星に行って、違う価値観と出会う最初のエピソードですが、「スタプリ」で描きたかった大きなテーマが詰まっています。シナリオは複数のスタッフで議論を重ねたうえで決定稿になるのですが、コンテにする過程のなかでも「テーマを考えると、もっとこうした方がいいのではないか」という意見が出てきて、スタッフそれぞれが真摯にテーマに向き合ってくれていることを感じた回でした。

25話の星まつりの回で、ララとユニがふたりきりで話すシーンも好きです。「スタプリ」では相手の心の扉を開けて入っていくようなシチュエーションでは、なるべく一対大勢ではなく、一対一で落ち着いて対話させることを心がけていました。「心の宇宙」というキーワードが出てきたのもこの回ですね。

ララが宇宙人バレする40話もお気に入りです。「スタプリ」のテーマとして「多様性」を挙げていましたが、ユニの当番回でもたびたび触れていたように個人の「多面性」というのもひとつテーマでして。宇宙人のララも、クラスメイトのララも、両方肯定するいいエピソードでした。

個人的には15話のゼニー星はもっと出したかったですね。宇宙怪盗に宇宙アイドルに宇宙マフィアに宇宙オークションと、カオスですよね。色合いもかわいくて大好きです。



――プリキュアの変身バンクに歌が入っているというのも新しい試みでしたね。

柳川　営業チームや玩具メーカーとの会議のなかで「変身のなりきり遊びを強化したい」という課題が挙がったのがスタートでした。議論の末、変身バンクで歌うということになりました。ストーリーのなかでもキーになる要素になり、48話へと繋がったのでよかったです。権利調整には胃が痛くなりましたけど（笑）。

田中　今までのシリーズでも、コーラスが入っていたことはあったので、人の声が入った変身曲が初めてというわけではないんですよね。

柳川　そうですね。ただ、歌だけじゃなく振り付けの要素も盛り込まれていたので、製作サイド的には大変なところも多かったと思います。口パクを歌と合わせるかどうか、フルで歌えない回はどうするか、いろいろ試行錯誤をして構成していきました。

田中　『映画プリキュアミラクルリープ みんなとの不思議な1日』で、3世代の変身バンクがあるんですが、『スター☆トゥインクルプリキュア』が一番長いんです（笑）。途中で切れないから……。「スタプリ」チームにとってはうれしいのですが。

――本作の決め技についてはパターンが少なく、シンプルでしたね。

柳川　技については議論がありました。モチーフのところでもお伝えしたとおり、「星座」だけだと3歳くらいのお子さんには身近ではないし、わかりづらい。「スタプリ」で初めて「星座」という概念に触れる子も多いと思うので、パンチやキックといったシンプルなアクションを5人の戦い方のベースにして、そこに星座名を加える形に落ち着きました。

田中　技でいいなと思ったのは、ひかるたち4人とユニとの関係性ですね。プリンセススターカラーペンは12本存在していて、キュアコスモ以外の4人に3本ずつ割り当てられている。キュアコスモが技を放つときにペンをどうするかを話しあって、誰かからその都度貸してもらうという形にしたんです。もちろん、決めたときは動きがひとつ増えるし、ひとりだけスターカラーペンを持っていないプリキュアがいていいのかなど、不安点もなかったわけではありません。ただ、結果的にはすごくいい演出にもつながりました。キュアコスモって、ほかの4人とは少し距離があるところにいるんですよね。でも、技を放つためにはペンを借りなければいけない。その関係性がキュアコスモのキャラクターを物語るのにすごく大きく作用をしていたし、借りる姿を見るたびになんだかうれしくなっていました。

柳川　1本を託すというのは信頼ができている証にもなりますからね。キュアコスモとほかの4人との距離感の変化を、プリンセススターカラーペンの貸し借りでうまく表現できていたなと思います。

等身大の女性の導き 15年後のエピソードでも描きたかった

――「スタプリ」は「プリキュア」シリーズで初めて、放送がすべて終わったあとで「感謝祭」というイベントが開催されましたね。

田中　最初にもお話したとおり、私はTVシリーズ以外にも事業をいくつかまたがって担当させていただいているんです。個人的に、それぞれが点になっている感覚が強くて、まとまって何かできればという気持ちがあったんですね。ライブやキャラクターショー、キャストが舞台挨拶で話すような部分、TVシリーズ、映画、全部をまとめてイベントができたら面白いなと思っていて。それから、「プリキュア」シリーズって、次の「プリキュア」をどうスタートさせるか、どうまく受け継ぐかというところをとくに大切にしているので、どうしても終わっていく作品の大締めというのが存在しないんです。だから、それをまとめたいなと思っていました。コンセプトとしては、卒業式。キャスト、製作サイド、そして応援してくれた皆さんが集まって、卒業式ができたらということをきっかけに「感謝祭」は生まれました。

――「感謝祭」のキャラクターショーは、ユニがララのロケットに住むようになった理由が描かれるなど、本編を補完する物語になっていましたね。

田中　TVシリーズのシナリオを全部書きあげていただいたあと、村山さんと相談をしたときに、村山さんから「書き切れなかった部分があるので、それを軸にした話にしたい」という提案がありました。エピソードとエピソードの間を補完しつつ、テーマにも即した物語をしっかりと作れました。

――ひかるがララに対して「親友」と呼んでいたところは、とくに感動的でしたね。

柳川　「親友」という言葉をあえて本編では使ってこなかったので、あの言葉はとても重いですよね。最終話まで観た方がキャラクターショーのあのシーンを観るとジーンとくるんじゃないかと思います。

田中 あそこはふたりだけのシーンにしたかったですし、みんながこれまで観てきたエピソードも盛り込みたいと思っていました。だからおにぎりを持たせたんです。48話の別れのシーンをより強く感じられるエピソードにできたらと考えていましたが、声の演技とアクターの方の演技に助けられて、考えていた以上にすばらしいシーンになりました。

——プレミアム公演で行われた朗読劇「15年後の再会」についてですが……。まさか、ひかるたち5人がお酒を飲んで愚痴ったり泣いたりする、はっちゃけた展開になるとは思っていなかったので驚きました。

田中 朗読劇を作る際にとくに強く考えたのは、15年後のひかるたちは、プリキュアの力も失っているし、しっかりした大人になっているということでした。等身大の大人の女性を描こうとした結果が、ああなったんです。15年後をしっとりと描くよりも、楽しくにぎやかにしたいという想いもありました。

柳川 私が「スタプリ」で好きなところって、等身大であることを大切にしているところなんです。女の子の人生のうち、10代なかばのわずかな時間を切り取ったのが「プリキュア」の物語ですけれども、じゃあプリキュアでなくなったあとは、物語は終わってしまうのか？ 一番いい時期がプリキュアなのか？ と。「プリキュア」シリーズを担当するなら、プリキュアになったときの自分だけじゃなく、プリキュアの力を失ったあと、自分たちの力で輝いているというのを描きたかったんですね。朗読劇は、そんな30歳前後の女性のリアルを描いているので、「等身大の彼女たちを描く」というところに通ずると思ったんです。念のため補足しますとユニだけは女性とも言い切れませんが。あの朗読劇は、かつてプリキュアだったひかるたちも、私たちと同じ人間なんだと気づかせてくれる。「スタプリ」は宇宙にも行くし、宇宙人も出てくる作品ということで、「ぶっ飛んでいる」と表現する方もいるんですが、一方で人の考えがそう簡単に変わらなかったり、人との距離感が縮まらなかったり、考えが理解できないままだったり、最終的にはプリキュアの力を失った15年後の姿を描いたりと、とても現実的で、地に足がついたところがあるのが魅力だと思っていまして、朗読劇はそんなリアリティーがありました。何よりキャストの皆さんも集大成としてすごく楽しんでくださっていてうれしかったですね。ただ、最終日は収録が入るからほどほどに、という話が完全にフリになっちゃうくらいにはっちゃけているなとは思いましたけど(笑)。

田中 台本自体には、かなりきっちりとセリフが書かれています。アドリブに関しては適宜お願いしますくらいのオーダーでした。千秋楽は、すでに3回朗読劇を行っていたせいか、アドリブの入れどころもわかっていて、だいぶ慣れたというか、こなれたというか……。収録に合わせてちょうどいい感じになったと思います（笑）。

——「感謝祭」も含め、「スタプリ」としての大きな物語がひと区切りとなったことについて感想をお願いします。

田中 2018～2019年にかけての「HUGっと！プリキュア」を中心とした「プリキュア」15周年プロジェクトにも携わりましたが、シリーズとしては15周年でひと区切り。その後の新しい「プリキュア」をどうスタートするかというところで、「スター☆トゥインクルプリキュア」では、TVはもちろん、映画、ライブ、キャラクターショー、そして感謝祭と、全方位的に楽しんでもらう方法をずっと考えながら関わりました。宮元SD、村山さんはもちろん、キャストにもすごく影響を受けてキャラクター作りをしていきましたし、本当にみんなで作れた作品だったなと感じています。先頭を切って引っ張ってくれたのはもちろん宮元さんでしたが、多くのクリエイターの方々、玩具など手に取れる商品に関わる方々、みんなで作ったという感覚はとても強いです。多くの方の想いやアイデアがあって、エピソードや企画も膨らみ、最後までまとまっていけたのだなと感じています。先ほど「感謝祭」でのキャラクターショーの話をしましたが、友達の娘が「スタプリ」とお別れをしたくないと言って、ずっと泣いていたそうなんですね。でも、大阪会場では最後にプリキュアと握手会があったので、そこで「スタプリ」と握手をして少し元気になり、「ヒーリングっど♥プリキュア」とも握手をして笑顔になってくれた。最後には、「ヒーリングっど♥プリキュア」も応援しようと思ってくれたそうで、それがすごくうれしかったです。

柳川 番組は終わってしまいましたが、この世界のどこかでひかるたちの人生が続いている気がして、いまだに余韻に浸っています。スタッフであーだこーだ言いながら企画製作した日々が懐かしいです。最初は10数枚の企画書だったんです。そこからひとり、またひとりとスタッフが増えていき、ここまで大きな展開になりました。もちろん、当初考えていた形から大きく変わった部分もたくさんあります。でもそれは悪いことではなく、スタッフやキャスト、すべての関係者のイマジネーションが広がっていった結果なので、ある意味自分の元から巣立っていく感覚がうれしくもあるんです。イマジネーションってこんなに大きくなるということを実感させてもらえましたし、その感動を肌で感じることができました。

——では、1年間応援してくれたファンに向けて、メッセージをお願いします。

柳川 人生のうちの1年間に寄り添わせてもらえるって、すごいことですよね。毎週楽しみにしてくださった方に、感謝の気持ちを伝えたいです。最近は、「宇宙いっぱいのありがとう」とか「さよならはさよならじゃない」とかそんなことばっかり関係者同士でも言いあっている気がしますが……。

田中 製作中に僕たちの気持ちを表現するようなワードが出過ぎたんですよ（笑）。

柳川 そうなんですよね。歌詞でもシナリオでも演出でも、私たちが皆さんに伝えたいことが散りばめられているので、ついそれを借りたくなっちゃうんです。コンセプトをはっきり提示できていたからか、関係者が同じ方向を向くことができたのが印象に残っています。

田中 じゃあ、私からいきますね。ターゲットとしているお子さんはもちろん、観てくださっている方々に、とても助けられた1年でした。皆さんからのご意見や反応、キャラクターショーでのお子さんの反応や応援は、現場で作っている人間の力になっています。きれいごとではなく、一緒に作品を作っていただいていると感じていました。支えてくださって、1年間応援してくださって、本当にありがとうございます。

柳川 プリキュアの映画でも「プリキュア頑張れ」という声援が大きな力になるように、我々スタッフにとっても皆さんの応援が大きな励みになっています。「スタプリ」を観てくださったお子さんたちのイマジネーションが大きく育っていき、今は真っ白なノートにどんなカラフルな未来が描かれるのかとても楽しみにしています。これからもイマジネーションを大切にしていってください。ありがとうございました！





Movie Guide

映画での『スター☆トゥインクルプリキュア』の活躍はこちら！

本作は『スター☆トゥインクルプリキュア』の映画デビュー作となる。2019年3月16日に公開され、『スター☆トゥインクルプリキュア』のほか、『HUGっと！プリキュア』『キラキラ☆プリキュアアラモード』の3世代の共演となった作品だ。

星を見ることが大好きな中学生の星奈ひかるがある日突然、宇宙へとワープしてしまう。そこでひかるが、宇宙の灯火となるミラクルライトを作る職人の見習いであるピトンと出会い、一緒にミラクルライトにまつわる秘密に迫っていこうとする物語。宇宙の星々にバラバラに飛ばされてしまった3世代のプリキュアが交流する姿が微笑ましく描かれる。一方、ひかるたちはなぜか惑星ミラクルの大統領から、プリキュアのニセモノだと言われ、追いかけられてしまう。さらに、ミラクルライトの光が真っ暗になり、伝説の宇宙大魔王までもが復活してしまうのだ。

まだまだプリキュアとしては初心者だったスター☆トゥインクルプリキュアは、戦いに戸惑うことがたくさんあった。しかし、先輩プリキュアに励まされ、見守られながら、少しずつ成長していく。TVシリーズでは、みんなを引っ張っていく快活さを持つひかるが、宇宙での戦いに困惑するという新鮮な姿も見られた本作。初々しさたっぷりのスター☆トゥインクルプリキュアの姿を、改めてチェックしてみよう。



映画☆プリキュアミラクルユニバース

スター☆トゥインクルプリキュアがミラクルライトの見習い職人と大冒険！



▲ピトン（左端）は、一人前のミラクルライト職人になりたがっていた



◀宇宙を股にかけて、ドタバタの大騒ぎをしていく3世代のプリキュア



▶宇宙大魔王（奥方）の正体は、じつは意外な人物だった……!?

http://www.precure-miracleuniverse.com/
●2019年3月16日公開
■STAFF　原作／東堂いづみ　監督／田中裕太　脚本／村山功
総作画監督・キャラクターデザイン／松浦仁美　音楽／林ゆうき、橘麻美
美術設定／升井秀光　美術監督／高木佑梨、渡辺佳人　CGディレクター／高橋賢太郎
色彩設計／竹澤聡　撮影監督／高橋賢司　アニメーション制作／東映アニメーション
OPテーマ／宮本佳那子「プリキュア！カナYell☆ミラクル」
EDテーマ／北川理恵「WINくる！ミラクルユニバース☆」
■CAST　星奈ひかる（キュアスター）／成瀬瑛美　羽衣ララ（キュアミルキー）／小原好美
天宮えれな（キュアソレイユ）／安野希世乃　香久矢まどか（キュアセレーネ）／小松未可子
フワ／木野日菜　プルンス／吉野裕行　野乃はな（キュアエール）／引坂理絵
薬師寺さあや（キュアアンジュ）／本泉莉奈　輝木ほまれ（キュアエトワール）／小倉唯
愛崎えみる（キュアマシェリ）／田村奈央　ルールー・アムール（キュアアムール）／田村ゆかり
はぐたん／多田このみ　ハリハム・ハリー／野田順子、福島潤
宇佐美いちか（キュアホイップ）／美山加恋　有栖川ひまり（キュアカスタード）／福原遥
立神あおい（キュアジェラート）／村中知　琴爪ゆかり（キュアマカロン）／藤田咲
剣城あきら（キュアショコラ）／森なな子　キラ星シエル（キュアパルフェ）／水瀬いのり
ペコリン／かないみか　長老／水島裕　大統領／田中裕二（爆笑問題）　ヤンゴ／梶裕貴
ピトン／小桜エツコ　ほか

Interview

【監督】

貝澤幸男

【かいざわ・ゆきお】
アニメ演出家、アニメ監督。主なシリーズディレクター担当作は、「キラキラ☆プリキュアアラモード」「暴れん坊力士!!松太郎」など。



——物語の方向性はどのように決めましたか?

スタート時点では、ある星のキャラクターが思わぬ罪を着せられ、星々を逃走するという話でした。シナリオを進めていくうちに、映画館で子どもたちが使用するミラクルライトは、映画のなかの世界で作っているというアイデアが浮かび、舞台となる宇宙に「ミラクルライトを製造する星々」という設定を盛り込む流れに変えました。今まで宇宙といえば男の子ものが主でしたから、女の子向け作品のストーリーにどのように組み込めばいいか不安な部分がありましたが、TVシリーズの宮元宏彰シリーズディレクターから渡されたきらびやかで宝石が浮かぶような1枚のイメージイラストを見て、ようやく世界観が見えてきました。

——ミラクルライトは、『プリキュア』シリーズの映画では、子どもたちが振ってプリキュアを応援する定番のアイテムですよね。

今回の映画で描いたミラクルライトの機能は、その設定自体が映画のテーマとしてつながっています。その機能のひとつは「想いを輝かせる力」。ふたつ目は「想いを繋げる力」。3つ目は「想いを信じる力」。この3つの機能を描くことで、映画のなかの非常に重要な役割を負っています。

——「スター☆トゥインクルプリキュア」のキャラクターは、どう描こうと考えましたか?

彼女たちは、この映画の主人公。とくにひかるは宇宙人のピトンとともにこの映画を引っ張っていく大事な中心人物です。映画とTVシリーズの製作は同時進行だったので、製作当時はキャラクターに関しての設定がほとんどなく、TVシリーズのスタッフから口頭で説明を聞かせてもらい、それを映画の資料としてまとめながら、映画のなかの彼女たちのイメージを詰めていきました。上映期間はちょうどTVシリーズで4人のキャラクターが出そろうころになります。ですから、まだチームとして完璧に機能していない、成り立てのプリキュアの初々しさを出せるようにしました。

——「HUGっと!プリキュア」「キラキラ☆プリキュアアラモード」のキャラクターとはどう関わらせようと考えましたか?

彼女たちはスター☆トゥインクルプリキュアから見れば、数々の難問を解決してきたプリキュアの大先輩。プリキュアの先輩後輩の対比が、キャラクターを描く際のひとつのヒントになりました。しかし、歴代のプリキュアのチームに、先輩と後輩という分け隔てはなく存在していない。ですから、先輩後輩の対比を描きながら、その表現には気を遣いました。

——とはいえ、舞台となる宇宙に慣れているという意味では、ひかるたちのほうが先輩になりますよね?

そうですね。スター☆トゥインクルプリキュアはプリキュアとしては初心者ですが、宇宙慣れという意味ではほかのプリキュアが及ばない経験を持っています。ですから、先輩プリキュアに自分たちのいいところを見せたいと張り切った末に、それが失敗につながるようにしました。ただ、スタートから失敗をしても、ミラクルライトの3つの機能を先輩プリキュアから学び、自分たちの力として発揮していく形になったんです。

——ひかる／キュアスターはどのように描こうと考えましたか?

ひかるはノーテンキで明るく、考えるよりは行動するキャラクターですが、天性的な直感力がある。この直感力は、ひかるのやさしさや物ごとへの想いを素直に行動に反映させた結果です。ほかの3人のプリキュアが憩かれ、自然と行動をともにしていくような、特別な魅力を持ったキャラクターとして描きました。ひかるは、野乃はなをはじめとするHUGっと!プリキュアメンバーと行動をともにしますが、はなたちはひかるが先走ったアクションをしても、それを否定することなく、ひかるの天性を見抜き、自分を信じることを学ばせることにしました。映画では、ひかるに自分への自信を学ばせるために、TVシリーズより戸惑うシーンが多くなってしまったかもしれません。

——ひかるとともにメインとなるピトンについては?

見たとおりのひよこのキャラであり、本編で「ひよっこ」と呼ばれるミラクルライト職人の見習いですが、物ごとに対して真剣に取り組むような、純粋な心を持ったキャラではありません。しかし、自分がなりたいものへの「想い」は誰にも負けない。自分が密かに作ったミラクルライトを首に下げているのも、その「想い」の表れです。ただ、「想い」は抱くだけでなく、その想いが向く先にあるものと、そのものへの行動が重要な鍵になる。それこそ、ピトンが学ぶ課題でした。ピトンもスター☆トゥインクルプリキュアも同じ見習いですが、大きな違いは応援する側と応援される側であること。応援する側であるピトンは、単にミラクルライトを振ればいいのではなく、「想い」を届けるという、応援する側の重要な役割に気がついていきます。また応援される側であるスター☆トゥインクルプリキュアもその「想い」をしっかりと受け取り、それに応えるという重要な点を学んでいくのです。ともに見習いでありつつも、応援する側と応援される側を「想い」でつなげることが作品のテーマにつながっています。

——3世代のプリキュアの交流を描いてみての感想を教えてください。

自分がシリーズディレクターを担当した『キラキラ☆プリキュアアラモード』のプリキュアもフル出場ということで、映画そのもののテーマが描きやすくなるのではないかと考えました。『キラキラ☆プリキュアアラモード』の最終話で『HUGっと!プリキュア』のプリキュアとの交流がありました。そのときは『キラキラ☆プリキュアアラモード』の宇佐美いちかの夢である「自分のスイーツが生み出す笑顔をさらに遠くに広げたい」という想いをしっかりと気がつかせてくれる存在として『HUGっと!プリキュア』のはなを描きました。そして、その想いを叶えるために街を去ることを躊躇していたいちかが、はなと一緒に戦ったことで、街を守るのは自分ひとりでないと気づく。映画でもこうしたつながりをしっかり描いていこうと考えました。

——最後に、応援してくれているファンへメッセージをお願いします。

映画館の入り口でミラクルライトをもらい、上映中に一生懸命ミラクルライトを振る子どもたちの姿は感動ものです。ですから、本作では応援する子どもたちと応援されるプリキュアを映画館という場所で一体化する映画を目指しました。妖精には映画の世界と観客席を結ぶ橋渡しをしてもらい、子どもたちは、観客と映画の世界がひとつになったように感じることができたのではないかと思っています。『プリキュア』は、観た人がそれぞれ自分のなかにプリキュアの世界を作り上げて楽しんでいます。それは観る方だけでなく、映画を作る私たちも同じ。今回の映画では、エンドタイトル（一番最後の止めの絵）がその表れです。キャラクターデザインの松浦仁美さんが、観てくれた人に感謝を絵として届けたいということで実現した絵なのです。また、松浦さんは星々の住民たちにプリキュアが賞賛されるシーンで雰囲気のあるガウンを描いてくれました。撮影処理でラメを入れたのも、松浦さんのアイデアです。単に線で描かれたキャラクターをデザインするだけではなく、どのように素敵な映像になって子どもたちに届けられるかを考えていただいた結果だと思います。ここまで多くの人数が登場する映画の製作は大変ですが、こうした場面でも、プリキュアへの愛が危機を救ってくれる。スーパープリキュアのシーンは、CG部が力を貸してくれました。このように、『プリキュア』はTVも映画もスタッフの愛によって作られ、そのように作られた『プリキュア』がたくさんの『プリキュア』ファンの愛によって支えられているのも間違いではないでしょう。作る側も観る側も、分け隔てない『プリキュア』への愛が、『プリキュア』をひとつの大きな世界にしているのです。これからもスタッフ一同頑張りますので、皆さんも一緒に『プリキュア』を応援していきましょう。





映画スター☆トゥインクルプリキュア 星のうたに想いをこめて

“うた”で心を通わせる プリキュアとユーマの絆の物語



▶ララのコスモグミケースから飛び出してきた金平糖の形をした存在が、だんだんと成長していく

https://www.precure-movie.com/
●2019年10月19日公開
■STAFF　原作／東堂いづみ　監督／田中裕太　脚本／田中仁
総作画監督・キャラクターデザイン／小松こずえ　音楽／林ゆうき、橘麻美
美術監督／今井美紀　CGディレクター／大曽根悠介　色彩設計／竹澤聡　撮影監督／高橋賢司
アニメーション制作／東映アニメーション　映画主題歌／知念里奈「Twinkle Stars」
■CAST　星奈ひかる（キュアスター）／成瀬瑛美　羽衣ララ（キュアミルキー）／小原好美
天宮えれな（キュアソレイユ）／安野希世乃　香久矢まどか（キュアセレーネ）／小松未可子
ユニ（キュアコスモ）／上坂すみれ　フワ／木野日菜　プルンス／吉野裕行
星空刑事 メリー・アン／知念里奈　ほか

「スター☆トゥインクルプリキュア」初の単独映画は、2019年10月19日に公開された。ひかるたちが出会うことになった不思議な生物ユーマをめぐる物語だ。

ある日、ノットレイダーと戦っていたスター☆トゥインクルプリキュアは、そこに現れた星空刑事 メリー・アンと一緒にノットレイダーを撃退。その後、アンがずっと追いかけている怪盗ブルーキャットを捕まえようとすると、ユニはララのロケットで飛び立ってしまう。家代わりにしていたロケットがなくなったララは、ひかるの家に泊まることになり、そこで金平糖のような形をした不思議な生物と出会う。その謎の生物にユーマと名付けたひかるとララ。言葉は通じないが、音やミラクルライトに込めた想いに反応するユーマの力で、世界の不思議スポットを巡り、だんだんとユーマと“うた”で心を通じ合わせていく。幸せな日々を過ごすなか、ユーマの正体が将来惑星になる「スタードロップ」であることが明らかになる。惑星になるためには、ひかるやララとは別れなければならない。

ひかるがユーマとの別れを受け入れる一方で、頑なにそれを拒もうとするララ。ユーマへの愛情と、ユーマとの出会いと別れ、その先にある希望を見事に描いた本作。ひかるたちがユーマに歌いかける「ながれぼしのうた」も美しく、観ている人々の心にやさしさと感動を呼び起こしてくれる作品となった。



▲プリキュアは12星座ドレスを身に纏い、敵に立ち向かう



▲ララは別れることのつらさを、素直に表に出していたが……





イメージビジュアル

◀映画公開前に発表されたイメージビジュアル。地球から宇宙を見た「地球Ver.」と宇宙から地球を見た「宇宙Ver.」の2種類。流星群がふたつの絵をつなげる仕様となっている
●イラスト／いなとめまきこ

Interview

【監督】田中裕太

【たなか・ゆうた】
アニメ演出家、アニメ監督。主なシリーズディレクター担当作は、『Go！プリンセスプリキュア』。監督作は「映画魔法つかいプリキュア！奇跡の変身！キュアモフルン！」。



――TVシリーズとしての『スター☆トゥインクルプリキュア』は、どんなところが魅力的だと感じていましたか？

宇宙が舞台ということで、たくさんの星や宇宙人が出てきて世界観がバラエティーに富んでいます。話の持っていき方でファンタジーからSF、ギャグとシリアス、いろんな方向に振ることができそうで、単発の話のバリエーションが出せそうでした。

映画の前に15話のコンテを担当しましたが、地球とはまったく違う場所でいろんな宇宙人がいて、普段のシリーズとは一風変わった話をやることができて楽しかったです。もしもっとTVシリーズをやることができていたら、もっともっと変な星に行く話とかやってみたかったですね。

――監督のオファーをされたときの感想は？

秋映画は以前一度やったことがあったので最初はどうしようかと迷いましたが、村瀬亜季プロデューサーの熱い説得により引き受けることになりました。また、私自身は「HUGっと！プリキュア」のオールスター回を担当して以降かなり疲弊していて、TVシリーズで短期的なローテーション演出に入るよりは、シナリオからタッチしつつ腰を据えて1本の作品に取り組みたいと思っていたのもあります。引き受けた段階では内容的にはまったくの未定でしたが、前回の映画とどう差別化しようかとはぼんやり考えていました。

――そんななかで、物語のテーマや展開はどう決めていったのでしょうか？

大まかに、「ダブルヒロイン」「歌」「ロマンチック」という3つのキーワードが最初に村瀬Pから提示された要素でした。それを念頭に置きつつ、「スタプリ」のモチーフである宇宙とどう絡めるか、そして全体の印象としてどのような映画とするべきか、その着地点を探ることから始めました。そうして、メイン視聴者の女の子が中心でありつつも、老若男女を問わず、付き添いで観に来た親世代を含めて家族みんなで楽しめる作品とし、TVの延長というよりも、きちんと1本の「映画」にするというのが大きな目標となりました。歴代映画でもやっていたことではあるのですが、こちらの想定より映画自体の魅力が思ったより観客に届いていないかったのではないかという予想と、昨年が15周年記念でオールスターのお祭り映画だったこととの差別化も含め、改めて単体作品映画としての魅力と価値をきちんと高めようという意図です。

方向性が決まったあとは、脚本の田中仁さんが「星の誕生を描きたい」という大まかな物語のイメージを提示してくれて、そこから全体の構図を考えはじめたと思います。結果として、未知なる存在との出会いと別れというオーソドックスな構図の物語ですが、宇宙規模の大きなスケール感やクライマックスをバトルでなく歌にするなど、歴代作品との差別化は図れたのではないでしょうか。

ひとつ意図的なチャレンジとして課したのが、メインゲストキャラであるユーマを「しゃべらない存在」としたこと。ひかるはララをはじめとした宇宙の存在と出会いながら作品のテーマである多様性を知っていくわけですが、言葉も通じない、そもそも生物なのかなんなのかもよくわからない物体と出会い、どう接するかということから、さらなる多様性の拡張が描けるのではないかと考えました。

人間のキャストをつけて鳴き声的なお芝居をしてもらうのが一般的かと思いますが、あえてそれも外し、不思議な「音」でコミュニケーションをすることで宇宙から来た不思議な存在であることを強調したいと思いました。これは演出的な意味での自分の挑戦でもありました。

――今回の映画は、ララの成長物語としての側面も強かったように感じます。ララにスポットが当たった理由は？

ひかるは宇宙人やUMAの存在を信じていて、自分たちの感覚でいえばちょっと変わった人です。対してララは異星人ではあるものの常識人で自分たちの感覚に近い存在であり、観客が見てわかりやすい感情、ドラマが描けるのはララのほうだと思ったからです。また、映画の公開時期を考えると、ひかるは主人公としてそこそこ成長していそうだけど、ララの方はまだ伸び代というか、掘り下げる余地が残っていそうだなとも思いました。そうしてひかるとララのふたりを物語の中心として考えていった結果、物語の主観が少しララに傾いてきたという感じでしょうか。

――ユーマに対して、別れを受け入れるひかると、別れたくないというララ。ふたりの対比はどう描きたいと考えていましたか？



ひかるとララが宇宙から来た不思議な存在と出会い、それを中心に互いが影響を与えあう。お互いの要素がお互いに少しずつ入りあう。TVシリーズを含めて成長を重ねたひかるは、当初の型破りな性格のなかにララ的な理性的な部分、他者の立場に立って考えるという要素が芽生え、反対に、効率優先で理性的だった（あるいは大人ぶっている）ララはひかるやユーマとの交流を経て、感情で動くという未熟な人間らしい要素が生じてくる……そんな形でふたりの交流と成長が描ければと考えました。

――目での感情表現が豊かで、表情をあえて全部映さないという絵作りも印象的でした。

演出論的な話になってしまいますが、観客は顔や表情が見えないと無意識的にセリフに耳をすまし、感情を読み取ろうとしてくれます。人物が話しているとき、何を思っているのか、どんな感情でいるのか……それはつまり、観ている人に想像してもらいたいということです。

なんでもかんでもセリフで説明してしまうのは無粋なので、演出としてはなるべく無駄な言葉をそぎ落として絵（描写）で見せたいという想いがあります。ですが、「プリキュア」の場合は対象が幼いので、内容を正しく伝えるためにある程度はきちんと言葉で説明することも必要です。どれくらい言葉で説明し、どこからを絵に託すのか。その辺のバランスは今回の映画に限らずつねに気をつけるようにしています。



――Blu-rayなどでを観返す際に注目してほしいポイントは？

関わってくれたスタッフが全力で取り組んでくれたので、見どころでない箇所はありません。その上で言うなら（視聴環境はさまざまだと思いますが）、できればなるべく大きな画面で観てほしいです。地球と宇宙を感じてください。

――最後に、応援してくれているファンへメッセージをお願いします。

どのシリーズにも言えることですが、番組自体は1年で終わっても、そこで生まれた物語や世界は観た人の心のなかに生き続けます。それこそ、イマジネーションがある限り物語は続いていきます。「スタプリ」が、そして「プリキュア」シリーズ全体が、いつまでも誰かの心に、宇宙の星のように輝き続けるとうれしいですね。



https://spring.precure-movie.com/

同じ"今日"の世界から飛び出すために プリキュアが力を合わせる！

●近日公開　※最新情報は公式サイトを確認してください
■STAFF　原作／東堂いづみ　監督／深澤敏則　脚本／村山功
キャラクターデザイン・総作画監督／板岡錦　音楽／寺田志保　美術監督／渡辺佳人
CGディレクター／大曽根悠介　色彩設計／佐久間ヨシ子　撮影監督／髙橋賢司
アニメーション制作／東映アニメーション
■CAST　花寺のどか（キュアグレース）／悠木碧　沢泉ちゆ（キュアフォンテーヌ）／依田菜津
平光ひなた（キュアスパークル）／河野ひより　ラビリン／加隈亜衣　ペギタン／武田華
ニャトラン／金田アキ　ラテ／白石晴香　星奈ひかる（キュアスター）／成瀬瑛美
羽衣ララ（キュアミルキー）／小原好美　天宮えれな（キュアソレイユ）／安野希世乃
香久矢まどか（キュアセレーネ）／小松未可子　ユニ（キュアコスモ）／上坂すみれ
フワ／木野日菜　プルンス／吉野裕行　野乃はな（キュアエール）／引坂理絵
薬師寺さあや（キュアアンジュ）／本泉莉奈　輝木ほまれ（キュアエトワール）／小倉唯
愛崎えみる（キュアマシェリ）／田村奈央　ルールー・アムール（キュアアムール）／田村ゆかり
はぐたん／多田このみ　ハリハム・ハリー／野田順子、福島潤　ミラクルン／[illegible]
リフレイン／平田広明　ほか

近日公開される「プリキュア」シリーズの映画最新作。最新のプリキュアである「ヒーリングっど♥プリキュア」と「スター☆トゥインクルプリキュア」「HUGっと！プリキュア」の3世代が登場。同じ"今日"を繰り返すという不思議な事件に、協力して立ち向かっていく。

ヒーリングアニマルのラビリンやラテと一緒に、平光(ひらみつ)ひなたの家へと向かっていた花寺のどか。みんなで宿題をやったあと、お花見に行く約束だったのだ。その途中、キャンプに出かけようとしていたスター☆トゥインクルプリキュアや、温泉に行く途中だったHUGっと！プリキュアのメンバーと出会ったのどかは、少しだけ交流をしたのち、無事にひなたの家へとたどり着いた。しかし、そこに精霊・ミラクルンが現れる。ミラクルンは、謎の敵・リフレインに追われていた。ミラクルンを助けるために変身したのどかたちは、スター☆トゥインクルプリキュア、HUGっと！プリキュアと力を合わせて立ち向かうが、突如まばゆい光に包まれる。目覚めたのどかは同じ1日が繰り返されていることに気づくのだった……。

同じ1日が繰り返されていることを知っているのは、のどかたちヒーリングっど♥プリキュアの3人だけ。はたして、この不思議な現象の原因はなんなのか。そして、のどかたちは無事に"明日"へと向かうことができるのだろうか。


▲総勢13人のプリキュアが、それぞれ力を合わせて敵と戦っていく


▲左からのどか、沢泉(さわいずみ)ちゆ、ひなた。みんなでお花見を楽しもうとウキウキしていたが……


◀右端が精霊・ミラクルン。ミラクルンライトを生み出す力を持っている

『スター☆トゥインクルプリキュア』の活躍は？

のどかたちが暮らすすこやか市が「キラやば〜っ☆」なくらいに星が見えると知って、キャンプにやってきたひかるたち。リフレインと戦おうとするヒーリングっど♥プリキュアに全力で力を貸す。圧倒的な力を持つリフレインを前に、くじけそうになるヒーリングっど♥プリキュアを励まし、ミラクルンを助けたいという想いを信じればいいと助言。一生懸命なヒーリングっど♥プリキュアたちを支え、力になるスター☆トゥインクルプリキュアの姿が見られる。



▶全員集まっての記念撮影？楽しいことが大好きなみんなはすぐに仲よくなれるはず



▶ひなたの家へと急いでいたのどかは、ひかるにぶつかって助けてもらう



▶キュアエールに変身する野乃はな（左）は、出会い頭にのどかと激突！



▶ミラクルンライトの光を集めることで、リフレインに対抗できるはず……？



▶後方にいるのがリフレイン。"昨日"をつかさどる精霊なのだが……



◀どんなに強大な敵が相手でも、13人で力を合わせれば、絶対に負けない！



▲みんなの応援の力で、キュアグレースは「スーパーグレース」へと変身！

スター☆トゥインクルプリキュア オフィシャルコンプリートブック Official Complete Book

CD Information

●発売元：マーベラス

CD+DVD　CD



スター☆トゥインクルプリキュア
前期主題歌シングル
CD+DVD:2,000円、通常盤:1,200円(各税別)

CD+DVD　CD



スター☆トゥインクルプリキュア
後期主題歌シングル
CD+DVD:2,000円、通常盤:1,200円(各税別)



「スター☆トゥインクルプリキュア」
イメージソングファイル
3,000円(税別)

CD+DVD　CD



「映画スター☆トゥインクルプリキュア
星のうたに想いをこめて」主題歌シングル
CD+DVD:2,000円、通常盤:1,200円(各税別)

Package Information

●発売元：マーベラス

Blu-ray 全4巻

Vol.1～3、発売中。Vol.4、2020年6月24日発売。
●各23,000円（各税別）、各12話収録（Vol.4は13話収録）



DVD 全16巻

Vol.1～14、発売中。Vol.15～16、2020年6月24日発売。
●各3,800円（各税別）、各3話収録（Vol.16は4話収録）



2020年6月4日　第1刷発行

発 行 人　土本学
編 集 人　水谷隆介
企画編集　佐藤純平
発 行 所　株式会社イード
〒163-0228　東京都新宿区西新宿2-6-1
発 売 元　株式会社学研プラス
〒141-8415　東京都品川区西五反田2-11-8
印 刷 所　凸版印刷株式会社

編　　集　水野二千翔
後藤悠里奈

編集・執筆　野下奈生（アイプランニング）
宮村妙子（アイプランニング）
草刈勤

デザイン　坂井容美（CUiR WORKS）
小西美穂（CUiR WORKS）

カバー＆表紙イラスト
原画／高橋晃

製作協力　東映アニメーション株式会社
東映株式会社
株式会社マーベラス
株式会社ABCアニメーション
（順不同）

（本誌に関する各種お問い合わせ先）
●本の内容については、電子メール megami-magazine@iid.co.jp（編集部）
●在庫については、電話03-6431-1205（販売部直通）
●不良品（落丁、乱丁）については、電話0570-000577
学研業務センター　〒354-0045 埼玉県入間郡三芳町上富279-1

MAIN STAFF

シリーズディレクター／宮元宏彰　シリーズ構成／村山功　音楽／林ゆうき、橘麻美
キャラクターデザイン／高橋晃　美術／増田竜太郎、いいだりえ
製作担当／澤守洸、堀越圭文　色彩設計／佐久間ヨシ子
プロデューサー／佐藤有(ABCテレビ)、田中昂(ABCアニメーション)、
矢崎史(ADKエモーションズ)、柳川あかり

CAST

キュアスター、星奈ひかる／成瀬瑛美　キュアミルキー、羽衣ララ／小原好美
キュアソレイユ、天宮えれな／安野希世乃　キュアセレーネ、香久矢まどか／小松未可子
キュアコスモ、ユニ／上坂すみれ　フワ／木野日菜　プルンス／吉野裕行　ほか